
Ziel

高宮 かしお

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Z i e l

【Nコード】

N 5 2 1 7 0

【作者名】

高宮 かしお

【あらすじ】

「ダイエットしたいなら、オレと契約しない？確実に痩せるよ。」豪語したのはそう、大学内でも有名男、モデルの『加藤 律』。彼氏に振られたばかりのゆかりは、丸め込まれて結局、律と契約成立果たしてゆかりは元カレと復縁出来るのか？それとも…。*注*こちらの作品は自己サイト「かしお乃」にも同時掲載です。

第一章 別れ？と出会い

厚いアイシングが層になったどっしりとした一切れのキャロットケーキが、深緑色のガラスのケーキ皿の上に乗って運ばれ、湯気を立てるコーヒーと一緒にテーブルの上に置かれた。皿の縁が、店の照明に反射し、光っている。ゆかりの目には、ケーキ自体が光っている様に見えた。

駅から少し歩いた、ビルの三階にあるこのカフェは、いつも行けば大抵席が見つかった。

さほど大きくないが、デコレーションされているフレンチ雑貨などの出しゃばりすぎず、センスの良い内装が、ゆかりを一人でもよくここに足を運ばせた。

しかし、今日は珍しく目の前に、彼氏である坂下^{わたる}渉が、コーヒーのカップを傾けている。

一緒にお茶するなんて、どのくらいぶりだろう。

ゆかりは嬉しさで頬が緩んでしまうのをこまかすかの様に、ケーキを一口頬張った。

キャロットケーキの独特の強いスパイスが口の中で弾け、クリームチーズの甘酸っぱいシャリシャリとしたアイシングが舌の上で溶ける……。

「はぁ……」

美味しくて、ついため息が出た。

渉がそれに気がつき、ゆかりをちら、と見る。カップをソーサーに置く。

「おまえ、すげー幸せそうだな。それって、久々にオレと逢ってるから？ それともケーキ喰ってるから？」

渉は大きな目でゆかりを見ている。

彼のくつきりした、まっすぐな眉の下の黒い瞳は、ある意味武器であつた。

彼がリングの上に立てば、その瞳は闘志に燃える。その瞳にゆかりは一瞬で惹かれた。男に対しても女に対しても、そう言う意味で、武器だつた。

「両方よ」

ゆかりは渉の問いに上機嫌で答え、もう一口、ケーキを口に運ぶ。

ゆかりと渉は付き合つて一年近くになる。

ゆかりの幼なじみがS大のボクシング部のマネージャーをしていて、彼女にS大の学園祭に誘われた。その時練習試合でリングに立つ渉に、ゆかりは一目惚れしたのだった。それから少し時間はかかったが、その幼なじみが二人の仲を取り持ち、晴れて付き合いが始まつたのだった。

「ふうん」

渉は窓際に肘をついて、窓の外に目をやる。空はもうほとんど藤色だつた。

「どうかしたの？」

ゆかりはフォークを置き、尋ねた。

渉はもともと口数の少ない方だつた。それでも今日は渉の方から話がある、と、このカフェにゆかりを呼び出したのだ。

それが席についてから時間は経つのに、ぼつりぼつりと、ボクシング部の近況やら、最近のヒットチャートの話をしたりと、的を得ない。

「まあ、私はいいよ。今日はバイトが無いし、時間あるから。渉に合わせるよ」

と、再びフォークを取る。

「はあ」

今度は渉が大きなため息をついた。

彼は肘を下ろし、テーブルの上で両手を合わせた。生徒と面談している教師の様に。

ゆかりはもぐもぐと口を動かしながら、セーターを肘までたくし上げている、その逞しい腕に視線を落とした。鍛え抜かれた美しい筋肉。

「お前さ、オレに合わせるとか言うの、よしてくれない？」

渉はじつとゆかりを見ている。

「え？ 何？ どういうこと？ ただ私は今日は時間がある、って言いたかったただけだ。何？ 気に触ったなら謝るよ。ごめんね」
「いや、べつに謝ってもらわなくてもいいんだけど。ゆかりってさあ、そうやっていつもオレに合わせようとするだろ。なんか最近そう言うのウザいっていうか、いや、ウザいって言うのはちよつとアレかもしれないけど、『自分が無いのかよ』って突っ込みたくなるっていうか……そう、何かオレ、おまえのやりたい事とか、必死で何かをしようって言う所とか見えないんだよね。オレ、正直言つて女だけじゃなくて、人間として、そうやって自分を磨いてないヤツに魅力を感じないんだ。まあ、でもおまえは基本的にいいヤツだし、一緒にいて楽しいし、顔もそこそこ可愛いから付き合ってたけど、これからずっと……ってちよつと想像出来ないんだ」

渉はそこで一旦話を区切り、コーヒーを一口飲んだ。

ゆかりは、彼の『話』が、自分が全く想像していなかった方に進んでいることがやつとわかった。

「そ、そんなの私……渉に言われた事は直すよ？ ていうか、それは自分でわかってるけど、『やりたい事がわからない』って、そう言う人はいっぱいいるよ？ 二十歳で渉^{はたち}みたい^{はたち}に自分のやりたい事がきちんとわかってる人ばかりじゃないよ。そう言う人の方が珍しいよ。でも、そんな渉を見て、私も『頑張ろう』って思う時多

いし……」

「ていうかさ、」

渉はゆかりの言葉を遮る。

「おまえ、最近けっこう太ったよな。」

「え？」

ケーキを切り分けていたフォークの動きが止まった。

頬が少し引きつる。

「え、でも少し、だよ。ほら、年末年始とかあったし……」

「ぜってー、嘘。おまえ、オレが何やってるかわかってる？ オレ、体鍛えてんだぜ？ 半端無く鍛えてる人間が、自分の彼女がどれだけ太ったかわかんないわけねーだろ。5kgは増えただろ」

（本当は6kgです）

ゆかりの頭の中で声が響いた。

「オレの事見て『頑張ろう』って思うとか、よく言えるよね。なんかちょっと呆れた」

普段口数の少ない渉が、堰を切った様に喋りだしたのに、正直ゆかりは驚かされた。

「おれたち、別れよう」

渉はきつぱりと、そして短く言った。

ゆかりは俯いた。あと二口で皿の上から姿を消すであろう、キャロットケーキの残りを見つめた。

「それって、私が太ったから別れるってこと？」

「いや、そうじゃなくて……」

「じゃあ、痩せたらまた元通りになることもあるの？」

「いや、それは多分無いだろ。オレ、待つのか嫌だし」
渉は慌てる。

そして彼はポケットから財布を出すと、千円札をテーブルの上に置いた。

「じゃあ、オレこれからトレーニングだから」

彼は席を立つた。

涉が行ってしまってから、しばらく経ち、ゆかりはすっかり暗くなつた窓の外を見た。

目の前の駅ビルに輝く、イルミネーションのSt・Valentine's dayという大きな文字が目^にに滲んだ。

来月の乙女達の大イベント。ゆかりのカレンダーのその欄に予定が書き込まれる事は、今年は、無い。

第一章 別れ？と出会い（2）

ひゅう、と真冬の風が頬を刺す。

冬休み開けての久々の大学。

ゆかりは赤いコートの襟を立て、首をマフラーに埋めて足早に歩く。ラウンジのガラス戸を押して入る。

人の熱で十分に暖まったラウンジの入り口で、ゆかりはほっと息をつく。

コートの襟を直し、ラウンジを進みながら親友の顔を探す。奥に目をやると、探し人がひらひらと頭の上で手を振るのが見えた。いくつものテーブルと、椅子の間を縫って親友に近づくと、コートを脱いで彼女の横に座った。

「今日はまた、随分混んでるのね」

「だって、木曜日ですから。」

「あ、そうか」

「まあ、お茶でも飲みなさいな。寒かったでしょう」

と、知的美人が、自分の横に置いたバッグから魔法瓶を取り出して、カップである蓋に注ぐ。湯気のたつそれをゆかりは受け取り、吐息で少し冷ましてからひとくち、口に含んだ。

「あー、暖まる。ゆうほのブレンドはほんと、美味しい」

ゆうほはワンリングスの髪をさらりと耳にかけ、ありがとう、と微笑んだ。

「それで。何だったの？ 坂下君との逢瀬は」

ゆうほはたまに古い言葉を使う。それはまた、彼女の落ち着いた声にしっくりと合う。

ゆかりは坂下との一部始終を包み隠さず話した。

聞き終わると親友は表情一つ変えずに言った。

「あら、振られちゃったの」

「そう言う事。でもね、なんかまだ実感が湧かないのよ。私たち、

それなりに喧嘩もしたけど、『いわゆる普通の恋人』みたいに、カフェでまったりしたり、街を散歩したり、映画見たり、楽しんだわよ。別に体の相性だつて悪くなかったし……」

「ええ、それは大切ね」

ゆうほはそこで、にやつと口の端を少し上げた。

「だから私にはまだ、彼が冗談を言っている様な気がして……もしくは私をダイエットに駆り立てる最後の手段でやむを得ず……」

「そうね、休み中に確かにあなた、太ったものね？ 久々に会って言うのもなんだけど」

「それを言わないでよ。冬のセールだつて、お気に入りの『メイ』の服が体に合わなくて全然買えなかったんだから。プチショックよ」

ゆかりは、程よい温度になったお茶をコクコクと飲んだ。

「でもね、ゆかり。私、坂下君の言う事はわかるわ。特にああいうボクシングなんてしている戦士系の人はね、常にハングリーでいたいのよ。上下関係とかすごいじゃない。常に何かを吸収し、自分に厳しくいる。そういう環境に自分を追い込みたいんだと思うわ。でも、それに対してあなたはこう、平和そのものを絵に描いた様な人だもの。一緒にいたらつい、ゆるい、ゆかり地区へ流されそうになるのが怖いんじゃないの？ あなたが変わったから振られたわけじゃないのよ」

一呼吸置いて、「体型以外は」と彼女は言った。

「それを言わないでつてば！」

「いいえ、でも『気のゆるみが肉のゆるみ』と言います」

「じゃあ、痩せたらまだ彼とチャンスはあるかもしれない？」

「しれないわね」

「じゃあ、痩せる」

「ほう」

ゆうほはもう一杯お茶を注いだ。

「絶対に」

「どうやって？ 無謀なダイエットは成果が無いばかりか、リバウ

ンドするわよ」

「あー、心配無用。そんなの腐るほどネットにメニューが載ってるわ。今じゃケータイのアプリだってダイエット記録がつけられたり、カロリー計算出来るじゃない。ほんと、便利になったわよね」

え？

ゆかりとゆうほは突然、聞き慣れない声に振り向いた。

振り向いた二人の間に、後ろの席にいた、このラウンジが混む原因の男の顔があった。

「か、加藤君」

ゆうほは予期せぬ色男の出現に、珍しく少し動揺しているようだった。

一方ゆかりは、眉間に皺を寄せ、男を見る。

彼はほとんど構内で見かける事は無い。ゆかりに取って、この距離では初対面と言っても良かった。

彼の事を一言で言う、美しいのかそうでないのかわからなかった。見方次第では対極なのだ。

彼は誰が見ても明らかにハーフだった。

少し前髪が重い感じの髪は、栗の実を思わせる深い茶で、そして「すっ」と上品に筆で撫でた様な直線の眉。やはり髪の色と同じ深い栗色の瞳は、やや目尻が下がり気味だったが、それはいい意味で初対面の人の警戒心を解くのに十二分に働いていた。

そして完璧な歯並びだった。

「痩せたいの？ 君」

加藤、と呼ばれた男が、長い脚で優雅に椅子を跨いで、^{また}その背を抱く様にして体を二人の方へ向けた。

ラウンジのほとんどの女子が彼に視線を留めている。ゆかりはな

んだか居心地が悪かった。それでも、加藤はじつとゆかりを見て答えを待っていた。

「そ、それはあなたには関係ないと思うわ。そんな誰だか知らない人に」

「え、ゆ、ゆかり……加藤君、知らなかったっけ？ 私、いつも彼が来た時に教えたじゃない。見る見る、って」

「顔ぐらいなら知ってるわよ。これだけ大学の有名人なら。モデルの加藤律でしょ。でも、私の友人リストにその名前は無いわ。従って、あなたに私の悩みに介入される筋合いはナシ！」

ゆかりはそう言い切ると、隣の男の顔を再び見た。

加藤律は、目尻をさらに下げながら、楽しそうにニヤニヤしていた。

「面白いな、ゆかりちゃん」

「勝手に人の名前呼ばないでください」

「いや、でもゴメン、会話全部聞いちゃったし」

「うそ」

「ほんと。ていうか、聞こえた？」

「忘れてください」

「痩せたいんでしょう？」

「痩せますけど、あなたには関係ないって言ってますよね。さつきから」

「確実に5kg落とす。保証する」

「誰が？」

「オレが」

「ゆうほ。私、この人の言ってる事全然わからない。モデルって言われる通り、ほんとに頭が空っぽ？」

ゆかりは困り顔のゆうほを見る。ゆうほは髪を耳にかけながら、

加藤に聞く。

「加藤君、あ、私、良田^{よしだ}ゆうほです。私もあなたの言う事がよく消化出来てないんだけど、よくわかる様にもう一度話してくれる？」

「いや、聞く必要ないけど？」

シッ、とゆうほはゆかりを手で制した。

「良田さんは話が分かりそうだな。そう、二人ともご存知の通り、オレ、モデルやってるんだけど、やっぱ体型維持、健康管理はそこら辺の女子よりも得意なわけ。で、この大学でも何人か痩せたい人のお手伝いしてあげたんだよね。例えば、ほら、あそこにいる桜井さんとか、あ、町野さんもいる」

と言つて、彼はこつちを見ている彼女達に手を振る。彼女達も花が咲いた様にぱつと笑い、手を振り返した。

桜井と呼ばれた方はレースクイーンで、町野の方は、小さいながら劇団に入つて、たまに舞台に立っている、と言われていた。

「彼女達、綺麗でしょう？ あ、あと水谷さんと小川さんもいたな」
加藤律は満足そうにゆかりを見た。

「彼女達が綺麗なのは、あなたのお陰じゃないと思うけど」

「良田さーん、ゆかりちゃん、お腹すいているんじゃない？」

律はゆうほに助けを求める。

「加藤君、話を終わりまでお願い出来るかしら」

知的美人はにつこりと笑いかける。

「うん。要するに確実に4ヶ月で5kg落とすお手伝いをする。体重管理、つまり食事アドバイス、スポーツのトレーニングメニュー、ストレス解消法などなど。全て含めて二万五千元でね」

「え、お金とるの?!」

「当たり前でしょー、責任のある仕事として。遊びじゃないし、オレの時間も削るんだし」

「でも効果は確実、保証制度と」

ゆうほはフレアスカートの下の脚を優雅に組み換えて、納得した様にうんうん、と二三度頷く。

「そういうこと。ペイバックもする。4ヶ月後、満足な結果を得られなければ、一万円返す」

「まあ、それは親切ね」

「だろ」

「いいんじゃない、ゆかり。頼みなさいよ。二万五千円で、ビミョーなところ突くけど。あなた、バーゲンで今年はお金使わなかったんだし、自分に投資しなさい」

「ええ、何それ。ちよつと待ってよ」

「と、言うわけで、ゆかりをよろしくね、加藤君。お金は後で振込でいいかしら？」

ゆうほは律と固く握手をしている。

「だからそこ！ 勝手に決めない！」

「頑張ろうね、ゆかりちゃん」

ゆかりは、伸ばされた大きな手をしぶしぶ取った。

第一章 別れ？と出会い（2）（後書き）

Ziele || ドイツ語で目標、目的地という意味です。

第二章 縁もゆかりも

ラウンジのガラスを通して、冬の弱い光が射し込んでいた。中庭の小さな噴水では、雀が水を飲み水浴びをしていた。

ゆかりは再び開いていた文庫本に目を落とした。しばらく文字を追っていたが、ざわ、とラウンジが賑わったのを感じ、顔を上げると丁度、加藤律がコートを手にはラウンジに入ってくる所だった。

彼はまっすぐにゆかりの所まで来ると、済まなそうに言った。

「ごめん、待ったかな」

ゆかりは本を閉じた。

「うっん、そんなに」

「よかった。じゃあ、行こうか」

「え？　ここで話すんじゃないの？」

「ここじゃ、落ち着いて話せないでしょ」

なるほど、ゆかりが周りを見渡すと女子のほとんどのその視線が、律に張り付いていた。

「行こう」

彼が踵を回すので、ゆかりは慌てて本をバッグにしまい、コートを抱えて後を追った。

ラウンジを出る時、彼はガラス戸を押さえて待ち、ゆかりを先に通した。

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして」

彼は大学の外に向かうのではなく、校舎に向かった。ゆかりが横に並ぶと、律の肩が目の高さにあった。

「身長何センチなの？」

「186cm」

「ふっん」

一般人にしてはまちがいなく高いだろう。だが、モデルとしてそ

れは標準なのかやはり高い方なのか、ゆかりにはわからなかった。
学生課の前の階段を上る。

「さつき、何読んでたの？」

律がゆかりを見下ろす。

「モーパッサンのベラム」

ゆかりは律を見上げる。

「ああ、モーパッサン。いいよね。男なのに、よくあそこまで女性心理を描けるよなあ」

「英文学科なのに、フランス作家も読むの？」

「自分だってそうじゃん」

「モーパッサン、デュマ、椿姫の……誰だっけ。読む範囲は狭いんだけど、フランス文学は表現の密度とか話の展開が優雅で好き」

「優雅、ね。そうかも。ドラマチックっていうよりも、その方が近いか。三銃士は最高だな」

三階まで来ると、律は教室を覗いて、空いている一つに入った。

白い机が光に反射して、まぶしい。

律はゆかりの前の席に、体を横に見せて座った。T・N・Faceのショルダーバッグからペーパーフォルダを出し、そこからルーブリーフを一枚出した。

「じゃあ、まず……ご契約ありがとうございます。ってことで、契約書を作ろう」

「別にそこまでする事無いんじゃない？」

「いや、遊びじゃないんだよ。オレ、金貰ってるんだから。これはオレの仕事。オレのやり方に従ってもらいたいな」

「はい、はい」

「O・K・じゃあ、まず名前」

「阿月ゆかり」

「あずき？ マメ？」

律のペンを持つ手が『小豆』と宙を泳ぐ。

「ち、違うわよ。ござと偏のー……」

「何？　こざとへんって」

律は首を傾げる。

「小学校で習ったでしょ。これよ、これ」

ゆかりは律からペンを奪い、紙に名前を書く。

「オレ、小学校、日本じゃねーもん。ああ、始めから自分で書いてもらえばいいのか。じゃあ、あと生年月日と電話番号とメアドと住所……」

ゆかりのペンを持つ手が一瞬止まった。そして何事も無かった様に再び動き出す。

「電話ってケータイでいいよね。メアドは、両方？　PCの方と？」

「うん」

「住所はいらない？」

「一応」

三階の教室はこの時間はあまり使われていないのか、随分静かだった。ペンが紙の上を走る音が教室に響く。

「じゃあ、あと身長と体重」

「え、そんなのも？」

「だって、ダイエットだろ？　そこが一番大事だろ。それに監督の才レが把握してなくてどーするよ」

「いいよ、それは自分できちんと管理するよ」

「だめだめ、そう言う人に限ってちゃんとやらないから。それに、プレッシャーがかからないだろ。はい、書く。誤摩化すなよ。なんなら医務室に行つて量つてもいいんだぜ？」

「わかったわよ」

ゆかりは律をひと睨みすると、洪々と紙の上に数字を書き足す。

「ふうん、165？。今58kgかあ。じゃあ、53kgまで減らせばいいわけだ。でも、58kgでもいいんじゃない？　痩せる必要があるのかな」

「なっ！　自分が言っただけでしょう？　痩せさせるって。今そんな事言つて、一体やる気あるの？」

「いや、やるけどさ。別にモデルや女優でもないのにそんなに痩せてどうするのかな、と思ってさ。やることは他にもあるだろうに。」
「今の私には、痩せる必要大アリなの！53kgでもまだ太ってるのに。痩せて絶対にヤツを……」

「ああ、坂下君だっけ」

「よく覚えてるわね」

「まだ、そんなに好きなんだ」

律は机の上の紙を自分の方へ向けると、まだ半分ぐらい空いている所へ何か書き出した。

「え……好きっていうか……なんか悔しくて。負けた気がする。」

「えー、でも、恋愛って勝ち負けじゃないでしょ。駆け引き、とは言うみたいけど」

さらさらとペンが走る。

不意に顔を上げて、律はゆかりにペンを差し出す。

「はい、ここにサインして。日付も」

今まで律が書いていたのは、契約期間と目標体重、ペイバックの事など、契約内容の詳細だった。

さらつと一通りゆかりはそれに目を通し、サインをすると紙を律の方へ押しやった。律は自分のサインもして、満足そうに『契約書』を眺めた。

「あとで下でコピーしよう。お互いに一部ずつ持っていないとね。」

じゃあ、今後の計画を少し話そうか。あと、ゆかりのライフスタイルとか教えて欲しい。その方がメニュー組み易いから」

律は新しいルーズリーフの上をペンで軽くトントン、と突いた。

「あの、いきなり呼び捨てになってますけど？」

「イイじゃん。オレの事も律って呼び捨てでいいから。オレ、あんまり馴染めないんだよね」ちゃん”っていうの。”さん”は礼儀としてちゃんと使えるけど、”ちゃん”って、なんか距離感がよくわからなくて。バカにしている様にも聞こえない？」

「べつにそんな風に思った事無いけど……じゃあ、私の事”さん”

付けにしてよ。呼び捨てよりマシなもの」

「なんで？ 今からオレたち共同作業するのに、そこで距離作ってどうするの。てことで、それ、却下。いいじゃん。”ゆかり”ってキレイな響きじゃん。あれだろ？ ゆかりって、『人と人が合う』縁、って意味だろ？ いい名前だよなあ。オレと会ったのもなんかの縁、ってことだよな」

彼はうつとりと窓の外を見た。ゆかりは名前のことを言われ、少し照れくさくなった。そんなこと口にする人は今までにいなかった。「ちよっと、何勝手な事言ってるのよ」

ゆかりは照れているのがバレない様にコンコンと机を拳で叩いた。「じゃあ、あなたの事は”りっちゃん”と呼ばせてもらっわ。その、あなたの言う『よくわからない距離感』が、今の私たちにはぴったりだと思っから」

「おお、上手い事言うね」

「そんな事より、話を進めるわよ」

ゆかりは簡単に自分のライフスタイル―食事の時間やよく食べるもの、週一のジョギング、週三の塾講師のバイト、などを伝えた。「うーん、やっぱりもう少し体を動かさないかね……」

律は指を顎に当てて考え込む。それからゆかりの見せた、彼女の履修表を見ながら言った。

「あのさ、この月、火、金と昼間の授業との間隔が空いてるじゃん。この時間にジムに行く気、ない？」

「え？ だめだめ。ジムってお金がかかるし。月一万とか払えない」「それはフルタイム会員とかでしょ。平日の昼間限定とか、学割とかで、もっと安くなるよ。オレが行っている所、月四千円払っているんだ。あ、今ならお試しで入会金も免除だったから、取りあえずこの四ヶ月だけ。ね、どう？」

律は下からゆかりを覗き込んだ。

律の表情には押し付けがましい所は全くなかった。ゆかりは少し律を眺め、それから言った。

「いいわ。行くわ」

一応、成り行きでダイエットをする事になったものの、やるからにはきちんとやりたい。

ゆかりはだんだんそう思う様になって来た。律が真剣だからつい引き込まれてしまうのか。

ゆかりの答えに、律は柔らかく口の端を上げた。

「ジムに行くのは来週からにしよう。あと、食事。実家なんだね？」

じゃあ、夕食はゆかりのお母さんが作ってくれてるんだ。取りあえず最初のひと月で1、5kg落としたい。食事の取り方。まあ、これも人それぞれ合う、合わないがあるんだけど、いろいろ試してみよう。基本的には昼にしっかりとって、夜は軽く。米は玄米にして。100%玄米は辛いだろうから、始めは白米と半々で炊いて。段々と玄米の割合を増やして行けばいい。一度に沢山炊いて小分けに冷凍しておけば食べ易いだろう？」

ゆかりは、律に渡された新しい紙に、言われた事を勤勉に書き込んで行く。

「食べ方は、理想では一口ずつおかずを残す。だけど、それじゃあお母さんに悪いから、量は少なめにする。あ、ダイエットしている事ちゃんと言つてね。ご家族の理解をきちんと得ないと。いろいろ心配すると思うから。母親は得に」

律はそこでバッグから水のペットボトルを出し、ごくごく飲んだ。いる？ とゆかりにも勧めたが、ゆかりは軽く首を振った。

「それから食事はきちんとよく噛んで。噛めば噛むほど唾液が出て、それに消化酵素が少し含まれていて、次の消化活動をスムーズにするから。消化がいいと、きちんと栄養が細胞に行き渡って、細胞はきちんと君の血を流し、筋肉を動かし、ホルモンの働きをコントロールする。いい？ 君が正しい食事をして、酸素を取り込んで、細胞を元気にしてあげれば、体は余分なものを出し、常に体のバランスを取る様に働く。そしたら自然に無駄なものは落ちてゆく。ゆかりは自分の体を信じればいい。頭で考える事はやめて、細胞に頼り

切るんだ。君はあまり人を信頼しないタイプと見たけど……」

ペンを動かしていたゆかりは、律の最後の言葉を聞き、身を強張らせた。

「一言多かったわね。モデルだかなんだか知らないけれど、ちょっとくらい顔がいいからって、何言っても許される、と思っっているタイプと見たけど？ 調子に乗るのはやめてよね。とにかくあなたのやり方はここに書いたから、今日はもういいでしょ。次の約束するなら、ケータイにメールして」

ゆかりは荒々しくコートとバッグを掴むと、ブーツの踵を高く響かせ、教室を出て行った。

残された律は、ペーパーフォルダーに『契約書』を入れ、今までゆかりが使っていたペンをくるくると二、三度回していたが、それらをバッグに仕舞うと、教室を後にした。

外の陽はすでに弱く、夕方の白いもやが茜色をぼかしていた。

第三章 微妙な距離

律からショートメールが来たのは、あの空き教室で気まずく別れてから五日目だった。

あの後、すぐに連絡も無かったので契約は解消されたのか、思っていた矢先、そのメールはゆかりにとって意外だった。

正直、ゆかりは律に会いたくなかったが理由をいちいち考えて断るのが面倒だったので、会う旨を返信した。

律のメールには「ジムに行くから、ジャージかスウェット持参」とあった。ゆかりはジョギングパンツとパーカーを用意し、トートバッグに詰めた。

約束の時間にラウンジに行くと、律は3人の女生徒に囲まれていた。その中に桜井という、あのレスクイーンの姿もあった。

ゆかりは、ラウンジの入り口に立ったまま、近づいてよいものか迷っていたが、律がゆかりに気が付き席を立てて来た。

ゆかりはちよつとほつとした。

「りっちゃん、ちゃんと考えておいてね！」

桜井が鼻にかかった声を律の背中に投げた。

律は振り返り、モデルにしか出来ない、あの特有の微笑みを返事の代わりに返した。

わつと、女生徒達が湧いた。

「ふうーん、500g減、いいんじゃない？」

大学を出てから近くの駅ビルのカフェに落ち着いた。ちょうど昼休みが終わった時間帯で、店内はほどよく空いていた。

カウンターの裏に立つウェイトレスが、ちらちらと律を見ていた。

律は、ゆかりのこの一週間の食事記録に目を通し、一番下に書かれた - 0.5 kg という数字を見て言った。

まあ、契約上、今週からスタートでよかったんだけど、言いながら記録ノートをゆかりに渡した。

「食事の記録、いいだろ。意外と同じものばかり食べてるとか気付くし。あと、もつといいのは備考でよく眠れたとか、ジムに行ったとか、ちよつとしたその日に起こった事書いても、後でいろいろ参考になるんだよ」

「それじゃあ、日記じゃない」

「そうだよ。ダイエットって生活習慣から変えるものだからね。食事制限とスポーツだけじゃ、痩せない。痩せても生活が変わらなければ、ダイエットをやめたら、元に戻る。あとはストレスに強くなれば、それが理想なんだけど」まあ、それはそのうち。と言つて、カプチーノを一口飲んだ。

ゆかりは自分の紅茶のカップを見ていたが、不意に律に問いかけた。

「さっきの……桜井さんの」考えておいて”って、何だったの？”律が少し目を見開いた。

「いや、別に言いたくはないんだけど……」

ゆかりは律の視線から慌てて逃れた。

「いや、また……またゆかりの気分を害すだろう前提で言うけど、ゆかりってあんまり人に興味示さないだろ。その代わり自分のこともあまり話さない。だから少し驚いただけ。オレに聞いて来た事がえーと、桜井さん？ ああ、ダイエットサポートして欲しい子連れて来たんだよ。その事だ。」

「ふうん。で、受けるの？」

ゆかりは紅茶に手を伸ばす。

「いや、受けない。どうせあんまり時間がないしね。オレ、もっと勉強しなきゃ行けないしモデルの仕事もあるし、それにベルリンに

帰るしね。だからゆかりが最後のクライアント」

紅茶のカップを手にしたまま、ゆかりの動きがぴたりと止まった。

「え？ ベルリン？ 日本に住んでいるんじゃないの？」

律はそんなゆかりを見て、可笑しそうにくくつと笑う。

「ほんと、ゆかりみたいだな人珍しいよな。オレの事何も知らないのにフラフラ付いて来てさ。普通の女子ならオレといると根掘り葉掘り聞いてくるのに。オレ、ゆかりがいつ質問の雨を降らせるのかずつと待っていたんだけど。降水確率、ゼロ」

ゆかりはやつとカップをソーサーに置くと、ノートの角を折ったり伸ばしたりした。なんだか律の顔をまともに見られなかった。

「だって、本人から話さないのに、聞いたら悪いと思って……」

「悪い事なんて無いよ。話せない事は話さないけど、それよりも相手に興味を持たない方が失礼だと思うけど。そんなに引つ込んでいたら、コミュニケーションの取りようがないだろ。坂下君と別れたのだって……」

「また、帰るわよ？」

ゆかりは、きつ、と律を睨んだ。

「今のはゴメン、失言。オレには関係なかったよね。じゃあオレの事を少し話しておくよ。興味あるかないかは別にして」

まだ時間あるな……律は左手首に目を落とす。

ゆかりは椅子の背に体を預けた。

坂下のことで一瞬、大人げなくも逆上しかけたのは、いきなり核心を突かれた様な気がしたからだだった。そんな風に自分を動揺させた男の事を、男の話を聞きたいと、正直な所思った。

律も椅子に深く座り、軽く脚を組んで、手を膝の上に乗せた。

このまま写真に撮ったなら、雑誌のインタビュー記事の扉が一つ出来そうだ。

「オレの母は日本人で、父がドイツ人。母がロンドンで仕事をして

いる時に、学生だった親父と出会って、結婚。学生って言うても外国では歳くつても学生、っていうのが多いから。母が24で、父が26の時。で、結婚してすぐにオレが産まれて、4才になって、親父の卒業後にベルリンに帰った。それからオレはずっとベルリンで育った。大学に入って、その時に取った講義で、ものすごく感動したのが笹先生。ゆかりも取ってるだろ、比較文学。笹先生の下でかなり英文学にのめり込んで。で、先生が日本に帰る時に”日本に行ったらまた講義を受けに行っていいか”って聞いたら、いいですよ、ってさ。でも、その時はまだベルリンで、大学もモデルの仕事も大変だったから、なかなか日本に行く事を考えられなくて。で、取りあえず、大学は休校にして、半年前にやっと念願かなって日本上陸。まあ、講義を受けに來ただけじゃなくて、社会勉強兼ね。こちのモデル事務所とも契約してるし。叔父が社長の知り合いなんだ。笹先生とはたまにメールやり取りしてたから、この大学で講義してるのは知ってた。公認モグリで講義受けていいって。笹先生、言ってたぜ？”授業料を無駄に払って椅子を暖めているだけの生徒が沢山いるから、君のような生徒が来るとやりがいがある”ってさ。もつと真剣に勉強しろよ？”

どうも、この男は一言余計な事を言わないと気が済まない性格のようだ。

ゆかりは少しだけ、律を理解した気がした。

「ああ、だから木曜日の2限だけ出席しているのね？」

「そういうこと。あ、もうそろそろ行こう」

律は腰を上げ、やや背を丸めてコートを羽織る。

ゆかりはノートをバッグに仕舞い、コートに手をかけると「あ、それはオレが」と律が、戸惑うゆかりのコートを取り彼女の後ろにそれを広げて立った。

え？ と律を見上げるゆかりに、彼はにっこり微笑むと、ほら、おいで。とコートを軽く持ち上げて、ゆかりが腕を通すのを待っている。

ゆかりは、店内の客の視線を痛いほど感じながら、また恥ずかしさから下を向いて、コートを着た。

「こういうこと、いつもしてるの?」

駅に向かいながら、ゆかりは聞く。

「なに? ああ、コートの事? うん。普通でしょ。」

律はひょうひょうと言いのけ、颯爽と歩く。

普通じゃないわ。

ゆかりは歩みを合わせながら、小さくつぶやいた。

横浜駅から10分ほど歩いたスポーツジムのカウンターで、律は「百瀬さん、お願いします」と、受付の女性に話しかけた。ゆかりは後ろから彼らのやり取りを見ていたが、律が話しかけると女性の頬が少し赤く染まったを、気のせいだと思わなかった。

「おう、来たな」

さほど待たずに後ろから、よく通る声がジムのロビーに響いた。

振り向くと、やはり背の高い、短髪の、南国出身を思わせる随分顔立ちのハッキリしたインストラクターが立っていた。

「ああ、モモちゃん。ゆかり、この人、百瀬秋広。ももせ あきひろこのインストラクターで、リーダーで、オレの悪友。モモちゃん、こちら阿月ゆかりさん」

「こ、こんにちは」

ゆかりは慌てて頭を下げる。

「こんにちは。君の事は律から聞いているよ。今日はちょっとクラブ内を見て、少し体を動かしてみる、ってことでいいのかな。それから入会するか決めるって段取りで」

「あ、はい。それでお願いします。でも、一応、加藤君には入会するって言うておいたんですけど」

「でも、クラブが気に入らなかったらやっぱり嫌だろ? インストラクターだって、合わないかもしれないしな」

なんだと、と、百瀬がすぐに反応して、軽く律の肩にパンチを当てる。

やり返す律と百瀬の掛け合いが、なんだか大型犬のじゃれ合いの様で、ゆかりは笑みをこぼす。それを見て律は嬉しそうに片目を瞑り、「こんな乱暴なイントラじゃ、任せられないよな」と言った。

「そ、そんなこと無いよ」

ゆかりはなんだか心拍数が上がった気がした。不覚にも律を可愛い、と思った自分に何故か後ろめたさを覚えた。

「じゃあ、モモちゃん、ゆかりをお願いするよ。オレ、もう行かないきゃ」

「任せろ。じゃ、後でな」

「うん。じゃあ、ゆかり、頑張つてな」

「あ、ありがとう」

手を振り振り、クラブを出て行く律に、ゆかりもつられて手を振り返した。

百瀬は、着替えたゆかりを連れて、クラブ内をースタジオ、マシーン、プールを、簡単に説明しながら案内した。

ゆかりはジムが始めてと言う事で、いちいち興味津々と言う様子で百瀬の言う事に耳を傾けていた。

「何かやりたいもの、あったかな」

百瀬とゆかりは、マシーンルームの前のベンチに座っていた。

「そうですね……こんなに沢山あると、逆に何からやっていいかわからないですね。百瀬さんは、どう思います？」

「僕は、今日はマシーンを勧めるよ。僕も付いていてあげられるし。あとは、後々スタジオのスケジュールをあげるから、ヨガとかエアロビなんかもやってみると面白いと思う。結構人気があるんだよ」

じゃあ、早速始めようか。と、百瀬は先に立つ。

そして一台のマシーンの前でゆかりの方を振り返り、言う。

「レッグエクステンション。太股の筋肉を重点的に鍛えるんだ。全然複雑じゃないから、やってみる？」

「はい」

ゆかりは言われるままにマシンに座ると、百瀬はマシンの背などいろいろ調節した。

「自分でやる時は、ここと、ここを調節すればいいだけ。ま、フロアには常時誰がいるから、わからないことがあれば遠慮なく聞いてスタッフは可愛い女の子に何か聞かれるのが好きなんだからさ」

百瀬はからっと笑う。

「あ、はい……」

”可愛い子に……”と、ああいう言い方をしたのは、きっとスタッフと接し易くするために、若い女性一般を意味してのことだったのだろつが、ゆかりはなんだかくすぐつたい心持ちだった。

ゆつくり、ウェイトを脚全体を使って押し上げる。

「膝下だけで持ち上げようとしてしないで。膝を痛めるから。そうそう、その調子」

百瀬がマシンの横で指導する。

「こ、これ、結構アシに来ますね……」

「そうだろ。ゆかりちゃんは普段何かスポーツしないの？」

百瀬に「ゆかりちゃん」と呼ばれても何故か悪い気はしなかった。

「週に一度、近所をジョギングするくらいですね」

「あー、じゃあ、やっぱりもう少し筋肉をつけるプログラムを考えた方がいいな。今度までに考えておいてあげるよ」

「いいんですか」

「もちろん」

「えーと、じゃあ、ヨガもやってみたいんで、それに合わせてもらえますか」

「オッケー。そう言えば、ゆかりちゃんて幾つなの？あ、聞いてもいいなら」

「やだ、まだ年齢言つのをためらう歳じゃないですから。二十歳で

はたち

す。この前、成人式……っでした」

「おお、若いね。二十歳とか聞くと、自分がめっちゃ老けてる気がする」

「百瀬さんはおいくつで……っすか！はあ」

「24」

「なんだ、全然若いじゃないですか」

「二十歳の子に言われてもねー」

ゆかりの額に汗が滲んで来る。

「あ、ごめん。少し休憩しよう」

百瀬が壁際に置かれている水タンクからプラスチックのカップに水を入れて持って来た。

「百瀬さんが24ってことは、加藤君もそのくらいなんですか？」

ゆかりは、そう言えば律の年を聞いてない事に今さらながらに気がついた。

百瀬はマシンに寄りかかっていたが、ゆかりの言葉に体を起こして、あれっと、驚いてゆかりを見た。

「え？ 聞いてないの？ あいつは21だよ」

「うそ……なんか雰囲気は21じゃない……」

「あはは。まあ、仕事柄、早熟な所があるんじゃないかな。じゃあ、ゆかりちゃんと律は友達になって日が浅いの？ 随分知っているのかと思ったけど」

興味深そうに百瀬がゆかりを見る。

「いえ！ 今日で会うの三回目ですから」

「ほんとに？！ うわ、珍しいな」

「何がですか？」

百瀬の反応が読めずに、ゆかりは百瀬の顔を仰ぎ見る。

「あいつ、外見はフレンドリーだけど、きつちり距離を作るんだ。なかなか自分のテリトリーに人を入れない所があるけど、もしかしたら、ゆかりちゃんにはガードが下がるのかな、と思って」

「さあー、どうなんでしょうね。仕事なんですよ、加藤君には。契

約しているんです。四ヶ月で5kg落とすつて。私はもつと落としたい所なんですけどね」

百瀬はゆかりを再びトレーニングに促した。

「ゆかりちゃん、痩せたいんだ。モデルとか女優志望？ イベコンとか？ 背が高いからね。そんなとこだろ？」

「この肉見て、そんな事がよく言えますねー」

ゆかりは苦笑し、百瀬は慌てて顔の前で手を振る。

「いや、全然そんなの太っているうちに入らないから！」

「加藤君もそんな事言っていました」

「そうだろうな……」

百瀬の声のトーンが少し落ちたのに、ゆかりは気がついた。

「加藤君って、もしかして……デブ専なんですか？」

ゆかりの思いがけない言葉に、百瀬は困った様に歯を見せる。

「……いや、そうじゃなくてさ、まあ、あいつにもいろいろあつてね。ほら、ゆかりちゃんにも『いろいろ』あるだろ？」

自分の今までの人生に、いくつ『イロイロ』があつたのか、ゆかりはガラス越しに見えるビルの谷間を見ながら回想した。

ウェイトがだんだん重みを増して来た様に感じた。

着替えて、一階のカウンターに降りると、百瀬が待っていた。

「どうだった？」

「なんか、脚が自分の脚じゃないみたいに、しばらく震えました」

今は大丈夫だけど、と言って受付の女性が用意した入会申込書に、ゆかりは必要事項を記入し、一ヶ月分の料金を払った。

「ご紹介、つてことで一月目は500円オフです」

百瀬がゆかりの手のひらに500円玉を乗せる。

「あ、なんか嬉しい」

「今から大学？」

「ええ、あと一コマあるんで。それからバイト」

「頑張るね。じゃあ、今度は金曜日」

「はい。お願いします」

百瀬は、クラブを出て人ごみに紛れるゆかりの後ろ姿を見送った。

百瀬の勤めるスポーツジムは、営業時間が23時までだ。

全て片付け、鶴見のマンションに帰ると大抵24時過ぎになる。

白い息を吐きながら、オレンジ色の街灯の下を足早に歩く。

ドアを開けると、明かりの付いた部屋の奥からプリンターの規則的な音が聞こえた。

「おかえりー、モモちゃん。プリンター、使ってるよ」

律が部屋から顔を出した。

「おう」

百瀬はスニーカーを脱いで、揃えた。

家にかかる時、靴を揃えない人は大抵車で事故ります、と昔、片山だか、レーサーの誰かの言葉を聞いて以来、それは百瀬の習慣になっていた。といっても、当の百瀬は車を持っていない。

自分の部屋に入ると、律が百瀬のライティングデスクを占領していた。

百瀬はダウンジャケットを脱ぎ、クローゼットに仕舞いながら律の背中にも声をかける。

「何だよ、自分の部屋で作業すればいいじゃないか」

「こつちの方が椅子も座り心地いいし、レポートやるのにはいいんだよ。オレの部屋の家具って、全部レンタルみたいでせこい感じがするもん。長時間の作業は疲れるんだよ」

「家具があるだけ感謝しろよ。居候が。あー、腹減った。なんか作った？」

「あんな家具ならない方がマシだよ。今日はグリーンカレーがあるよ」

「いいね」

律は百瀬の2LDKのマンションに居候していた。

もともと百瀬は、ルームシェアをするつもりでこの部屋を借りていたのだが、前のルームメイトが引っ越した折に、タイミング良く律が日本に来たのだった。

「どうだった？ 今日のトレーニング」

律がパチン、パチンとレポートを閉じる。

「ゆかりちゃん？ うん、少しマシーンで脚のトレーニングを試して行っただよ。素直で可愛い子じゃん」

「だろー、中性的な感じがいいよな。素直かどうかはよくわからないけど。まだ警戒されてるみたいだし」

百瀬は湯気の立つカレーを飯の上に盛^{よそ}う。当然の様に五穀米だ。

律はペットボトルの水をグラスに注ぎ、百瀬の前に置く。自分はボトルから直に飲んだ。

「サンキュ。彼女、契約って言ってたけど。またアレ、やってんの？」

「うん。ゆかりで最後だけだ。あ、もしかしてモモちゃんには迷惑だった？」

「いや、そんなことはないよ。会員になってくれたし。ただ、おまえがオレの所に友達を連れて来たのが珍しいな、って思ってたさ」

「ああ、だってゆかりはさっぱりしてるから。ほかの子と比べて面倒くさくないし」

「本当にそれだけか？」

百瀬のカレーの皿はすでに半分空になっていた。

律はシンクに寄りかかりながら、完成したレポートを捲^{めく}っている。

「なんで？ なんか他にあるの？」

顔もあげずに律は答える。

「いや、なんかおまえのタイプと違うと思ったから……」

「クライアントにタイプも何もないでしょ」

「でも、おまえが最初に声を掛けたんじゃないの？」

「だって、痩せたいって言ってたから」

百瀬は何も言わずに、カレーの残りを食べた。ごちそうさま、と、グラスの水を飲む。

「でも、いいよな、彼女にするには、ああいうしっかりした子。おまえ、そろそろいいんじゃないの？ 過去の事引きずってないで…」

「過去の事じゃないし、引きずっているつもりも無い。ゆかりはそう言うんじゃないから。ただのクライアント。契約している以上、ちゃんと期間中は責任取る。そう言う関係」

レポートから目を上げ、律は正面から百瀬を見た。

「へえ、期間限定なんだ。そうやって”優しさ”を盾にして、距離を取ってるなんてタチ悪いよな」

百瀬は律の気を逆立てるつもりも、軽蔑するつもりも全くなかったが、律の言った事に偽善者の響きを感じ、それはゆかりを傷つけている様にもとれた。百瀬はただ、律がそんな風にゆかりのことを言うのが、彼女に対して哀れに思わずにはいられなかった。それは何故だか本人にもわからなかったのだが。

律の頬にさつと赤みが差した。黙って自分の部屋の方へ向かう。

「もう寝るのか？」

返事は無かった。ドアがパタンと閉められる。

まったく、大きな子供は手がかかるんだよね……空の皿とグラスをシンクに運びながら、百瀬はため息をついた。

第四章 近くて遠い

ゆかりは期末試験の最後の科目を終え、ゆうほと連れ立って教室を出た。結果はともあれ、取りあえず試験勉強から解放されたという気持ちで、校舎の階段を下りる脚を軽くした。

ラウンジの前を過ぎ、駅への道に行く。

「ゆかり、あなたバイトまで時間があるなら、ちょっと買い物に付き合ってよ」

ゆうほは言った。

「いいよ。今日はりっちゃんと約束してないし。撮影なんだって」

「しかし、いいな、ゆかりはあんなイイ男と週一で会えるなんて」

「いや、あなたの仕業ですから！ もとい！！」

「ふふ、そうなんだけど。で、どう？ 痩せた？」

「-1kg。でも、今までずっと増え続けて来た数字見て来たから、減ると素直に感動する。で、次への活力に……」

と、ゆかりが胸の前で、ぐっと拳を作ると、後ろから不意に呼び止める声がした。

「阿月さん」

ゆかりとゆうほが振り向くと、冬の暖かい日差しの中に、桜井と町野が、明らかに友好的ではないオーラを漂わせてたっていた。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」

その「いいかしら？」には、問いかけではなく、すでにゆかりから否定の言葉を受付無い事を前提に、それでも一応礼儀上つけてみた感があった。

「何？」

ゆかりはすぐに律の事だろう、と思った。それ以外で桜井との共通のテーマは無いのだ。

「阿月さんは、加藤君とあのダイエットの契約したらしいんだけど、

いくら払ったのかなあって思ってた」

桜井のマーメイドパーマの茶色い髪に陽の光が刺し込み、さらに髪の間を透る光を増している。

「そんなことに答える事無いわ。行きましょう」

ゆうほはゆかりの腕を取り、先へ促す。

「いいの、ゆうほ。私は別に後ろめたい所は無いんだから」

「二万五千円だけど、それが何か？」

「本当に？ もっと払っているんじゃないの？ そうでもなきゃ、私の友達断つてまで、あなたなんかの面倒見るはずは無いと思うのよね」

「なんだ、八つ当たりか。」

ゆうほはふつと息をつく。その言葉にかちんときたのか、町野が高い声を出す。

「だって、考えてもおかしいじゃない。阿月サンは普通の人なんだからダイエツトなんかする必要ないでしょ。加藤君と契約すること自体間違ってるのよ。桜井さんの友達はモデルなのよ。彼女こそ加藤君の助けが必要なのに」

友人をダシにして、りっちゃんとの関係を持ちたがっているのは、あなた達でしょう、と思わず口にしそうになったが、ぐつと飲み込んだ。

その代わり、自分でも驚くほど理性的な言葉がスラスラと出て来た。

「お言葉を返すようですが、話を持ちかけて来たのは加藤君の方ですから。私は乗り気じゃなかったけど、彼が『是非』って言うて来たのよ。でも、確かにあなたのお友達のモデルさん？ の、死活問題がかかっているのなら、私が加藤君に話してみるわ。もう一度考え直してくれないかって」

ゆうほは驚いてゆかりを見た。

桜井と町野はその言葉を聞き、少し機嫌を直したようだ。今までへの字だったグロスで光る唇が、華やかな笑みを取り戻していた。

「あら、阿月さんて話せるのね。よかったわ。じゃあ、加藤君にはくれぐれもよろしくね」

桜井と町野は手を振りながら、とても甘い、気だるい香りとともに、ゆかりの横を過ぎて行った。

「い、いいの？ あんなことを言っ……」

歩き出したゆかりに、ゆうほも慌てて付いて行く。

「別にいいわよ。だってあっちの言う事も一理あるし。なんか失恋して悔しくて始めたダイエットだけに、なんだか最近それに関しては吹っ切れたみたい。モチベーション落ちて来てるのよね。だから、別に躍起になつてダイエットしなくてもイイかなーって思ったりね。あ、でもジムは楽しいから続けるけど」

「そんな事言っ……吹っ切れたのって、誰のお陰で吹っ切れたと思ってるのよ」

「え？」

「りっちゃんのお陰じゃないの？ さんざんあなたの世話してくれちゃってさ」

「まさか。だって契約してまだ一ヶ月も経ってないんだよ？ 会ったのだってまだ3回。どこがりっちゃんのお陰なのよ。」失恋には日にち薬”でしょ。それだけよ」

「いや、りっちゃんがいなかったら、あなたの事だもの。もっと引きずっていたはずよ。すぐに自分の中にこもっちゃうんだから。それをダイエットで気持ちを別の事にスイッチしてくれたわけじゃない」

「お金が絡んでると、そう簡単に”そうでした”って言えないなあ」

空を仰ぎ見るゆかりを横目に、ゆうほは心の中でつぶやく。

『ばかね、お金取らなかつたら下心でもあるのかって、警戒してここまで話が繋がらなかったじゃないの。』

「ま、でも今日の所はりっちゃんのお陰、ってことにしておくわ」ゆかりが間延びした声を出す。

「可愛くない」

「そんな事自分でわかってます」
ますますかわいくなーい、とゆうほは笑った。

横浜駅東口の駅ビルに入っているセレクトショップは、ゆかりとゆうほのお気に入りだった。

ゆうほは彼氏の誕生日プレゼントを選ぶ、と言い、Ｔシャツなど、いちいち広げては棚に戻していた。

ゆかりは服は、取りあえずダイエツトが終わるまで買う予定は無かったので、ショップ内の雑貨のある一角を見ていた。

普段なら、ボリウムのある色とりどりのビジュのピアスや、バングルの輝きに心震わせ、一つ一つ手に取ってその細工を楽しむのだが、今日は、さっきの桜井の言葉が雲の様に重く心に立ちこめていた。

どんなに可愛いアクセサリーも、柔らかで軽いシヨールにも魅力を感じなかった。

りっちゃんに会いたいな。

ゆかりは何となく思った。しかし刹那、「どうして？」と、もう一人の自分が問いかけた。

ゆかりは何かを振り払う様に小さく首を振った。その問いの答えは出したくなかった。いや、出してはいけない、と思った。

「なにか見つけたー？」

ゆかりはまだ真剣に物色しているゆうほに声をかけた。

撮影で訪れたK市は、律には始めての地だった。

横浜と同じ太平洋側だから、同じような気候だと思っていたが、意外と風が冷たかった。港から見える観覧車の骨組みが余計寒々しく見える。

「なんか、オレのイメージではこっちはもっと暖かいと思ったんですけど」

準備をしている顔なじみのカメラマンに、律は話しかける。

マフラーに出来るだけ顔を埋めている、律のコートの下は、春夏ものだ。最近人気が出て来たブランドの春夏アイテム特集ページの撮影だった。

「なんで？ 方角が西だから？」

「そんなカンジです」

「いやー、山からの風も強い時はかなり寒いよ。まあ、今日は風もあまり無いし、晴れてくれてよかったけど。これだけ光があると撮影はかどるな。あ、柏木が呼んでるぞ、メイクチェックしてもらえもう始めるからな」

「はい」

律はヘアメイクの元へ走った。

撮影もスムーズに進み、休憩を取っている律の目にふと止まったのは、スタイリストが持っているワンピースだった。相手のモデルの女の子に準備しているものだった。

ロイヤルブルーの控えめなパフスリーブと、Uラインに柔らかく開いた首もと。膝丈のAラインのワンピース。胸に切り返しがあり、甘さを押さえているのもいい。

ゆかりの、うなじで遊ぶレイヤーの入った毛先が、少し広めのUラインの肩へのカーブを際立たせるだろう。

ワンピースは、体型をカバーするにも便利だが、もともとゆかりの高い腰の位置、長い手足はこのワンピースの美しいシルエットを存

分に引き出すに違いない。

律はそこまで考えて、苦笑した。

なんでアイツなの？

気がつけば、手の中にあるカップコーヒーは中身をまだ半分残したまま、冷めていた。

「おい、始めるぞ」

カメラマンが大きく手招きをしている。

「オレって、もしかしてかなり仕事熱心なのかもな」律は一人言ち、カップを近くのゴミ箱に捨てた。

そして今一度、港を、水平線を眺める。

早く横浜に帰りたいかった。

第五章 一方通行

次の約束の待ち合わせを、ラウンジではなく駅ビルのいつものカフェにしてくれと、メールをして来たのはゆかりだった。

どうせどっちも大学にいるんだから、ラウンジでいいのに。律はどうも腑に落ちなかった。

カフェで律はゆかりを待つ間、雑誌を適当に捲って彼女の意図する所を考えたが、何も思い当たる事は無かった。

と言つても、思い当たるほど彼は彼女の事を知っているわけではなかった。

心ここに有らず。彼の雑誌を捲る手はそんな風に彼を見せていた。

「ごめん、待った？」

顔を上げると、ゆかりがテーブルを挟んで律の前に立っていた。

律は、目が覚めた様にハツとした。

「いや、そんなに」

「大丈夫？」

「何が？」

「疲れてそう」

「そうかな？」

「そんな感じがただけ。そうじゃなきゃ、いいんだけど」

ゆかりはコートを脱ぎ、座ると早速、記録ノートを律に差し出した。

「先生、お願いします」

ぺこり、と彼女は頭を下げ、律は笑いながらそれを受け取る。

「おお、1kg減。じゃあ、あと残りの一週間で、今月の目標をク

リア出来そうだな」

彼はじつくりとノートに目を通す。

「どう？食事、玄米に変えて」

「あ、なんか体が元気になった気がする。頭がハッキリするっていうか」

「そうだろ。あと、副菜とかもう少し摂って。のりとかゴマとか梅干しとかもずくとか納豆とか。そういうので摂れるミネラルやビタミン、アミノ酸を増やすと、もっと体は上手く機能するし、老廃物出したり、代謝が良くなるからさ。肌も綺麗になるし。……あれ？律は備考の一つに目を留めた。」

「何？この凹みマーク。」

その備考欄の日付は、律の撮影の日だった。

「あ、それは……」

桜井にイヤミを言われた日だった。

「俺に会えなくて、凹んだ、とか。」

「いや、そうじゃなくて……」

速攻で否定され、律は眉を寄せた。

急にゆかりは落ち着きを無くす。どうしたのか。あまり律と目を合わせない不自然さも目立った。

「えーと、これから百瀬さんのところなんだ。もう記録チェックしてもらったから、今日はこれでいいよね」

ゆかりは半ば奪う様に手を伸ばして、律の手からノートを取った。律はそんなゆかりを訝しげに見ていたが、急に思いついた様に

「よし、今日はジム休め。先週オレがキャンセルした分、今日はゆかりにダイエットの楽しさをいろいろ教えてやる」
と言った。

「ええ、いいよ。ジムだって十分楽しんでるし。百瀬さん、すごく頼れるし」

「何それ。オレじゃ頼りにならないみたいじゃん」

あつ、とゆかりは口を手で押さえる。急に機嫌の悪くなった律に、

付け足す様に言う。

「いや、歳も離れているし、お兄さんみたい、って言う意味で……」
「もういい。とにかくここ、出るぞ。今日はゆかりはオレに付いて来る。」

そう言い、席を立つと、さっさと自分の濃紺のコートに腕を通し、ゆかりのコートを取った。

「そ、それはもういいって……」

しかし、今日の律には何か有無を言わさぬ雰囲気があった。

律はカフェを出てから、一言も口をきかずに、大学の方へ足を向けた。歩みは速くなかったので、横に並ぶゆかりは、律が怒っているのでは無い事だけはわかった。

それはゆかりを安心させた。

久々に律と会ったからか、ゆかりはなんだか落ち着かなかった。何を言うのにもまず考えてから、言葉を選んでから話すようにしていた。変な事を口走るのが嫌だった。

律は相変わらず姿勢良く、穏やかに笑い、何をしても様になっさまていた。

それは構内で見かけた時はいつもそうだったし、”モデル”なのだからそれは当然の事と思っていたが、今は律との会話が増え、彼を知るにつれて、容姿と背の高さだけが彼の魅力では無いのを、ゆかりは知っていた。

律と会う度に「発見」が増え、ゆかりはそれをそつと自分の心の”宝箱”に入れて鍵をかけていた。

律は、大学の前を通り過ぎ、普段ゆかりが行かない方角へ歩いていた。線路沿いの道でコンビ二を越してすぐに右に入った。

「どこに行くの？」

ゆかりは聞いた。

「もうすぐ」

少し坂をあがったところで、左側に小さな店が見えた。「ここ、オーガニックスの店。たまに来るんだ」

律とゆかりは自動ドアを抜け、中に入った。野菜の並ぶ棚、ガラス戸の冷蔵庫の中に並ぶ乳製品、スパイスやハーブ、化粧品もあった。

律はリンゴをいくつか紙袋に入れていた。

レジで親しげに店員と話し、リンゴの代金を払うと、ゆかりの背を軽く押して店の外に出た。

「はい」

律が歩きながらリンゴを一つゆかりに差し出す。

戸惑いながらゆかりはそれを受け取る。

「リンゴ、コートでキュキュって埃落として。食べてみな。うまいから」

さくつとゆかりがリンゴを齧ると、爽やかな甘酸っぱい果汁が口に広がった。

「美味しい」

「な、こういうのをカバンに一つ入れておいて、おやつに食べる。チョコよりいいだろ。このリンゴは小ぶりだから、食べきれるしね。オーガニックスだから皮もそのまま喰える」

二人はリンゴを齧りながら駅まで歩いた。

横浜方面の電車に乗った。平日の昼間だからか、車内はかなり空いていた。並んで腰掛け、どちらも黙って、窓の外の流れる景色を見ていた。

いくつか駅を過ぎてから律は

「あ、」

と声を上げた。

「これ、桜木町止まりの電車だ。」どうしようかな。そう言いながら、終点の桜木町で降りる。

「じゃあ、歩こう」

ゆかりに言っているのか、一人で話しているのか。ゆかりはそれにいちいち答えていいものか迷った。

「どこに行くの？」さっきの店に連れて行かれたときと同じく、彼の行動が読めない。

「中華街？」

「なんで疑問型なの？」

「なんとなく」

律はトントんと、軽い足取りで階段を下りる。ゆかりも彼を追いかける様に付いていく。

今日の律はなんだかふわふわして掴みどころが無かった。

「道、分かるの？」

「なんとなく」

鼻歌を歌いだすほどではないが、律は楽しそうだった。

その形の良い鼻を、つい、と上に向けて、コートに手をつ込んで歩いていく。ゆかりは彼の隣を歩きながら、あの桜井の話をどうやって切り出そうか考えていた。さらりと切り出せば何でもない話なのに、うまく伝えようと考えると考えるほど、言い出し難かった。もともと、ダイエツトの契約の話は、律から持ちかけて来ただけに、ゆかりが「もうやる気が無い」と言えばそれで済む事だ。しかし止めたら、律と接する唯一の機会をもう持てなくなるのではない。たった四ヶ月の特権だが、失いたく無かった。

こんな風に、律に対する独占欲が出て来た事に驚いたのは、実際にゆかり自身だった。

「道をいろいろ探しながら、目的地に向かうって、楽しいよね」

律は前を向きながら言った。ビルの間を抜けながら、取りあえず山下公園の方へ歩く事にした。

「でも、迷ったら面倒じゃない」

彼はゆかりを見て目だけで笑う。

「迷ったら少なくとも『ああ、こっちはないんだ』ってわかるだ

る。それに人に聞けばいい事だし。助けてもらう。それに、迷った気がつかなかった、何か面白いものを見つける事もあるし」

「えー、人になんて聞きづらいよ」

「なんで？」

「恥ずかしいじゃない」

「何が？」

「声をかけるのが」

「え、じゃあゆかりは逆に、道を聞きに来た人を『あら、この人は道が分からないのね、恥ずかしいわ』って思うの？」

「思わないよ」

「でしょ」

「人は、皆自分が思うほど、相手の事をどうこう思っていないよ。ゆかりは少し考え過ぎなんだよ。考えてたらフットワークが重くなるだけ。思った事を口にする、やってみる。失敗したら、した時に考えればいいんだ」

彼の声は冷たい空気に響き、ゆかりの心にじんと届いた。

ゆかりは、意外にも律が自分の事を言い得ているのに、妙に感心し、また嬉しくもあった。いつも、さらりとその場をやり過ごしていく律の器用さが、ゆかりとの隔たりを常を感じさせていたが、もしかしたらその、「隔たり」を作っているのは自分自身なのかもしれない、とゆかりは思った。

二人は再び黙って灰色のテナントビルの脇道や、大通りのイチヨウの木の下を歩いた。

「り、りっちゃん、お水。お水持つてる？」

ゆかりは律のコートの肘を少し引く張る。

「あるよ。飲む？」

律は体に斜めに掛けたバッグから水のボトルを出すと、ゆかりに差し出す。ゆかりは立ち止まり、水を飲んだ。

「あ、オレも」

彼はボトルの蓋を閉めようとするゆかりの手からボトルを取る。

彼の指がゆかりの手に触れた。ゆかりの耳が熱くなった。

「えーと、りっちゃん、一つ聞いてもいい？」

「どうぞ？」

律はボトルを仕舞い、二人は再び山下公園の方へ歩き出す。

「なんでりっちゃんはダイエットの仕事をしているの？」

「ああ。えーと、桜井さんのアイディアだったんだ。桜井さんとは笹先生のクラスが一緒だから。彼女が休み時間に『痩せなきゃ』ってさんざん友達と話してたから、オレが彼女に少しアドバイスしたんだ。そしたら彼女がもつとちゃんとプランを作ってくれて言うからさ。面倒だから断るつもりで『お金払えばやってあげてもいい』って言ったら、乗り気になっちゃって。自分がそう言った矢先、断れなくて。まず3ヶ月やったんだ。それで、あとは彼女の口コミで何回か」

「うーんと、その事なんだけどね……」

ゆかりは先日、桜井に言われた事をかいつまんで律に話した。

「桜井さんにそう言われたときは、何となく彼女の言う事も一理あるかな、と思ったんだけど、後で考えればなんかすごくヒドい事を言われた気がして。まるで私がりっちゃんをお金で買ったみたいなの言い方されて。なんで私がそこまで言われなきゃいけないのか、納得いかないわ」

桜井に言われた言葉は、思い込めば不快なものだったので、ゆかりは今日、律に会うまでは考えずにいたが、改めて口に出すと、どろどろとした、怒りに近い感情がわき出して来た。

「りっちゃん、もしかして桜井さん達と何かあったんじゃないの？だから私とりっちゃんのことにも辺に疑って、難くせ付けて来たのか考えられないんだけど」

半分冗談まじり、でも、出て来た言葉は、『もしかしたら』と、普段自分の心に占めていた疑問も、つい口をついて出た。

律はぴたりと歩みを止め、驚いた様にゆかりを見下ろした。

「何かって、何？」

「え？」

律の栗色の瞳には、いつもの暖かさが微塵も無かった。

「彼女達と寝たとか、そういうこと？」

畳み掛けて律は言う。

ゆかりは何も言えなかった。それが、さらに律を苛立たせた。

「黙っているってことは、そう思ってたんだ」

「そ、そうじゃなくて……」

ゆかりは律を見上げた。彼の顔には明らかに怒りの色が浮かんでいた。

「じゃあ、なんだよ。悪いけど、オレはクライアントには手を出さないし、そんな事してまで女を釣らなきゃいけないほど困っているわけじゃないから。今すぐ気分が悪い。今日はここで帰るよ。桜井さんの友達の事は、オレがもう一度彼女に話しておくから。ゆかりには関係ない事だし。巻き込まれたのは悪かったと思うけど」

そう吐き捨てると、律はくるりと背を向けて、その広い歩幅で立ち去った。

「りっ……」ちゃん……と呼び止めようとして、律の名前を終わりでまで言わずに飲み込んだ。

ゆかりには彼を呼び止められるものは何も無い。そう思うと、鼻の奥がツン、とした。

「……つくしゅっ！」

風が強い。

ふと顔を上げると、いつの間にかもう山下公園の入り口が見えていた。

どつりで海風が冷たいわけだー！。

ゆかりは一人、帰路に着いた。

そしてその夜、熱を出した。

第六章 Line

結局ベッドから出られるまでに一週間かった。その間ずっと熱で頭も痛み、心も痛んだ。眠りについたと思えば、ハツとすぐに目が覚める、浅い眠りの狭間を漂っていた。食欲も無く、義務的にみそ汁や野菜ジュースを飲んでいた。バイトも大学も休み、ただ、ベッドで丸まっていた。二回ほど、ゆうほから『お見舞いメール』が来たが、律からはもちろん、何の連絡も無かった。

よく考えてみれば、自分が律に言った事は八つ当たり以外の何ものでもなかった。

律がそんなセコい手段で女の子をつまみ食いしているなど、誰が本気で考えるだろう。当のゆかりだって本気でそんな事は思っていないかった。

それでもあんなことを言ったのは、律の口からはつきりと否定の言葉を聞きたかったから。今になればそれがハッキリと分かる。

こんな結果になってしまったけど。

それに、律は『クライアントには手を出さない』と言っていた。と、いうことは”クライアント”である以上、女としては”対象外”と言う事だ。

結局、りつちゃんにとって私はそれだけの存在なんだ。

ふと、そんな考えにたどり着き、がっかりしている自分に気がついた。それとも自分は、彼が何かしてくる事に期待をしていたのだろうか。

ゆかりは、そんな期待を少しでもしていた自分を浅はかで、滑稽に思わずにいらなかった。

そろそろ起きねば、と自分に気合いを入れ、ベッドから出ると足元が少しふらついた。

何か食べなきゃなー。

母親に甘えてお粥を作ってもらい、遅い朝食をゆっくりと食べた。少し食べただけで胃が重くなった。

シャワーを浴び、久々に体重を量ると2kg減っていた。

食べなきゃ一週間で2kg減るんだ……もう、りっちゃんプロگرامは必要ないかも。

ゆかりはジムへ行く支度をした。律に会うにはまだ時間と勇気が要りそうだったが、百瀬には会わなくてはいけない気がした。

一週間以上ジムに顔を出していない。面倒見の良い彼はきつと心配しているだろう。

大学に行かないのに、わざわざ電車に乗ってジムに行くなんて。

自嘲する様に一人、笑う。

病み上がりなんだから、と声をかける母親に、早く帰ると告げて家を出た。

ロッカーの鍵を手首に付け、マシンルームに行くと、すぐに百瀬の背中を見つけた。彼は指導中だったので、ゆかりはエアロバイクを使う事にした。

あまり重いトレーニングをしたくない時や、考え事がある時にはいつもバイクを選んだ。

しばらくばーっとペダルを漕いでいると、

「ゆかりちゃん！」

と、百瀬が声を掛けて来た。

ゆかりは首から下げていたタオルで鼻の頭を軽く拭き、頭を下げた。

「久しぶりだね。忙しかったの？」

「風邪引いちゃって……」

百瀬の笑顔はやはり眩しかった。彼の笑顔は眩し過ぎて、逆にゆかりの心に影を落とした。

ゆかりは無理に笑ってみせた。

「痩せたね。というか、やつれた？」

「一週間ただ寝ていたら2kg落ちました。体が軽いんですよ」

「食べたならそんなのすぐに戻るよ」

「と、思ってた戻らない様に体を動かして来たんです。筋肉も落ちただろうし」

百瀬は少し顔を曇らせた。

「度を越したダイエットは危険だよ。まして体が弱っている時にーって、律は知っているの？ ゆかりちゃんが体を壊した事」

律の名前を百瀬の口から聞くと、ゆかりは動揺した。

「知らないと思います。全然連絡取っていないし。私、この前彼にヒドい事言っちゃったんです。多分、すごく怒っていると思います

……」

「そうか。家ではそんな素振り見せなかったから気がつかなかったよ」

「家って……もしかして百瀬さん、りっちゃんと一緒に住んでいるんですか？！」

ゆかりは目を丸くした。

「え？ 知らなかったの？ 律は何も話していないんだな。というか、ゆかりちゃんも聞かないの？ あいつに興味ないの？」

「興味が無いっていうか……あんまり人に干渉するの悪いかなって思ってる」

それはささやかな嘘だった。ゆかりは律に会う度に、律について聞きたくて、口を開きかけた事が何度もあった。しかしそれはいつも言葉になっでは出て来なかった。律のことを知れば知るほど、好きになっっていく気持ちに拍車がかかるような気がしたし、また、自分が聞きたくない事も聞いてしまいそうで怖かった。

「……だから、衝突するんじゃないかな。もっと普段から沢山話を

して、相手の事を分かっていたれば変な事も言わないだろ。言ったとしても、良いコミュニケーションがとれていれば、相手もどういうつもりでそんなことを言ったのか、または言葉が足りなかったただけなのか、すぐに分かってくれると思うし」

ゆかりは弱々しく百瀬を見た。百瀬は白い歯を見せる。

「そうですよね」

「でも、今回ののは、ゆかりちゃんが悪かったって思ってるんだ」

「ええ、完全に」

嫉妬という感情がそう言わせただから。

「じゃあ、そう伝えればいいんじゃないの？」

百瀬はゆかりの肩に手を添えた。百瀬の優しさがぬくもりを通して伝わるようだった。

「そうですよね……」

「それから、運動はきちんと体力が付くまでは休む事。今度は律とおいで。アイツは最近サボり気味だから」

「わかりました、コーチ」

ゆかりの顔にやっと笑みが戻る。

「百瀬サーン」

40代くらいの主婦だろうか。それでもきちんとメイクをして、上下お揃いのスポーツブランドのウェアを来た女性が百瀬に近づいて来た。

「あ、大川さん。今いらしたんですか？　今か今かとお待ちしてましたよ」

良く通る声で百瀬は応える。

「もー、先生は本当に上手なんだから！　先生、これ。受け取ってくださいよ」

と、大川さんは、茶色のリボンが飾られている、金色の小箱を百瀬に渡した。プラリネで有名なチョコレート店のものだった。

「あれっ、いいんですか。こんな高級なものもらっちゃって。参っ

たなあ」

「先生にはいつもお世話になってるから、気持ちだけよ」

百瀬は頭をかきながら、それでも失礼が無いように応じている。

ああ、今日はバレンタインデーなんだ。

ゆかりがそれに気がつくまで、少し時間を要した。

りっちゃん是谁と一緒にいるんだろう。

本人に直接聞いた事はないが、律の様に容姿に恵まれていて、性格もいい男に彼女が居ないわけがないだろう。

そう、ゆかりは思っていたし、律の、「女に困っていない」という言葉は、それを裏付けた様なものだった。

「じゃあ、ゆかりちゃん、早く元気になってまたおいで」

百瀬はそう言うのと、さっそく大川さんの指導を始めた。

ゆかりは、普段なら家までバスで帰る所を、歩いて帰る事にした。まだそんなに外は暗くなかったし、その家までの一歩いて20分ほどの距離で一律に電話してみようと思ったのだ。

メール一本で済ませられないことも無い。

でも、きちんと自分の気持ち言葉を言葉にして彼に伝えたかった。

駅の喧噪、夕食の買い物で膨れたビニール袋を幾つも持つ主婦や、ダッフルコートに身を包む学校帰りの学生達の間を抜け、10分も歩くと一戸建ての住宅地区に入る。車の通りも少なくなる、植え込みが転々と並ぶ歩道を歩きながら、ゆかりはスポーツバッグからケータイを取り出す。薄暗い空の下、ぼうつと光るケータイの画面をスクロールし、律の番号を選択すると、発信ボタンを押した。

耳にびたりと付けたケータイから聞こえる呼び出し音は、いつもよりも大きく響く。

一回、二回……呼び出し音が続く。心臓が跳ねる様に打ち、息を殺して相手が出るのを待つ……。

呼び出し音は永遠に鳴り続ける様な気がした。

『留守番電話サービスに……』

そのアナウンスを聞くと、ゆかりの全身の力が一気に抜けた。ホツとしたがすぐに大きく息を吸い込み、留守録の発信音が鳴るのを待つ。

ピーッ

「りっちゃん？ ゆかりです。この間はひどい事言つてごめんなさい。もし良かったらまた会ってくれませんか。連絡ください。それでは……」

メッセージにしては素っ気ないものだったろう。ゆかりは声が震えない様に努力するのが精一杯だった。それでもゆかりは、多少なりとも満たされた感があった。

自分が、一步踏み出せた事が嬉しかった。

いつの間にか家の前に立っていた。

キィ……

家の門を開ける。居間には明かりが付いている。この優しい光のような灯火が、今のゆかりの心の中にも揺れていた。

「思ったことを口にする……って、りっちゃん言つたよねえ？」

ゆかりはそつと呟いた。連絡が来なくてもいい。そしたら会いに行つて謝ろう。そう思いさえした。

律はその日の夕方、外苑前を歩いていた。

藍色の幕がするすると下りて来て、いつの間にか陽が幕裏に隠れていた。

青山通りの明るいヘッドライトの流れを避ける様に、律は北に向かつて小道を入り、打ち放しコンクリートの小さなビルに入る。

彼は今日、週末に控えているショーのフィッティングに呼び出されたのだった。

一階の事務所で、顔見知りのアシスタントに声をかける。

「あ、加藤君、急にゴメンね。辻さんがどうしてもあと二着、加藤

君に着せたいって。上にディレクターもいるから、フィッティング、お願いね」

アシスタントは、済まなさそうに片手を上げた。

律はアトリエである二階に上がった。

デザイナーの辻とディレクターに挨拶し、フィッティングが始まった。

それが終わると打ち合わせを兼ねて、アシスタント交え、近くのイタリアンで食事をした。

結局解放されて、ケータイの留守電に気がついたのは22時を過ぎてからだった。移動中の地下鉄の中、手すりに寄りかかり手の平の上のケータイを見つめる。

自分の手の平にすっぽり収まるそのケータイは、なんだか普段よりも重い気がした。

先日、ゆかりと後味の悪い別れをしたあと、嫌でも彼女の言葉は律の頭の中でしばらくリフレインした。

まさか、ゆかりに自分と、桜井や他の女達に体の関係があったのかと、少しでも疑われていたなんて。

それは彼にダメージを与えると同時に、あるとき瞬時に怒りと言う感情が出て来た事に、彼自身自身、驚かずにはいらなかった。

突き放す様にして彼女と別れた後味の悪さ――が、留守電の再生をする指を素早く動かした。

『もう会わない』とか、言うなよ……

メッセージが流れるまでの数秒間、律は祈る様な気持ちだった。

百瀬の部屋に帰ると、明かりはついていなかった。百瀬は恋人とデートだった。明かりも付けず、靴を脱ぐのももどかしく、コートを脱ぎ捨てる。

ケータイの番号を押す。

阿月 ゆかり。ござと偏の。

ゆかりは、病み上がりで運動したせいか、体が重く、軽く夕食をとるとベッドに入った。サイドランプをつけたまま、うとうとしていたらしい。

ケータイの着信音で目が覚めた。それに手を伸ばす時に、ナイトテーブルの上の時計に目がいく。

23:16

ケータイのディスプレイには「加藤律」という文字が光の中に浮かんでいた。

どん

心臓が波打つ。

着信ボタンを押すか、一瞬躊躇した。ケータイを持つ手が震える。決心し、ボタンを押した。ケータイを耳に当てる。

「……もしもし……」

「ゆかり？」

ゆかりは瞼を閉じる。ずっと聞きたかった人の声。とても近くに聞こえる。ラインを通した律の声は普段よりトーンが低いようだ。

「遅い時間にごめん。打ち合わせが長引いて。メッセージを聞いてすぐにかけたんだ。寝てた？」

「ちよつと、うとうとしてた……」

「風邪引いたんだって？ 大丈夫か？」

「どうして知ってるの？」

「大学で良田さんから聞いた。無理すんなよ」

りっちゃん、やさしい。そんな人を侮辱した。

ゆかりの頬に涙が一筋伝った。

「りっちゃん、この間はごめんね。私が言った事……怒ってるよね」

「もういいって。わかってるから。こうしてゆかりが電話してくれただし。それに、ゆかりも結構感情的になるんだって、少し発見

？」

律の声は静かに、ゆかりの心に沁みた。ゆかりは胸が一杯で、謝ったあとは何を言っているかわからなかった。

「ゆかり？ 泣いてるの？」

「な、泣いてなんか無いよ。風邪がまだ治り切っていないみたい。鼻声でしょ」

ゆかりは慌てて答える。

「うん。寝起きの声かと思ったけど。あ、それで今週なんだけど、ちよつと忙しいんだ。会うのは来週になりそうだけど。月曜とか、どう？」

「月曜……大丈夫。ジムの日だけど。あ、百瀬さんが今度りっちゃんと一緒にトレーニングにおいてって」

「何？ いつ行ったの？ 病み上がりで行ったんじゃないだろ、まさか」

「百瀬さんにもダメだって言われた」

「ばか。体壊した時はまず完全に調子が出るまで休んでろ。すぐにオレに連絡しろよ。じゃあ、今日はこのまま大人しく寝ろ」

少し律の語調が強くなった。でも、咎^{とが}めているわけではなかった。

「はい、先生」

「分かればよろしい。じゃあ月曜にラウンジな。……おやすみ」

「おやすみ……」

ゆかりはケータイを胸に抱き、丸くなった。

耳には律の声がまだ柔らかく残っていた。久しぶりに、心地よい眠りに引き込まれていった。

律はケータイを片手に、ベランダ越しの夜景をしばし眺める。

いつもより光が淡く、冬空の下に震えているようだ。

律はケータイの留守録に保存したメッセージをもう一度再生した。今、「おやすみ」と電話を切ったばかりなのに。

それから「Happy Valentine's Day……」
と囁いた。

第七章 伏線（１）

”恋に落ちる瞬間”って、あると思う。

その言葉通り、「すたん」と落ちる瞬間。

それは、初めて会った相手に”一目惚れする”と言う場合に限らず、クラスメイトやバイトの友達、部活の仲間、教壇に立つ先生、向かいに座る上司など、普段何でもなく隣で笑っていた相手に、ある時「すたん」と恋をしてしまう。

きっかけは何気ない事で、俯いた時に顔にこぼれた前髪に、自分では届かない棚の物を取ってくれたときの背中の広さに、教科書のある科白せりふが読まれたときの声の抑揚だとか、頼まれた事を済ませたときに「ありがとう」と、かけられる言葉とその目に浮かぶ感謝の色とか。

そういった……普段とは明らかに違う何かに気付く……胸に淡い痺れを感じたり、一瞬息をするのを忘れたり、なんか、いいな。と気に入ったり。

いろいろあるけれども、そんな、いつもと少し違う感情を自覚した時には、もう「落ちて」いる。

大学へ向かう電車の中、ボックス席の窓に少し頭を預ける様にして、ゆかりは流れる灰色の景色を焦点の定まらない目で見ていた。

自分で言うのも可笑しいが、律はいわゆる自分の”タイプ”の男ではなかった。

”タイプ”で言うと、やはり別れた坂下のような――寡黙で、野生の荒さを感じる一方で、優れた判断力と分析力を備え、自分の夢を叶えるために喜んで困難に立ち向かう――”男らしい男”だった。

それが、いつの間にか気がつくと、律の事を考える時間が多くなっていた。

考えると言うよりも、カフェで向かいに座った彼の、いちいちの仕草や、特有の目尻の下がった流し目、カップを持つ美しい手のかたち、「ゆかりはさあ、」と言うときの声のトーン。そういうものが断片的に一つのシーンとなって繰り返して流れて来る。

何よりも彼が、いつも着ている濃紺の、形の良い細身のー多分、ウールとカシミア混であろうー少し光沢のあるコートに長い腕を伸ばして袖を通すところが浮かぶと、胃の辺りがぼうつと暖まるのだった。

多分、そこが「落ちた」ところだと、思う。

ゆかりは、律の瞳を思った。

彼の深い栗色の瞳は、知性で溢れ、優しい湿り気を帯び、冗談を言う時には陽気に輝いた。

しかし同時に、その瞳に良く影が落ちる事にもゆかりは気がついていった。

その影は、自分と話している時にも、不意に射す事があった。

もし、ゆかりが律について話をいろいろ聞きたがったら、彼は快く何でも話してくれるだろう。

でも、その影の存在を仄めかすような問いには？

それについては、多分、彼自身、語れないのではないか。

なぜならその影は、”付加された”ものではなく、何時からか律と共存している物で、彼の一部になりつつあるから。

その瞳に湧く影は、律には見えないだろう。

そこまで考えると、ゆかりはなんだか頭が重くなってきた。
瞼をゆっくり閉じる。

その瞬間ふと頭によぎったのは、彼はとても優しいが、自分がその彼の与える優しさを享受し続けている間は彼との隔たりは縮まないだろうーそして、彼もそれは分かっているのではないか。とい

うことだった。しかし彼は「優しい人」であることを止めないだろう。

人の波に押されながら電車を降り、流され、駅を出たところで空を仰いだ。どんよりとした黒い雲が空を覆っている。足元から冷気が上って来る。

今日は雪になりそう。

ゆかりは前に行くクラスメイトを見つけ、声をかけた。

ランチのあとのラウンジは、暖かく、気だるい空気が漂う。

「風邪どう？ すっかり良くなった？ ちよつと痩せたんじゃない？」

ゆうほは自分ブレンドの茶のコップを口元に持っていく。

「ええ、ええ、御陰さまですっかり良くなりましたし、痩せもしましたよ」

ゆかりは両肘について顎を支える。

「あ、それよりも、ねえ、ふふつ。これ見て」

「あつ！ 新しい指輪！ きれーい。何？ 片桐さんに貢がせたの？」

ゆうほが手の甲をゆかりの前にかざし、その左手の中指に収まる、煌めく小さなパールの指輪を見せる。

「し、失礼な！ バレンタインデーのプレゼントに決まってるですよー！」

ゆうほはメガネのブリッジをその、中指で押し上げた。

「いや、逆ですから。普通。ゆうほがチョコをあげるんでしょうが」

「外国ではどちらがプレゼントしても良いって片桐さん、言ってたし。花でも、カードでも何贈ってもいいらしいわよ」

「そう言えば、片桐さんは元気？」

「うん。今、シンガポールのコンサートに呼ばれて行ってるよ。明

後日帰って来るけどな」

ゆうほには歳が七つ離れた彼氏がいた。Y響のチェリストだった。「いいな」。クラシックコンサートなんて行った事ないよ」

「あら、じゃあ今度一緒に行きましょうよ。チケット、頼んでおくから。やっぱり、いいわよ。コンサート。この前A大使館でミニコンサートに呼ばれた時に連れて行ってもらったんだけど、招待客がほとんどその国の人で、そこだけが、なんだか日本じゃないみたいだったな」

その時の事を思いだして、ゆうほはうつとりする。

「へえー、大使館にも呼ばれるんだ」

「そうよお。まあ、そのコンサートは、10人のチェリストの構成だったんだけど。今度何かあったら誘うね。っていうか、そういうのはあの人と行きなさいよ」

絡む様な視線でゆかりを見るゆうほを、ゆかりはきょとんとして

「誰と？」

と、聞き返す。

「あの男と」

ゆうほは腕を組みながら、小さな顎をくいつと上にあげる。

その先には慌ててラウンジに入ってくる、美しい男の姿があった。

「ゆかり！」

その声に、ラウンジに居たゆかり達以外の学生が律を見、次に律の視線の先のゆかりを見た。ゆかりは恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

ゆかりに近づいた律は、これ以上無い、と言った笑みを浮かべていた。

「あら、りっちゃん、そんなに大きな声を出さなくても気がついていたわよ。あなた、目立つんだから」

ゆうほは目の前に立つ律に微笑む。

「いや、なんか久々にゆかりに会うから、どうしよう、って考えてたら、声の方が先に出た。あ！　ていうか！　時間がないんだ。ゆ

かり、早く来て。授業始まる!!」

律はゆかりの腕を取り、急かす。

「え? りっちゃん、ジムに行くんでしょ。なんで授業……」

「いいから!」

ゆかりは腕を取られたまま、律の迫力に気圧けおされて慌てて立ち上がった。肘にコートをかけバッグを掴むと、何がほかかわからないまま、律に引きずられる様にラウンジを出て行った。

「ゆうほ、またね」

振り返るゆかり。その去って行く二人の背中を、ゆうほは美しい眉根をやや寄せながら見つめ、テーブルに肘をついた。

「りっちゃんはねえ……すごくいい子なんだろうけど……なーんか、あるのよねえ……」

そう呟きながら、指輪をかざし、その輝きにしばし見とれた。

そのまま、ぐんぐん校舎に入って行く律は、腕ではなく、今はゆかりの手を取っていた。

急ぐ彼の歩幅に合わせるのが精一杯のゆかりは、その大きな手の温もりが、自分の頬の火照りを生み出しているのを認識しながら、律に聞いた。

「り、りっちゃん、どこに行くの? 授業って?」

「笹先生の! 笹先生、急がないと授業に出ちゃうから。オレ、今日レポート提出する約束してるんだ。もっと早く来るつもりだったんだけど、昨日打ち上げで……寝過ごした。」

二階の教授室が並ぶ廊下の奥の扉をノックすると、すぐに「どうぞ。」と応えがあった。

「失礼します。加藤です。すみません、遅くなりまして」

律はぺこりと頭を下げながら、教授室に入る。背の高い律が入ると、部屋は随分狭く感じられた。

その後ろに隠れる様にゆかりは立っていた。

「ああ、加藤君。今日はもう来ないかと思った」

笹教授はライトグレーのスーツの上着を掛けた回転椅子を、くりと二人の生徒の方へ回し、体の向きを変えた。

教授は60才前半の好々爺という雰囲気があったが、授業の厳しさは教授陣の中でも指折りだった。

「いや、このレポートは、今日が期限だったんで……」

律はかしこまって、手にしていたフォルダからレポートを丁寧に取り出し、教授に差し出した。

教授はそれを受け取り、

「それでも、加藤君の場合は自主研究だからそんなに根を詰めなくてもいいんだけどねえ……まあ、あっちの学生ならこれくらいは普通だけど」

あっち、と言うのは海外の学生の事だろうか。

パラパラとそれを捲っていたレポートから目だけをチラと上げて、教授はゆかりを見た。

「阿月さんも加藤君のお友達なら、彼からいろいろレポートの構成なんか教えてもらうといいよ。卒業論文で苦労しない様に」

ゆかりはなんとも居心地悪く、小さな声で「はい」とだけ答えた。

教室を出ると、ゆかりははーっと大きく息を吐いた。

「どうしたの？」

階段を下りながら律は聞く。

「笹先生、怖くて緊張するよ。呼吸も浅くなるくらい」

「なんで？ いい先生だよ。レポートの赤も丁寧に入れてくれるし、質問にはきちんと答えてくれるし、的を得た参考文献を紹介してくれるし。ゆかりは、先生の授業で分からない事があっても聞きに行かないの？」

「いけないよー。だって苦手だもん」

「ちゃんと話した事が無いのに苦手って、そりゃ無いだろ。先生は生徒がやる気を見せたら嬉しいと思うけど。ゆかりだってそうじゃ

無いの？ バイトで」

ああ……

「そう言われるとね……。でもただのバイトだから。私」

「バイトでも仕事は仕事だろ。同じなんじゃないの？ 黒板の前に立っているところは、社員さんと。バイトだからって手を抜いていってことは無いんじゃない」

ゆかりはいつもの様に颯爽と歩く律の横顔を見上げる。

ん？ と不思議そうな顔で律はゆかりを見た。

「……今日のりっちゃん、厳しい……この前の事、やっぱりまだ怒ってる？ ……ごめんね。」

そう言いながら歩みを弛め、ゆかりは立ち止まると、数歩前で律は振り返り、破顔した。

「ごめん。そうだよなあ。久々に会ったのに。でも、その事で責めているわけじゃないから」

それを見るとゆかりもつられて笑う。

「わかってるって。りっちゃんは少し教育熱心だよ」

歩き出し、律に追いつく。

律は横に並ぶゆかりを楽しげに見下ろし、

「そうかなあ」とつぶやく。

ジムに行く前に、いつもの駅前のカフェで律はゆかりの記録ノートのページを繰る。

「久々に会って、痩せたな、とは思ったけど……あ、やっぱり - 2, 5 kg だよ。目標より - 1 kg 余計に減ってる。コレ、オレは気に入らないな」

脚を組んでノートに落としていた律は、視線を上げてゆかりを見た。その表情は曇っていた。

ゆかりはミントティーのカップをソーサーに置くと、少し律の方に身を乗り出した。

「なんで？ ダイエットなのに痩せて何が悪いの？」

その語調は少し強めだった。律はノートを閉じて、ゆかりの前に押しやる。

「必要以上に痩せるのは良くないって言いたいんだよ。痩せるって言うのは体を削る事だからね。上手に、要らない脂肪だけ削られればいいけど、間違ったダイエットで体を貧弱にさせるのは危険だってこと。大体、エネルギーである脂肪が減るってことはやっぱり体に負担がかかってるってことだからさ。骨だって弱くなるし、ホルモンのバランスだって崩すし。ホルモンのバランスが崩れば、イライラしたり、夜眠れなくなったり、疲れやすくなったり、肌が汚くなるし。負担をかけ続けるダイエットは、体も神経も壊す、って言ってるの。わかる？」

ゆかりには律の言葉が、なんだか怒りを無理矢理押し込んでいる様子にも聞こえなくてはなかった。

そんな言葉の響きと矛盾して、彼の瞳には何か悲哀の色を見た気がした。

「大体、今回一ヶ月で - 2.5 kg で、じゃあ来月は 1 kg だけ減らしましょう、って言うのだから、体が混乱するんだからね。毎月同じ様に、徐々にリズムを作って減らしていくって言うのがベストなんだよ。体重は減ったままをキープするのが一番難しいし、大事な事なんだ。減らせ続ける事の方が簡単だよ。実際。でも、ゆかりにはそうする必要がないだろ？」

ゆかりは頷く。^{うなず}

なんとなく、頷かせるものが彼の言葉にはあったのだ。

「オレもそれはゆかりには求めていない」

律はすこしくったりしたように、椅子に体を凭^{もた}れ込ませた。長い腕を伸ばし、カップチーノのカップを取り上げる。

その時ゆかりは、彼の瞳の影がぐつと濃さを増しているのを見た。「どうしようかな……取りあえず、- 2.5 kg、これはコレでキープしよう。それで来月は予定通り - 1.5 kg で行こう。ちゃん

と様子みながらね。O・K？」

「O・K」

律は満足げに頷いた。それから、

「行こうか」

と言って立ち上がり、ゆかりのコートを手に取った。

第七章 伏線（2）

ジムのエントランスで、律を見つけた受付の女性が顔を輝かせて「こんにちは。百瀬さん、待ってますよ」と言った。ゆかりには明らかに営業とわかるそれで「こんにちは」と声をかけた。

着替えてから下へおけると、百瀬と律がすでにランニングマシンの前で立ち話をしていた。入り口に顔を向けていた百瀬がゆかりに気がつき、手を挙げる。

「お、ゆかりちゃん！」

ゆかりはそんな百瀬に会釈し、挨拶する。
律も振り向いた。

彼は黒いＴシャツに、グレーのスウェットパンツという何でも無いトレーニングウェアを身につけていた。その彼の肩幅といい、少しタイトなＴシャツが引き立てる胸の筋肉の張りといい、それらを目にしたゆかりの頬が少し上気する。

そしてつい口に出た言葉が

「りっちゃん、なんかエロい……」

その予想もしなかった言葉に律の顔がやや染まり、正直に反応した。

「な、なんだよ、エロいつて！ セクシーとかしなやかな上体とか、そういうボキヤは無いのか？ 文学部の誇りもなにもねーな！」

「だって、モデルだからもっとガリガリかと思ったもの」

百瀬がははは、と笑う。律は持っていたタオルを百瀬の体にぶつけた。

「バーカ。男のモデルはなぜか上半身を見せる事が多いんだよ。それでアバラが浮いてたら逆に貧そうたる。使ってもらえないし。美しい筋肉を維持しておくのも仕事のうちなの」

「最近サボってましたけど」

百瀬が口を挟む。

ゆかりも思わず歯を見せて笑うが、すぐに壁の時計に目をやると「あ、もうそろそろヨガが始まる。りっちゃん、ヨガ90分だからもしりっちゃんが先に終わったら帰っていいからね」

ゆかりは律を見上げて言う。ヒールを履いていないと余計に彼の顔の位置が高い。

律が眉を寄せる。

「何、それ。先に帰れって？ ゆかりはオレと一緒に帰るのが嫌なの？」

「嫌じゃないけど……待たせたら悪いでしょ」

百瀬は横でマシンを調整していたが、そんな二人のやり取りを聞いて割って入った。

「ゆかりちゃん、そんな時は『待っててね』って言われた方が男は嬉しいんだよ。それに律はゆかりちゃんと一緒に帰りたいんだから。オレが男手一つで育てたからいろいろ不器用なところがありますが、そついうところ、空気読んであげてよ」

「モモちゃんに育てられた覚えはないし！」

ふい、と窓の外に顔を向けた律の耳たぶが少し赤い。

百瀬に言われて、律も否定しなかったので、ゆかりは

「じゃあ、終わったらまた来るから待っててね」

律の背に声をかけ、その場から逃げるようにスタジオへ向かった。

「おまえたち、いつもあんな風なの？」

「あんな風って？」

「もどかしいっていうか、お互い警戒し合ってるっていうか……」

「オレが？ あいつを？ そんなわけ無いじゃん。」

律は自分の筋トレに適したマシンに座ると、ウェイトに手をかけ、無言でゆっくり引き下ろし始めた。

あーあ、また自分の中に入っちゃったよ……

百瀬はランニングマシンに寄りかかり、ため息をついた。律がそんな横顔をする時は、もう何を話しかけてもムダだった。

百瀬は体の向きを変えると、マシンルームに入って来た『お客様』に白い歯を見せて、挨拶をした。

ジムが終わると、律とゆかりはラーメンを食べた。L字のカウンターに、テーブル席が三つあるだけのこぎっぱりした店内。湯気がもうもうと立つ大きな鍋の後ろに立つオヤジさんが「らっしやい」と声を張った。魚介系のダシの塩ラーメン。律は湯気がたつそれを勢い良く食べる。

ゆかりは、律の隣で音を立てて麺をすするのはどうかと思ったが、律は自分のラーメンに集中してゆかりが隣にいることも忘れている雰囲気だ。彼は一人で「日本のラーメン、最高、天才」と、しきりに褒めちぎっていた。

ゆかりのバイトの時間まで二人は駅ビルで時間をつぶす事にした。先月までバレンタインフェアでピンクや赤のハートばかりだった店内のデコレーションは全て外されていて、そのギャップからか、店内が随分あっさりしている感じがした。それでも今週末くらいからはきつとホワイトデーのデコレーション一色になるのだろう。

ビルの中に入ると、律は「暑い」と言ってコートを脱ぐ。彼が腕にかけるそれをゆかりは「ちよつと」と、首のタグの部分を返して見る。

律は首を傾げながらゆかりを見下ろす。

そのタグはゆかりもよく知っているイタリアのハイブランドのものであった。

「あ、やっぱりすごくいいコートだ。なーんか、違うと思ってたんだよね。素材といい、普通のコートと。私が男だったら、絶対こんなコート着たい。こんな高いの買えるって、やっぱりモデルの特典？」

律は、なんだ、と笑ってコートを少し持ち上げた。

「これは叔父のお下がり。着道楽なんだよ。だからたまに強請^{ねだ}って、貰うんだ。でも、大抵叔父が若い時のだから時代遅れもいいとこなんだけど」

「でも、さすがに老舗のブランドは形が全然古くさくならないね。

またブームが来たから、かえって新鮮」

「いいよな。60、70年代の服のデザインてこう、かちつと肩身が狭くて」

ゆかりの目が一瞬点になり、思わず言葉を失った。

そしてすぐに律の意図を汲み取ると、笑いが弾け出た。

「ぶつ。そ、それって『肩幅が狭い』ってことでしょ。あははははは」

思わず律の腕をぱんぱん叩きながら腰を折って笑う。そんなゆかりを律は顔を赤くして見ている。

側を通る買い物客もそんな二人を横目で見つつ、過ぎて行く。中にはあからさまに振り返って見る人もいた。ゆかりは顔を上げ、律の視線と合うと、目尻に溜まった涙を指で押さえ、それでもまだ口元に笑いを残したまま、

「ご、ごめん。でも今のはあまりにも普通にキョーレツにツボにきちやっつて」

「『普通』と『キョーレツ』を一緒に使うのもどうかと思うんだけど」

やり返さんとばかりに律は白々しい視線を流す。

「ごめんつて。でも、そういえばりっちゃん日本語上手だよね」

「うん。努力したから……母親が」

「お母様が？」

「そう。だってあつちじゃ日本語なんて使わないんだから、覚えても意味ないし、勉強なんかつまらないじゃん。それを子供の時分から母親が厳しく教えるわけだ。母とは絶対に日本語でしか話さなかったし。まあ、今では感謝してるけど。まだときどき変な日本語使いますけどね？」

最後の「ね？」は、さっきの失敗にツッコんだゆかりへのイヤミだろうか。

「いやいや、私だってたまに変な日本語使ってる時あるから」

「ですよー」

律はしてやったり、という悪戯な笑みを浮かべてゆかりを見下ろす。

「嘘、ホントに私、変な日本語使ってる？！結構文学部の誇りで、言葉遣いには気をつけてるんだけど」

「いやいや、ごめん。他の女の子たちと比べたらずっとまともだよ。まとも過ぎてこっちが疲れる」

「ホント？ 一緒にいると負担？」

ゆかりの声のトーンが沈んだのに気付いたのか、律は手を伸ばして軽くゆかりの頬をつねる。

「冗談だよ。何でそんなところに引つかかるの？あ、もしかしてオレの事好きとか。だから負担になるの嫌とか」

「はあ？！」

ゆかりは慌てて律の手を払う。

「なっ、何言ってるの？！これだからモデルは困りますよ。全ての女子が自分のことスキとか思わないでよっ」

「ですよー」

思いがけなくするりと言葉をかわされ、ゆかりは安堵の気持ちを感じつつも、核心を突かれた事で次の会話の糸口を失ってしまった。

律もなぜか急に大人しくなり、昇りエスカレーターに乗ったゆかりの隣に前を向いて立っている。

ステーションナリーのフロアへ行くために人通りのない別館への連絡通路を歩きながら、律は口を開いた。

「さっきのコートの話に戻るんだけど」

「うん？」

「オレ、着るものって自分の性格がスゴく出るものだと思うてるんだ。例えばオレはダウンジャケットがダメで。軽くて暖かくて便利なのは確かなんだけど、そのイージーな感覚がね。それにどうしたって、デザイン性がない。格好悪い。でも、皆着てるじゃん。皆が着てるから自分も、って言うのもそもそも嫌だし。アイデンティティはどこだ？ってね。それに、安い物を着ていると、やっぱり虚しくなるんだ。心が。高い物はやっぱり素材はもちろん、服自体誇りを持っているから、着ていると幸せな気持ちになる。頭から足の先まで高い物を着る必要はないんだけど、その人と成りが出る服の選び方ってあると思うんだ。自分がどうしても譲れないこだわりとか。オレは、そういうものをゆかりは持っていると思って。大学でゆかりを始めて見た時からそう思ったんだ」

「え？」

ゆかりは足を止めた。

律も足を止め、振り返ると照れくさそうに少し俯く。それから顔を上げて言葉を継いだ。

「ゆかりの着ている物とか、持っている物の趣味がさ。いいなと。この子はちゃんと自分を持ってるって。自分の好きな物をちゃんとわかってるって」

ゆかりは彼の言わんとしていることが読めずに、戸惑った。

「だから……話してみたいと思った。友達になって欲しいって。あの時は特に日本こうちに来たばかりでモモちゃんくらいしか友達がいなかったから」

ああ、そう。

そういうことかあ。

ゆかりの体からふつと力が抜けた。

律はその誠実な微笑みをたたえてゆかりの数歩前に立っている。

「なんだあ、やっぱりね。私の性格の良さは服のセンスからも滲み出てるってわけね。でも、アイデンティティは持つてるか怪しい所よ。だって、坂下くんは、私は『人に合わせてる』って言われてフラれたんだから」

彼女はにっと律に笑いかけ、再び彼の隣に並んだ。律の目に寂しげな光が浮かんだ。

「それは、ゆかりが彼を好きだったからだと思うよ。好きな人には嫌われたくないじゃん。どうしたって、彼に合わせたくないのとは自然なことじゃないの？」

律はゆかりの頭をくしゃつと撫でた。

ひどい。りっちゃん。

どうしてりっちゃんにそんなことが分かって、坂下くんにはわからなかったの？

それって、りっちゃんが私の事よくわかってるみたいじゃない。

今、「友達」っていう伏線引いたのはそっちの方なのに。

優しい言葉をかけないでよ。

「……そう、だったのかな」

「そうだよ」

律の声はゆかりをいたわる様にも聞こえた。

ゆかりの頭の中にはビジョンが浮かぶ。

霧雨の中。段ボールの中に捨てられた子犬。通りがかり、足を止めるのは律。屈み込んで子犬の頭を優しく撫でる。「ごめんな」と言いながら。

拾われない。

その、子犬はきつと私。

第八章 春に吹く

律は、クロゼットの扉に掛けたコートにブラシを当てていた。

3月に入ってから日を追うことに日差しは柔らかく、暖かくなつて行つた。

次の冬までこのコートの出番は無い。

「ゆかりもおまえを気に入ってるってさ」

律はコートに言葉をかけた。

膝上まであるコートは重く、スーツケースの場所もかなり占めたので持つて行くかどうか迷つたのだが、やはり持つて来てよかったと改めて思った。

律はライティングデスクの前に座ると、脇に重ねてある本の一つを取つて開いた。しばらく字を追っていたが、先日ゆかりに言つたセリフがふと頭に浮かんだ。

”友達になりたかつた”

それは決して嘘ではなかつた。

構内でゆかりの姿を見る度に控えめに、しばらくその横顔や背に視線を留めていたことは確かだつた。

彼女は明らかに他の女学生とは違つた。

”明らかに”と言うのは律の目から見て、と言っただけで、多分、他の人にはそんな違いなど気がつかないだろう。

律が日本に来てまず不思議に思ったのが、街で見かける女の子達
がみな、同じに見えることだった。

細くて、そこそこ綺麗。上から下まで気を抜かないトータルコー
ディネイト。

しかし、明らかに「ものすごく高い」ハイブランドのバッグを手
にしている彼女達の服が、その「バッグ」と釣り合いの価格のも
のだと一目で分かると、その彼女達の「トータルコーディネイト」
が馬鹿馬鹿しく、また、彼女達の苦勞を虚しく思わせた。

さらに、ダイエットに勤しむだけの女の骨は空っぽ、頭も空っぽ、
の式が大抵間違っていないことは、日本に来て自分に群がる女学生
達から証明済みであった。

ゆかりには、そういう所が無かった。

彼女はハイブランドのものこそ身につけてはいなかったが、例え
ばベルトや靴の小物は質の良いものを持っていた。

人があまり気にしない所に贅を凝らしているなと思わせたし、彼
女なりのこだわりを伺わせていた。

上から下まで主張するトータルコーディネイトよりも、引き算の
コーディネイトだった。完全武装、というより、服と小物の組み合
わせを楽しんでいるようなスタイルだった。

何度か会ううちに分かったことだが、彼女には品ひんのあるところも
垣間見えた。”品”は一日、二日で身に付くようなものではない。
雑誌にもそれを身につけるハウツーは載っていない。

”品”は家庭で育つ。

隙を見せているようで、自分自身は着崩さない。

オープンに見せているようで、かつちりと線を引いている、そんな彼女の線の内側に入ってみたかった。

なんとなく。

しかし、どうしてあの時に彼女にわざわざ「友達になりたかった」など言ったのか、彼女にそんなことを言う必要があったのか、今思えば律自身わからなかった。

「一緒にいると、負担？」

あの時のゆかりの表情が^{かお}瞼の裏に浮かぶ。

困ったように眉がやや下がり、律がもしそこで「ああ」と肯定すれば泣き出しそうな……

あれには参ったな……

やばかった……

律は机上の本から顔を上げ、ガラス越しに、ちぎれた雲が動かずに浮かぶ空の果てを見る。

「オレのこと好きなんだろ」

冗談のつもりだったが、いともあっさり否定されたことに少しは

傷ついたからか。

傷ついた？

まさか彼女が自分に想いを寄せているとどこかで期待していたのだろうか。

ゆかりのときどき見せる、物言いたげで、それでもやはり口をつぐんでしまう仕草は、自分への想いを悟られまいとする自己制御の一つだと思った？

だから、あいつはいろいろ珍しくて……近付きたかっただけだ……

もつれた毛糸玉のように、考えれば考えるだけ絡まる思考回路に、疲れを感じた。

そして、もう一人別の顔がぼうつと浮かんだ。
忘れていたわけではないけど、久々に、思いだした。

開かれた本のページはなかなか次に繰れなかった。律は本を閉じ、ショルダーバッグにしまうと、家を出る支度を始めた。

駅に向かう途中に小学校の脇を通る。春休みでがらんとした校庭を囲むフェンス沿いに連なる桜は、すでに三分咲きだった。律はその下で足を止めると、花の束の隙間からこぼれる麗らかな春の日差しにそっと目を細めた。

「バイトが楽しくって」

ダイエット記録のノートを差し出しながら、ゆかりの開口一番が

これだった。

春休みに入ってから律はモデルの仕事が、ゆかりも塾の春期講習の準備が忙しかったりと、なかなか二人の時間が合わず、やっと予定が合ったのはホワイトデーも過ぎてからだった。

「前にりっちゃんと言ったでしょ。『バイトだからって手を抜くな』って。あれから私、けっこうきちんと仕事として取り組むようになったんだ。週末とか指導研究会に参加したり。でね、この前、生徒がすっごく可愛くてね……」

今日のゆかりはよく喋る。

前はオレから話題を振ることの方が多かったのに……

光がグラスの水に透き通り、テーブルの上に淡く揺れていた。

律は、オールドファッションな低いソファに体を沈めて、楽しそうに話すゆかりの脚にふと視線を流した。

何でもないデニムのタイトスカートから出ている脚は、ピンクの色みが入ったパープルの、発色の良いストッキングに包まれていた。週末は走っている、というのは嘘ではないのだろう。膝からふくらはぎを下りる緩やかな曲線は、足首にかけて綺麗に狭まっている。

もう少し内側の筋肉を鍛えれば、スリムジーンズが抜群に似合う脚になるに違いない。

「あ、そうそう、私、告白されたんだ」

上の空だった律はその言葉にハッと脚から視線を外し、思わず身乗り出した。

「はあ?!」

丁度、コーヒーのお代わりを運んで来たウエイトレスが律の突然上げた声に驚いて、ガチャ、とソーサーを鳴らした。

「あ、すみません……」

ウエイトレスは軽く頭を下げた行ってしまった。まだバイトの日が浅いのだろうか。

「何、そのリアクション。あり得ないとか思ってるんでしょう」

ゆかりは目を細めて、白けた視線を律に投げかける。そして再びぱつと顔をほころばせて話を続けた。

「あのね、私、バレンタインデーに生徒全員にチョコを配ったの。女の子にも男の子にも。そしたら四年生の亮くんがね、ホワイトデーにアメをくれて。『先生がもう少し若かったら彼女にしてやるのにな。オレが15になったら、先生、オバサンだろ。』だって。かーわいくない？」アハ。とゆかりは頬まで染めている。

律は気を抜かれたように再びソファの背もたれにどさっと体を預けた。

「あーあー、楽しそうだね、ゆかりは。子供に告白されて喜んでさ。^{ガキ}オレなんかレポートがなかなか進んでないってのに。それよりも、肝心なダイエツトの方……」

パラパラとノートを捲る。

なんだ、子供にか……

もう一度心の中でつぶやく。

「あ」

「へへ。減ってないんですよ、先生。まあ、厳密にいうとマイナス0.5kgね。さ、サボってたわけじゃないから!」

ゆかりは律がまだ何も言わないうちから、顔の前で手の平をひら

ひらと振って弁解する。

「いや、いいんじゃない？」

「え？」

ゆかりの手がぴたりと止まる。

「だって、少し前に風邪引いてがくつと落ちただろ。リバウンドしなくてよかったくらいに思った方がいい。よかったよかった。じゃあこの調子で。ちゃんと野菜食べるよ。季節の変わり目はホルモンのバランスが崩れ易いから、海藻とかミネラル多めに」

律はぱたんとノートを閉じ、ゆかりに返す。

「はあ……」

気が抜けたようにゆかりはそれを受け取りながら、カップを口に運ぶ律をじつと見た。

「何？」

ゆかりの視線に気がつき、律は目だけ上げた。

「レポート進んでないの？日本語が難しいとか？……私でなければ手伝うよ？」

律の、カップをソーサーに戻す手が一瞬止まり、彼はにわかになどこかに飛んでいたようだが、それでもカップを置くと、そのまま「ブツ」と吹いた。

「な、何か変なこと言った？」

拳で口を押さえながら可笑しそうに律は言う。

「いや、レポート、英語だから。」

「えー、全部？！」

「そうだよ。だってゆかり達の卒論だってそうじゃないの？」

「そうだけど、普段提出するのは日本語でOKだし……」

少し恥ずかしそうに彼女は俯いた。

「ゆかりこそ、英語大丈夫なの？ 来月から三年だろ。就活とかい

ろいろ大変になって来るんじゃないのか」

ゆかりは鼻先をやや持ち上げて、得意げな笑みを浮かべる。

「なんだよ？」

「こう見えても、私、英語書くのも読むのも得意なんです。TOEICのスコアもそこそこいいんだから。中学の時に、英語の塾の先生がスゴくい先生で。全国スピーチコンクールを親身になって特訓してくれてね、入賞したんだ。それがきっかけで結構英語は努力してるの」

「えー！ 意外！ おまえ、見かけはともかく、地は超和風っぽいのにな！ わびさびとかそつち系」

「りっちゃん、それ褒めてるんだよね？！ いや……でも、文法が間違えずに文章書けても、『論じる』ことは苦手……。ちゃんとテーマ決めて、プロット組み立ててとか。私表現するのがうまくないから。言いたいこと、まとまらない」

「あー、それ、何となく分かる」

「分かりますか」

がくつ、つとゆかりは肩を落とす。

「いいよ、論文の構成とか今度教えてやるよ」

「ほんと？ 嬉しい。りっちゃん、やさしいなー」

現金な奴…… そう思いながらも顔が弛んで来るのをゆかりに悟られないように気をつけた。

「何を今さら。あ、そうそう、オレ最近仕事を立て込んで……読まなきゃいけない本も溜まってさ、」

律はバッグからダイアリーを取り出し、繰り始める。

「次、約束出来るのは…… 4月15日なら…… って、ゆかりの誕生日じゃないか？」

「え？ なんて知ってるの？」

オレンジのフレッシュジュースをストローで混ぜながら、ゆかりの目が驚きで丸くなる。

「だって、おまえ契約書に生年月日書いたじゃん」

種明かしをされればなんてことは無かった。
それでも、律が自分の誕生日を知っていたことはゆかりを喜ばせた。

「何か予定あるの？」

律は伺うようにゆかりに尋ねた。

「え？　これから？」

「いや、誕生日」

「……特にないけど？」

ゆかりは首を傾げる。

「じゃあ、お祝いしよう」

「誰と？」

「……」

律は軽く目眩を覚え、目元を指で強く押さえた。

「……オレと……」

「は？」

ゆかりは律の言葉を理解していないようだった。

「おまえ程、空気の読めない女は珍しーな……」

「えゝ、だって、りっちゃんと誕生日なんて、全然考えてなかったもの。ゆうほとどっか行こうかな、くらいでさ」

「……初めっからハズされてたのか……」。

「え？　でも、いいの?!」

今度はゆかりが身を乗り出す番だった。

「もう、知らん」

律はふてくされたようにソファの背に頬杖を付いた。

「わあー！　空けておいて！　しょう、お祝い！　盛大に！　全部りっちゃんのおゴリで!」

「冗談だろ。ドイツじゃ、誕生日迎えたやつが全部振る舞うんだよ」

「お言葉を返す様ですが、ここは日本なんで。ジパング。わかってる？ やった」

はしゃぐゆかりを見ると、自然に顔がほころんだ。

彼は再びダイアリーを手に取ると、4月15日の欄に「ゆかり」と書き込んだ。

「あ、一つ質問」

律はカウンセラーのように、膝の上のダイアリーをペンでとんとんと突きながら、ゆかりに聞く。

「なに？」

ゆかりは小首を傾げる。

「そのストッキング、どこの？」

「え？ あ……ウオルフォードだけど……」

なに、そんな所見てたの？ とゆかりは悪戯っぽく笑った。

第八章 春に吹く（後書き）

第七章（2）の律のコートに反応するゆかりのセリフを少し変更しました。

第九章 重い「想い」？

体は日に日に軽くなつて行つた。体重も、ダイエットを始めてから3kg減り、順調だ。変動もない。

筋肉が付いて体が引き締まつたせいか、服のサイズダウンはしないまでも、ゆとりを感じるようになった。

走り易くなり、ジョギングの距離も伸びた。

食事も野菜はもちろん、ひじきやもずくの海草類も積極的に摂る。無理にではなく、ストレスを感じない範囲で。

菓子類を減らし、代わりに果物を食べるようになると、チョコレートのだぎつい甘さが苦手になった。

それでも気持ちの方は、律のあの「友達宣言」からぐつと重さを増した。

「はあ……」

ゆかりはエアロバイクをだらだらと漕ぎながら大きなため息をつ付いた。

春休みともあつて普段は来ない曜日にジムに来てみたが、昼間トレーニングに励む主婦たちの姿は、子供の学校が休みの為か殆ど見られなかった。

「自然に」振る舞うって、難しい。

「友達らしく」振る舞うって、どうするの？

前回会った時は、律とカフェで向かい合っている間中『自然に振る舞う』ことに徹した。

あまりにもその事に集中したので、駅で彼と手を振って別れた後は、どつと疲れが襲った。家に帰り着くなり、ベッドの上に傾れ込んだのだった。

律に対する自分の思いには、もうとつくに気がついていてた。自身、「恋ではない」と否定しようにも、もうそれは無理な話だった。

それでも、やっぱり、望み無し……告白もしないで終わったこの恋に、自分はどう対処したらいいかわからなかった。

ある意味、「友達宣言」は、ゆかりにとって一番残酷な仕打ちであつた。ずっと横にいられるが、ずっと重なる事の無い……

あー、もう、どうすればいいのよ！ りっちゃんのバカ！

そう思うと、ペダルを漕ぐ脚はスピードを上げてぐるぐると回転し、暫く経つと「はあ……」というため息とともに、スピードが弛む。

それがしばしの間、繰り返されていた。
端からこの様子を見ていたら、首を傾げるような光景だったう。

「ゆ、ゆかりちゃん……？」

声の主はもちろん、百瀬だった。

彼は近づくと、物言いたそうに手を胸の前に上げていた。

「あ、百瀬さん。こんにちはー。どうしたんですか？　なんか、顔が引きつってますよ」

「いや……どうしたも……ゆかりちゃんこそ、考えがまとまらないみたいだけど……なるべくバイクは同じスピードを保って漕いだ方が効果的だと思うんだ……」

ゆかりはハッと気がついたように脚の力を緩め、そして照れたように笑った。

「どうしたの？　なんか律とあつたの？」

百瀬はバイクの正面で腰に手を当て、仁王立ちだ。

「ちよつ、やめてくださいよ。なんで『何かあつた』ら、いつもりっちゃんなんですか」

「あ、違うんだ」

「え、いや、当たらずともいえど遠からず、ですかねえ」

「何、そのまどろっこしい言い方は。また喧嘩でもしたの？」

百瀬は前からコントロールパネルを覗き込んで、ボタンを押し、ゆかりの設定した負荷を少し上げた。

「あつ、止めて下さいよ！」

「まだ余裕がありそうだから。ほら、心拍数もそんなに上がってないし」

ははは。と腰に手を当てたまま、百瀬は楽しそうに笑う。

いいよなー、こんな、『近所のお兄ちゃん』系の百瀬さんは。

ゆかりはまた大きくため息をついた。

「で、どうしたの？　律と」

「え？　ああ……大した事じゃないですよ。彼にこの前、声を大にして『友達宣言』されたんです。なんか、りっちゃん、構内で私を見て以来ずっと友達になりたかったんですって。で、それで？　何を今さら？　って思っで。あまりにも理解不能なんで、それを考えたら、つい脚に力が入っちゃって」

百瀬は、ふうん、と顎をしゃくった。

「まあ、律は確かに友達少ないからなあ」

「性格は悪くないですよ。むしろ良いってどうか。でも友達、少なくないですよ。構内で彼と同じクラスの子とか、一緒に歩いているの见かける事、ありますから」

「それは取り巻きの子達じゃないのかな。友達って言うよりも。男友達に限ったら、こつちには全然いないんだろうな」

「ふうん」

今度はゆかりが鼻を鳴らした。

そろそろ脚が重くなって来る。汗が額に浮かび、Ｔシャツがしつとりと湿り気を帯びて来た。

「あ、そもそもなんで百瀬さんはりっちゃんと友達なんですか？共通点、ぱつと浮かばないんですけど」

百瀬はぐるりと室内を見回して、他の会員の様子を見ていたが、皆、二人が話しているのを気にも止めずに、個人のトレーニングに励んでいた。

そして、ゆかりに再び向き直り「うーん」と、男らしい顎に手を当てた。

「あいつ、俺の友達じゃないよ」

「えっ?!」

ゆかりは思わず脚を止め、体を起こした。そんな彼女を見て百瀬は破顔する。

「うそうそ。ハイ、後１０分、脚動かして」

ゆかりは再びグリップに体重をかけて漕ぎ出した。

「そう言えば、俺の事知らないでしょ。ていうか、律も話さなきゃ、ゆかりちゃんも聞かないの、俺の事、律に? ……存在薄っ! 俺!」

「いや……! そんな事無いです! ていうか、りっちゃんとそんなに会ってないですし」

まあ、いいや。と、笑みを顔に浮かべたまま百瀬はパネルに手をかけて話し出す。

「俺と律が知り合ったのって、ベルリンでなんだ。俺は出身が沖縄で、高校卒業してすぐにサッカー留学して。あの頃は、もう、メシ、寝る、サッカーってくらいサッカーにのめり込んでさ。もちろん、いきなり一部でプレー出来るわけも無いから、下のリーグから上へ行く事を目標にやっていくんだけど。それで、休みのときにたまに公園のグラウンドで仲間や、その友達集めて遊びでサッカーやってたら、たまにフェンスの向こうで試合見ていたのが、律で。遠目だと、日本人に見えなくもないんだよな。だから普通に『おまえもやる?』って声をかけたんだよ。そしたら、のそつと入って来て。まあそれがきつかけかな。初めはサッカーするくらいの付き合いだったけど、まあ、あいつも半分日本人っていうか、被っているところがあつて、外でメシ食べるようになったり、プライベートでも結構遊びに行ったりね。それからかな」

懐かしむような目をして、百瀬は語った。

「へえー、百瀬さん、沖縄だったんですか。道理で顔が濃いと思いました」

「おいおい、ゆかりちゃん、文学部だろ。”彫りが深い”とかじゃ無いの?普通。まあ、シーサーに似てるとか言われないだけマシか」

二人は同時に吹き出した。

「まあ、結局俺はセミプロまで行ったものの、脚の故障で帰って来たんだけど」

「そうなんですか……」

ゆかりは申し訳無さそうに百瀬の顔から視線をそらした。

「あ、別にそれは後悔していないし。怪我の後、ドイツに残るか帰るか迷っている頃に、あつちで短期留学していた、今の彼女と知り合って帰国を決めたってのもあるしね。で、今鶴見に住んでるの」

ゆかりはタオルで顎の下を押さえた。

「なんかさあ、律って、すこーんと明るい所が無いだろ」

百瀬はジム内ではない、どこか遠くを見つめて言った。

「確かに……」

ゆかりの前ではよく笑う律だが、百瀬が見せるような突き抜けた明るさは無く、例えば、彼の心の底の「おり澱」のようなものが立ち上って靄もやとなり、心を包んで光が入るのを妨げている、そんな気もしなくもなかった。

「あいつも、ハーフってことで子供の頃はいじめられたらしいんだ。小学校でトイレに閉じ込められて、上から歯磨き粉を頭にかけられたとか。そう言う話をした事がある。俺もクラブ内でそうだったし。さすがに歯磨き粉はなかったけど。俺の場合はそんな『差別』があっても、サッカーに打ち込む事で自分を保てる部分はあったし、『差別』って言うのが何か分かっている年齢でもあったからな。要は『違い』だろ。差別って。『違い』って観点から見れば俺なんて『ちがう』所だらけだったから。外見も、言葉も習慣も文化も。だから逆にあきらめがついたけど『まあ、こんだけ違いばいじくられるよな』ってさ。それを”不公平”と取らず、逆に納得させる事も出来た。でも、律は違うだろ。ガキで、言葉だって同じで。少し違うと言えば、外見くらいで。『オレの何がいけないんだよ』って、自分を責めたり、親を責めたり、友人を憎んだり。でも、結局気持ちの処理なんか出来ないよ。傷を負うんだよ。それでも、グレずに育ったみたいだけど……まあ、そんな複雑な子供時代も経験して来て、なんかちよっと暗い所があるんだよ。あいつ」

「分かる気がします、りっちゃんがすごく優しいのは、そんなことがあったからか……って。……なんか、重いですね。」あ、バイクじゃなくて、とゆかりは慌てて付け足した。

ペダルを漕ぐ脚は、既に止まっていた。

「わかってるよ」

ちよつと困つたように眉尻を下げて百瀬は笑つた。

「ていうか、そんなこと、私に話しちゃっても良かったんですか？」
ゆかりはまだ額から流れて来る汗をタオルで押さえた。

「だって、ゆかりちゃんも律の友達だろ……ま、でも気になるようなら今度会つた時に『百瀬さんから子供の頃の話聞いたんだけど』くらいフォローしておいて。あいつの事だから『ああ……』でお終いだと思うけど。俺から言ってもいいけどさ」

「あー！ チーフ、こんな所で油売ってる！ もうとつくに交代ですよ。あと、南がシフトの事で相談したいって言つてましたよ」
百瀬とゆかりは、近づく若いインストラクターの姿を捕らえた。

「あ」

「あつ」

「秦君」

「阿月先輩！」

百瀬は、彼を挟んで同時に驚きの声を上げた若者達の顔を交互に見た。

「何？ 君たち知り合い？」

秦と呼ばれた、がっちり筋肉質の小柄な若者は、一重の目を大きく見開いた。

「知り合いも何も。オレの部の先輩の彼女さんです。いやー、久しぶりですよ。最近遊びに来てませんよね」

秦がにこにこ笑うと、目が線になった。

ゆかりは、あれ？と思いつつ、秦に確認するような声のトーンで言つた。

「あの……秦君、私、坂下君とは別れたの、よ？ 知らなかった？」

秦の目が再び驚きで丸くなった。

「え？ そうなんスか？！ 坂下先輩、ひとつこともそんな事……」
喰いつかん勢いでゆかりに一步詰める秦の肩を、百瀬は軽く叩いた。

「俺、もう行かなきゃならんけど、他の会員様を忘れんなよ」

秦はそこで始めて百瀬がいた事を思い出したようだった。

「あつ、はい！ お願いします！ いや、もう俺、ばっちり見てますよ。目は細くても視力は両方1.5です！」

「秦はホントにバカだな」。じゃあね、ゆかりちゃん。律に何か伝えておこうか？」

百瀬は挨拶代わりに手を軽く上げた。

「あ、じゃあ、よろしく、と……」

「何それ」

楽しそつに、白い歯を見せながら百瀬はマシーンルームを出て行った。

百瀬がいなくなると、秦は再びゆかりの顔を見上げた。バイクに乗っている分だけ、ゆかりの顔が少しばかり上にあった。

「マジっすか？」

ゆかりはバイクから降りかけたが、座っている方が、秦が自分を指導しているように他の客から見えるのではないかと思い、サドルに落ち着いた。

「そうよ。もう一月に。まあ、彼は自分の事ペラペラ話すタイプじゃないから、誰にも言っていないんじゃない？ でも全然それから会ってないわよ。坂下君、元気？」

久々に坂下との共通の後輩に遭うと、坂下の事が気にならないと言えは嘘だった。

「いえ、全然元気じゃないっス」

秦は眉間に皺を寄せた。その顔は冗談を言っているようには見えなかった。

「え？ 怪我でもしたの？」

自分を振った男と言えど、「元気じゃない」と聞くと好奇心よりも心配の気持ち先立った。

「いや、そうじゃなくて、今、自分、納得いきました。先輩、二月頃から全然調子出てなくて。坂下先輩の集中力ってすごいじゃないですか。それがボロボロなんですよ」

ゆかりの脳裏に、昔見た彼の練習試合の様子が浮びあがった。確かに秦の言うように、彼の集中力は普通の人を遥かに上回るものだった。

「もう、先輩、意気消沈って言うんすか、そんなオーラが自分的には、目に余るんですよ。多分、阿月先輩の事、後悔してると思うんですよ。いや、絶対。連絡したくても、先輩、阿月先輩になんて言えばいいか分かんないんすよ。『古い男』っていうか、『不器用』っていうか……あ、またそこがカッコいいんですけど」

ゆかりは壁の時計を見た。そろそろ、本当に行かなければならなかった。彼女はバイクから降りた。

「秦君、でも、私振られたんだから、何も出来ないよ」

ゆかりは済まなさそうに、同じ目線に立つ後輩に言った。

「いや、メールして下さい！ きっかけ！ チャンス上げて下さい！ ……ってか、阿月先輩、もう彼氏出来たとか？ あ、さっきチーフが『律になんとか』って……」

「いやいやいや」

ゆかりは慌てて手にしていたタオルを振った。

「じゃあ、頼みますよ。先輩、絶対元気が出ますって」お願いします！

顔の前で手を合わせて拝む秦の姿に苦笑しながら、ゆかりは「あ、うん……じゃあ、そのうち……」

と、言葉を濁した。

「あざーっす！」

秦は顔一面に笑顔を浮かべた。

ゆかりは、ホームで電車を待つ間、向かいのホームに行き交う人たちを見るときも無しに見ながら、秦の言葉と、坂下の事を考えた。

どうしよう……

あれだけバイクを漕いで体は軽くなったはずなのに、気持ちの重みは、さらに増したような気がした。

黒い線路に反射する春の光が、目に痛かった。

第十章 Birthday

4月15日 晴れ

私の誕生日

ゆかりは和室の姿見で自分の姿を上から下までをチェックする。

ダンガリーのワンピース、ウエストをリボンで絞るタイプ。

マスタードイエローのざっくりローブカーディガン。

足元にはサンドベージュのショートブーツを。

バッグはチョコブラウンの小ぶりのレザートート。

（かろうじて勉強道具が入るくらいの）

甘過ぎず、カジュアル過ぎず。

よし。

今日はりっちゃんとバースディデート。

楽しみでもあり、少し不安もある。

なぜか、って、自分でもわからない。

友達なんだから、”不安”って言うのはおかしい。

変なの。

ゆかりは気持ちに雲がかかりそうなのを振り払う。

「いつてきまーす」

キッチンにいる母親に届くように声を張ると、ゆかりは玄関を出た。

ニコマの授業を終えたゆかりは、関内駅のコーヒーショップで律

と落ち合った。

「うわ、可愛い格好してるなー」

この日のために随分頭を悩ませたコーディネートだけに、律に褒められると素直に嬉しく、またそれを顔に出すのも照れくさく、ゆかりは下を向いて

「あ、ありがとう……」

と言うのがやっとだった。

律は律で、ライトグレーのカーディガンにネイビーの細身のチノパンを合わせていた。隣の椅子にはベージュのツイルコートが掛けである。ゆるい雰囲気を見せるも、やはり日本人離れたマスクがきちんと計算に入った、文句無しのトータルコーディネートだった。スタジアムの脇に色とりどりのチューリップが目を楽しませる。ゆかりは律の隣で、浮き立つ気持ちを抱きながら山下公園への散歩道を楽しんだ。

午後の山下公園は春麗らかな光で満ち、ぬるい風が潮の香りを運んで来る。

小さな頭を前後に忙しく振りながらちよこちよこと歩き回る鳩の後ろをゆかりは追いかけて回す。

迷惑そうに、それでも誘うように彼女の前をジグザグ逃げ惑っていた鳩はやっと、乾いた羽音を立てて飛んでいった。

「そんなガキみたいな事止めろよ。ゆかりだって変なヤツに後ろをウロウロされたら嫌だろー。それより桜見ろ、桜」

咲きこぼれんばかりの桜の梢に、背の高い律は顔を寄せて花を愛でている。ひらひらと薄桃色の花吹雪が律を包む。

「りっちゃん、かなり絵になってるよ」

体ごと振り向いたゆかりは手にしたケータイで写真を撮る。

「うわ、不意打ちとは卑怯だぞ。事務所通せー」

「へへ、お宝ショット、内緒でアップしてやる」

その時、手の中のケータイがピピッと音を立てた。

「あれ、メールだ」

ゆかりは視線を小さなディスプレイに落としてチェックする。後ろからゆつくり追いついて来た律がゆかりのとなりに来た時には、彼女は既にバッグの中にケータイを滑らせるところだった。

「メール？」

「あ……うん」

ゆかりの視線が一瞬泳いだ。

何気ないふうを装い、律は聞く。

「今の、坂下君から？」

「えっ?!」

明らかに動揺した素振りですべてを見上げたゆかりの頬は、心無しか染まっていた。

なんでそこで赤くなるんだよ……

律は面白くなかった。

「ど、どうしてわかったの？」

語るに落ちてるだろ、とは言わずに

「だって、良田さんだったら『ゆうほだった』って言うだろ？ 他の友達でも、オレが知らなくてもゆかりなら絶対に『。。。ちゃんだった』とか言うハズ。そんなこそこそしてたら男だな、って思うよ、普通」

「何よ、こそこそって。別にいちいちちゃんに報告しなくてもいいでしょ。友達の間だってプライベートはあるんじゃない？」
そう言われると律には返す言葉は無かった。

”友達”と言う言葉は時としてとても便利で、時としてなんて忌々しいのだろう。瞬く間に”他人”の密度を濃くする。

「返事打てば？ いいよ、オレに気、使わなくて」

ぞんざいな響きともとれる自分の声色に、律はすぐに後ろめたさ

を感じた。しかし、ゆかりは意外にも柔らかく微笑んだ。

「何言つてんの。」親しき仲にも礼儀有り」でしょ。今すぐ返事しなきゃいけないわけじゃないし」

じゃあ、後でするんだな、と口から出かけた言葉を律は飲み込んだ。

自分が”嫌な男”になっている事に気がついた。心がささくれ立っていた。自分はもつと冷静だと思っていただけに、たった一つの坂下からのメールでゆかりに感情を当てている自分が、滑稽に思えた。

「あ、わかった」

ゆかりの声に我に返る。

「りっちゃん、お腹好いてるんでしょ。だから何かさすぎずしてるんだ。もうお昼も遅いし。ごめんね、気がつかなくて」

「いや……べつにゆかりが謝るところじゃないし」

そうだよ、どっちかっていうとオレが謝るところだろうが。生理前の女みたいになんかわけわからず苛立っているのはオレの方なのに、なんでゆかりが謝るんだ。当てられても逆ギレしないでオレのこと気にして。そんなゆかりの穏やかな態度が余計に自分の荒れた部分を浮き彫りにしたようで、癢に障った。

ちよつと前は”売り言葉に買い言葉”で気まづくなったこともある。

こいつ、なんか変わった……

自分の八つ当たりには笑みまで返して来たゆかりの余裕に、そう思わずにいらなかった。

「ねえ、どうしたの？ 黙っちゃって。何食べるか考えてるの？」

「え、あ、ああ……」

心配そうに律を見ていたゆかりの顔がほころぶ。

「そう。で、何が食べたい？」

「ゆかり」

「はっ？」

ゆかりの目が大きく見開き、体が硬直した。

律は得意の流し目でそんなゆかりを見下ろしながら

「だって、その太股の辺りとか、まだ肉が付いてそうじゃん？ 脂がのつててウマいんじゃないかと」

普段の口調に戻りながら言った。

それを聞いたとたん、ゆかりの眼差しは敵意をむき出しにした。

「何それー！！　そ、それが今日誕生日を迎えた乙女に贈る言葉かなー！！　すっごく失礼！　もう、りっちゃんなんか知らない！　さようなら！」

くるりと背を向け、すたすたと大股で去りつつある背中を、律は慌てて追いかける。

「うわ、ごめん、ゆかり。ゆかりちゃん！　オレが悪かった」

追いつき、思わず肩を抱く。それでもゆかりは歩く速度を緩めずに、ぴくりと眉を上げて冷ややかな視線を隣の男に投げた。

「どちら様？　手を放さないと言えますよ？」

律はゆかりの顔を覗き込みながら必死で宥める。

「今のは、ホントオレが悪かった。そうだよ、今日誕生日なのにな」

「そうよ、りっちゃんが悪い」

……折れる気はないらしい。

「ゆるして」

「ゆるさない」

「じゃあ、昼、なんでもご馳走する。ゆかりの好きなところに行こう」

ぴたりと足が止まる。

「ほんと？　どこでも？」

律を見上げるゆかりの目が異様に輝きを増す。

「え……あ、うん」

「やった！　じゃあ、”篠月”の懐石ランチと、”輪じ真”のあんみつ」

さすがに律も慌てる。

「げ。そんな一流処……本気？　オレあんこ苦手なのに……、ていうか、なんで元町まで行くんだよ。目の前が中華街なんだからそこでいいじゃん。豚まん喰おうぜ。あのデカイの」

「ええ〜！　好きなところ連れて行ってくれるって言ったじゃない。それに誕生日に豚まんて祝つてもらうなんて初めてなんですけど」

「お、いいじゃん、”初体験”。決まりね」

「いや、それちよつと違う……もう、じゃあ、お茶はせめて”輪じ真”……！」

「え……そこは外さないんだ……」

するとゆかりはまた冷やかな眼差しを律に向ける。

「嫌ならいいんです。友達解消。あんこが嫌ならお茶でも啜ってればいいじゃない」

「うそ。全然嫌じゃない。あそこの茶も相当ウマイよな！」

いつもの余裕が今日に限って全く見られず、むしろいつぱいいはいの律に、好意的な違和感を感じながら、ゆかりの口元がほころぶのだった。

「じゃあ、ゆるす……から、手、離して？」

気がつけば、さつきからずっとゆかりは律に肩を抱かれるようにして小競り合いを繰り返していたのだった。

「え……、あ、うん、ごめん」

律は慌てて体を退いた。

なんだか全てがゆかりのペースにはまりっぱなしだった。

中華街はその独特の匂いと、大きなせいろからもうもうと揚がる湯気が食欲を刺激する。制服を来た学生のグループや、観光客で狭い道は賑わっていた。

二人は豚まんて人気の店に連なる列に並び、子供の顔程もあるそれをひとつずつ買うつと、アツアツの皮にかぶりつく。

「ふかふか」。おいしい」

「よかったなー。」豚まんが初誕生祝い」

律もはふはふと忙しく豚まんを鼻を埋めるようにしながらも得意げに目を細めた。

「いや、ホントは懐石だったのに」

頬を膨らまして上目遣いで睨むゆかりに、律の心拍数がやや速くなった。

「ゆかり、顔が豚まんになってる」

「ねえ？ 学習って何か知ってる？」

「……すみません」

そんな律をみてゆかりは小さく吹き出し、豚まんをかじりながら二人は店を冷やかして歩いた。

「あ！」

店の前の簞に積まれた、ビーズで刺繍を施されたサンダルを見ていたゆかりの後ろで、律は声を上げた。

「何？」

「映画の時間！」

ゆかりも腕の時計を見る。

「急ごうぜ」

律はゆかりの手を取って上手に人の波を縫って先を急いだ。その手をつなぐ”という行為が、この場合ごく自然で、それでも、”友達”にしては随分しつかりと自分の手を包む律のそれに、不自然な感じを否めないながらも、ゆかりはやっぱり胸が高鳴るのを抑えられなかった。

映画を見終わった後、二人はみなとみらいのホテルのラウンジの窓際の席で向かい合っていた。「こんな高いところ……」と、ゆかりは遠慮して尻込みしていたのだが、”輪じ真”にも連れて行けなかったし、と律は無理矢理連れて来たのだった。

ラウンジ内は、お茶の時間には遅く、カクテルグラスを傾けるにはまだ早く、空いている席が目立った。それでもシックで高級感溢れる雰囲気ゆかりは溜め息を一つついた。

スマートなウェイターに案内され、自分とは違って物怖じもせずにかウンターの横を歩いていく律の広い背中に、ゆかりは微かに、律は明らかに自分よりも経験値が多いのだと感じた。

「お茶だけだし、遠慮するな」

席に着くと律は片目を瞑ってゆかりに言った。

「ケーキもいい？」

「もちろん。誕生日には基本でしょ」

「嬉しい」

ほんとに、こいつ、可愛く笑うよな……

その素直な笑みに、どうしてか自分が照れくさくなり、窓の外に顔を向けオレンジ色に染まる地平線を見下ろす。街にはちらちらと小さな明かりが瞬いていた。

ゆかりも律の視線を追って、しばし景色に見とれる。港と、街と、観覧車と。

映画を見終わった律は、どことなくふさぎ込んでいた。

ゆかりはそつと目の端で、景色に見入る美しい横顔を盗み見た。

映画は、律の好きな監督のもので、とても良かった。律はそうは思わなかったのだろうか。なんだか、沈黙に押し潰されそうになり、ゆかりは言葉を繰り出した。

「映画、よかったね。女優さんてやっぱり綺麗だわ。外見だけの綺麗さじゃなくて、やっぱり中から輝いてるものがあるよね。それとストーリーがうまく重なって、ぐいぐい引き込まれちゃう。監督がキャスティングにもものすごくこだわるの、わかる気がする」

律はゆかりに向き直り、大人しく彼女の言葉に耳を傾けていた。

「まあ、ここでダイエットの話もなんだけど……でも、綺麗なものを見るって大事だよな。刺激にもなる。女優……映画に限らず、美術館に行くとか、花を育てるとか。心を豊かにすれば体も元気になるだろ。そしたら自分に何が必要かもわかってくる。無駄に何かを取り入れる必要が無くなる」

そんな話を話していると、ウェイターが静かに隣に立ち、銀のプレートから”無駄の無い”プロフェッショナルな手つきで、ゆかりの前に紅茶のセットと小さなドーム型をしたルビー色のラズベリーのムースを、律の前に真っ白なコーヒークップを置き、銀のポットから湯気のたつ褐色の液体をそれに注いだ。香ばしい香りがふわりと立つ。

「いただきます」

「どうぞ」

嬉しそうにムースを口に運ぶゆかりを、心ここに有らず、という表情で律は眺めていた。

映画に出て来た、ちょい役の女優。ラケルに、少し似ていた。

ゆかりにはまだ彼女の事を話していない。

話した方がいいのか、実際迷っていた。

どうせオレはそのうちベルリンに帰る。だから、話す必要は無いのではないか。それは、つまり、帰る事はゆかりとの関係を絶つ事を前提としているのか。

ずっと頭にあって、自分でも答えを出せないでいた。

「ゆかり……」

「ん？」

ゆかりが少し首を傾げて自分を見ている。そんな彼女の顔を見ると、話し出そうとした気持ちごとたんに挫けた。

「え、と……誕生日、おめでとう。まだちゃんと言ってなかったな」
ゆかりは柔らかく笑った。

ラウンジの照明のせい、それは随分大人びて見えた。律は今ままで彼女のそんな顔を見た事が無かった。

「ありがとう」

ゆかりは紅茶のカップに口を付けた。

律は少し照れたように目を伏せ、またすぐに窓の外に視線を流した。

りっちゃん、今、何か他のこと、言いかけたよね……りっちゃんは最近そうやって、何か言いかけて、飲み込む。

私、そんなこともわかるくらい、りっちゃんのこと見てたんだよ。りっちゃんがよく、どこか遠くを見ている事もね。

今年の誕生日は、すごく楽しくて。

でも、ほろ苦かった。

そんな誕生日は初めてだったよ、りっちゃん。

第十一章 分岐点

何か言いたげに少し口を開き、その気配に顔を見上げると少し唇が震えている。

次の瞬間にはなんてことの無い、他愛も無い言葉が彼の口から紡ぎ出される。

ゆかり、そういえば塾どう？

ゆかり、最近ちゃんと走ってるの？

少し前まで、私がそうだったからわかる。

りっちゃんには私に何を話したいんだろう。でも、それは私を喜ばせる類いのものではないことは確かだった。むしろ……。

だから、私も敢えて悪い質^{たち}のびっくり箱の蓋を自分から開けようとは思わなかった。

「……それで、来ちゃったの。坂下君から。メール？」

ゆうほはテストの選択問題の単語を一つ一つ読み上げるように言った。

カッコ内の単語を正しい順にならべ一文を作りなさい。

S + V / S + V + C / S + V + O / S + V + O + C

……

天気がよかったので自販機のパックのジュースをそれぞれ手に、ゆかりとゆうほは中庭のベンチに座っていた。授業はもう始まっていて、たまに学生が前を通るくらいだった。

「うん。誕生日おめでと違って」

「それだけ？」

「うん。それだけ」

ゆかりは細いストローを前歯で軽く噛んだ。

「で、返事はしたの？」

「うん。ありがとう、って」

「それだけ？」

「うん。それだけ」

うーん、とゆうほは腕を組んで美しい眉を寄せた。その苦悩の表現を見せるシワさえも、美人には一つのエッセンスとなり演出の効果を発揮する。

「会うの？」

今度はゆかりが、うーんと空を仰いだ。

「わからない」

本当に、わからなかった。今となつては涉に会つても会わなくても構わないと思えるくらい「失恋後」の状態は落ち着いていた。でも、どちらかという会いたいような気もした。今の自分を見たら涉はなんて言うだろう。心のどこかにそんな好奇心が湧いているのも否定できなかった。

ダイエットも最終段階で、実を言うと目標クリアの - 4 kg まであと 0.5 kg 減らせばいいだけだ。多分来週あたりで目標は達成されるだろう。契約終了まではまだ三週間あった。

そんなゆかりの心中を読んだかのようにゆうほは友を覗き込んだ。

「坂下君、今のゆかりをみたら惚れ直しちゃうかもね。かなり痩せたよね」

「かなり、ってほどでもないけど」

トレーニングのお陰で体は確かに締まった。体重計の数字は、筋肉が付いたためか激変したわけではなかったが、ジーンズは型によつては一つサイズダウンした。

「根気よくダイエット続いたよね。そう言うのってリバウンドも無

くて理想的なんじゃない？」

「そうなの。食習慣も変えたとね、体が素直になるっていうか、クリアになったようで。肌トラブルも実際減ったし。意外と忍耐力も付くしね。応用も利く。」昨日は食べ過ぎたから今日と明日は野菜中心でいこう”とか。昔だったら、一日食べ過ぎたら”あー、もうダイエット終わり！”って諦めちゃってたけど。ちゃんと自分がコントロールすれば数字にも出てくるのよ。それが楽しいかな」

「そうだよね」。確かに肌も綺麗だわ。羨ましい。毎週りっちゃんにアドヴァイスもらって。それなら痩せるわよねえ。私も頼もうかなあ」

「なんか、もう受けないって言ってたよ。ていうか、ゆうほ、私より細いのに痩せる必要無しだよ」

「私が細いのは代謝が悪いだけよ。胃下垂気味らしいの。りっちゃんてば……ふうん、ゆかりが”最後の女”なんだあ」

「いや、そう言う意味じゃなくてね、なんか帰るみたいだよ。ベルリンに」

「あら、いきなり遠恋なの?!」

「ねえ、どうしてそうなるの？」

ゆかりは困ったように笑った。

「だって、あなたたちなんだかい雰囲気なんだもの。親友の私としては是非とも円満にまとまって欲しいのよー」

祈るように鼻の前で手を合わせて、彼女はゆかりに迫った。

「ああ、親友のその歪んだ愛が私を苦しめるよね……」

ゆかりは芝居じみた手つきでその”祈りの手”をやんわりと押し退けた。そして真面目な顔を作り、彼女に言った。

「多分、だけど。りっちゃんには向こうに彼女がいると思うの。りっちゃん、最近何か言いかけてはやめるのよ。そういうのって、やっぱり女の人絡んでいると思わない？ でも、彼女について相談したいのなら、なんではっきり言わないのかそこがよくわからないのだけど。私はただの友達なんだから、ぼんって気軽に話しちゃえ

ばいいのにね」

ゆかりはズズツとフルーツ牛乳を啜った。

「それは……」

ゆうほはゆかりが冗談を言っているのではないかと思った。そう
でなければよっぽど”鈍いか”だ。

それでも時として問題の渦中にいる当事者よりもその外にいる者
の方がことの全体を良く見渡せることがある。ゆかりの場合はまさ
にそうだった。

ゆうほは律の気持ちの変化に気がつかない親友に歯痒さを覚え、
また、律を哀れんだ。律が彼の背負う”何か”によって前に進めな
いことに。多分それは、彼一人では解決し得ない類いの厄介なもの
に違いなかった。

「それは……」

ゆうほはもう一度自分の言わんとしていた場所に戻って来た。で
も、彼女は自分の今考えていたことと全く違うことを口にしていた。
「ひょっとして彼はゲイだとか。最近では珍しくもないけど、ゆか
りとせっかく仲良くなって、いざカミングアウトしたら嫌われると
でも思ってなかなか言い出せないとか」

ゆかりは目を丸くして親友の顔をまじまじと見た。

「えー、それは無いと思うけどなあ。……いや、でも確率はゼロじ
やないかもね……それか、バイとか……」

その場の淀みかけた雰囲気のを和ませようとしての発言がともに
受けられたことにゆうほは慌てた。

「いや、それは、例えば、の……」

ピ。ピ。ピッ……

「あれ、メール……」

ゆかりはトートバッグの中を掻き回してケータイを出すとそれを
開いた。

「あ」と言っただま口はそのかたちで開いたまま、彼女はメールの
文字を目だけで素早く追った。

「りっちゃん？」

噂をすればなんとやら、ねえ。とゆうほは微笑んだ。

ゆかりは何とも複雑な表情を顔に浮かべて、ゆうほの顔の前にケイタイの四角いディスプレイを突きつけた。彼女の目にまず入ったのは、きちんとやすりをかけられ桜色のマニキュアに塗られた指。そしてそれらに包まれたディスプレイに浮かんだ文字。

”よかつたら会えないか 渉”

坂下渉からだった。

「ねえ、加藤律君？」

百瀬が律の名をフルネームで呼ぶときは3パターンあった。

1・説教する時 2・メシを作って欲しい時 3・真剣な悩みを聞いて欲しい時

いずれにせよ、律にとってそれは気持ちの良い響きではなかった。百瀬は6缶パックのビールを居間のテーブルの上にガンと置くと、借りて来たDVDをセットし始めた。

翌日が休みなので夜更かし決定、らしい。そして律はそれにどうやら付き合わせられる、らしい。

それでもDVDをセットしているくらいだから、大した話でもないのだろう。

「そうやって呼ばれるのも久々な気がするけど、今回は、何？」

テレビの前のソファにどっかり座り、律は開き直ったようにその背に反り返った。

隣に来た百瀬の差し出すビールを受け取り、プルトップを上げた。
「これ、本物のビールだからな。発泡酒じゃないぞ。日本の味も覚えておけ」

「まあ、日本のだって美味いよ。でも高いよな。ドイツじゃ同じボトルで水より安いのに」

「なあ」

百瀬が同意する。そしてぐびぐび喉を鳴らしてビールを流し込んだ。

DVD新作の映像が流れていた。

「だから、何なの？ モモちゃん」

まるで律が隣にいないかのように画面に顔を向けている百瀬の横顔を見た。なぜさっさと話を切り出さないのか。

「ラケルから連絡があった」

なんの抑揚もない声で画面を見入りながら百瀬は言った。

「え？」

体中の血がいつぺんに引いた気がした。冷えたビールのカンが指先に痛かった。それなのに顔だけがカツと火照っていた。缶半分飲んだところで酔うわけが無いのに。

「Fbで。SNSの、おまえも入ってるだろ。でも、おまえ一度アドレス変えたもんな」

そんなことはどうでも良かった。彼女は、なぜ今頃連絡などして来たのだろう。今さら。

「で、何だつて？」

喉の奥の粘膜がカラカラに乾いて張り付いているようだ。声をなんとか絞り出した。

「元気？ って。律も元気かって。メアドが変わったから連絡が来ないって」

「それだけ？」

「それだけ。見るか？」

百瀬は二本目のビールに手を伸ばした。

「いい」

律は即答した。それは百瀬が今この瞬間にでもそのメッセージを突きつけることを恐れているかのようなだった。

先日のゆかりの誕生日に坂下からゆかりに連絡があったことと、このタイミングでラケルから百瀬に連絡が来たことが律にはどうしても偶然だとは思えなかった。それは偶然を装った運命の啓示ではないか。自分の進むべき方向と、ゆかりの進むべき方向と。

映画の本編が始まっていた。雪の降るNYの路地裏で、老人が二人のギャングに撃たれたところだった。

「それだけ？」

「……あ？」

ストーリーを追っていた百瀬は、律の声が自分に向けられていると認識するのにやや時間がかかった。いや、本当のところはそういう振りをしていただけだった。彼は律にどうやって本題を切り出そうかと頭の中ではそればかり考えていたところだった。さすがにカンのいい律は、百瀬の話がラケルのことのみに留まらないと悟ったようだ。百瀬は顔だけを律に向けて尋ねた。

「もう、ゆかりちゃんには話したの？」

「何を」

「何って、とぼけるなよ。ラケルのことに決まってるだろ」

「別に……ゆかりには、関係ないよ」

「あ、そ。結局そうやって上手く上辺だけで付き合って行くんだ。そうだな、おまえどうせあっちに帰るもんな。そしたらもう一生ゆかりちゃんに会うこともないだろうし？」

「なんで一生会わないとか、モモちゃんが勝手に決めるんだよ。ゆかりとはいい友達でいたいと思ってる。でも、友達に自分のことを全て話さなきゃいけないなんて法律はないだろ」

律はビールを煽った。頭の中でゆかりの凜とした声が響いた。

”友達の間にもプライベートはあるんじゃない？”

その言葉は律の中になにか決定的なものを植え付けた。亀裂、といつてもいいかもしれない。

自分は彼女の”平均的友達”よりももう少し踏み込んだ位置に立っていると思っていた。しかし、あの時の彼女の言葉はそれを自惚れだと自分を揶揄していたのではないか、今改めて思った。

「自分のこともロクに打ち明けられないような相手が”いい友達”なんだ。随分勝手なもんだな。おまえ、ゆかりちゃんをバカにしているんじゃないだろうな。おまえだったらもう気がついてるだろ、彼女はおまえに好意を寄せてるってことくらい」

「……いや、なんか、最近モト彼と連絡とってるらしいよ。あいつだってそういう類いの大事なことはオレに相談しないからな。お互い様じゃねーの？」

律は自分の笑いが卑屈になっていることに気がつかなかった。

「オレが、ゆかりちゃんに話してもいいか？」

「なんで……？！ モモちゃん、今人の話聞いてなかったの？ なんで、わざわざ話を面倒くさい方に持つて行くんだよ」

「おまえ、そろそろ過去から抜け出せよ。率直に言えば、自分からラケルに連絡をとることもしないで、ゆかりちゃんに素直に助けを求めるでもなく、メランコリック気取って影をちらつかせて全ての不幸をわかつているような顔をしているおまえが鬱陶しいんだよ。

オレにはわかる。ゆかりちゃんなら……」

「そういうのを勘違いって言うんだよ！ モモちゃんは全然わかってない。何が分かるって？！ 人の気持ちはそう簡単に右から左に変わらないんだよ。言葉をそのまま返すようだけど、お節介も度を過ぎると鬱陶しいんだよ」

普段の律には珍しく声を荒げてそう言うと、彼は新しいビールを一本掴んで立ち上がった。

「もう、オレ寝るから」

百瀬は同情の色をこめた眼差しで律を見上げた。律は闘争心丸出しで百瀬を上から睨みつけていた。

「なあ、オレがゆかりちゃんに話してもいいか……？ おまえとゆかりちゃんが出会ったのは偶然じゃないんだよ」

百瀬はもう一度確認するように言った。

「はあ？」

「人と人の出会いで偶然なんかないんだ。……それに、ゆかりちゃんはおまえが選んだんじゃないか」

……

そう言われると返す言葉がなかった。

「勝手にしろよ」

律は踵を返し部屋に入ると、音を立ててドアを閉めた。

「それに、その映画もう見たし！ 借りるなら新作借りて来いよ！」
ドア一枚隔てた向こうから、律の声が聞えた。

「だってなあ……真梨子がオレのことエドアルド・バレリーニに似てるっていうからなあ……」

誰に聞かせるでも無く百瀬が呟く。

「生え際とかじゃないの？！」

すかさず律の罵声が飛んで来た。

「うお、聞してるし」

Yes , chief . No , chief . I don't
know chief . . .

その”似ている”俳優が相手に指を突きつけている映像が流れた。

それだけで済めばどんだけ楽だか……

百瀬は画面に向かって呟き、そして諦めたようにソファに腰を落ち着けると、ビールをもう一口飲んだ。

やっぱ、あっちのビールの方が美味いかもな……

彼はベルリンにいた頃に思いを馳せた。

あの頃、律とラケルと百瀬はそれぞれ忙しい合間を縫ってよく会っていた。大抵ラケルが律のフラットで食事をしてからクラブに出かけたり、夏は公園の芝生の上でグリルをし、21時過ぎてやっと暗くなるまでだらだらとビールを飲み続けて過ごした。フリスビーにも、バドミントンにも興じた。後半はそれに百瀬の彼女も加わっていた。あの頃の律はよく笑った。ラケルの隣で無防備で、無邪気な笑顔を絶やさずにいた。

その時の律の顔を、百瀬はまだはつきりと覚えている。

その顔を、律がゆかりと一緒にの時に見せたのには驚いた。だから、百瀬なりに淡い期待を抱いたのだった。ゆかりと律なら。

そしてラケルの突然のメッセージ……それが何を意味するのか彼にはまだ分からなかった。自分が彼女に連絡をとるべきか……。

百瀬は目を閉じ、軽く頭を振った。

こういうときは、流れに任せるしかない。

それが、彼の生きる上でのやり方だった。

第十二章 渦中の人

トーン、トーンとキャップを付けたままの青いボールペンが、膝の上に開かれたノートの上に一定のリズムで落とされ、乾いた音を立てていた。

「りっちゃん？」

ゆかりが声をかけると、相手の惚^{ほう}けたような表情は一瞬で消えた。ノートをパタンと閉じる。律は薄く笑ってそれをゆかりに差し出した。

「なんだ、ゆかりはもう目標達成したんだな。それに少し余計に減らして。もうこれ以上頑張ることないぞ」

ゆかりはノートを受け取りながらぱらと手持ち無沙汰にそれをめくった。いままでの、律と自分と繋げて来たもの。

「りっちゃん、1kgなんて減ったうちに入らないよ。まあ、しっかり落とすには苦労するけど、ちょっと食べ過ぎたらすぐに戻っちゃう数字よ。あ……でも、もしかして目標クリアしたから契約は今日でおしまい？」

律は一瞬返事に困った。コーヒークップに手を伸ばし、口に運んだのは時間稼ぎのためだった。ゆっくりとカップを戻し、ゆかりを見て微笑む。

「いや、契約終了まであと2週間あるから、ちゃんとコントロールしてやるよ。この体重をちゃんとキープし続けることに意味があるんだからさ」

「うわー、りっちゃん、ありがとう。そうだね。ダイエットは終わっても、だからってまた前の生活に戻ったら意味がないもんね。そうそう、それに今初がつのおいしい季節だし」

大学の講義の後。いつもの駅ビル、コーヒESHOP。下ろしたレモン色のブラインドから差し込む強い日差し。

クーラーはそんなに効きすぎていない。

ゆかりはあの屋内でカーディガン無しでは耐えられない冷気が苦手だった。電車もなるべく弱冷房車両を選んでいた。

律はゆかりの口からとうとうと出てくる初がつおのレシピを口元に笑みを浮かべて聞いていた。

そして彼は彼女の話聞きながら、契約終了まで面倒を見ると返事をしたことを少し後悔し始めていた。

ゆかりとこれ以上関わってどうなると言うのか。お互いのために良くないだろう、ということは何となく想像がつく。

それなのになぜ。

今一番自分に問いかけたくない質問だった。”今”に限らずこの先もずっと。

「……ね、りっちゃん？」

「あ……なに？」

不意を突かれたことを悟られないよう、彼はわざとらしいほどに落ち着いた態度を取る。

「私たち、友達だよね？」

またそれが。

実際うんざりだった。百瀬もゆかりも。

そのテーマに自分が常に責められている気がした。それでも律は話を聞く姿勢を見せた。

「そうだけど」

「余計なことかもしれないけれど、りっちゃん、たまになんだか元気がないみたいだから。悩みでもあるのかなーと思って。あ、レポート以外でね。まあ、私が出来ることなんて大したことないけど、よかったら話してね。りっちゃん、ダイエットのこともそうだけど、私ばかりりっちゃんに頼っているところがあるから」

ゆかりははにかむ。

いつもは見るたびに密かにその甘さを想像させる彼女の唇が、今日は自分を批判しているように見えた。

そしてこのとき、律には彼女の口調が全てをわかっているようなそれに聞こえた。それがなんだか癪に障った。

『悩み事？ オレはそんな態度を、素振りを彼女に見せていたのか？ バカみたいに無防備に彼女の前にさらけ出していたのか？ 頼っている？ おまえはオレに一度だって頼ったことはないよ。坂下の名前だってオレの前では出そうとしないじゃないか』

「りっちゃん？」

急に黙ってしまった律にゆかりは不安な目を向ける。それに耐えかね、律は視線を落とした。

「ゆかりは…… ゆかりはオレに頼ってなんかないじゃん。ダイエツトのことだってちゃんと金払ってるだろ。それに対してオレは自分の仕事をしているだけだ。そんな風に負い目みたいな物をオレに持たなくてもいいよ。自分のことくらい自分で処理出来るし」

きついくらいの自分の語調の響きが彼を動揺させ、顔を上げさせた。そして戸惑うゆかりの目と合う。

「そ、そうだよ。私に大したこと出来ないしね……」

唇を少し震わせてゆかりは言った。

「そ、そう言う意味じゃないんだ。……ごめん」

律は肩を落とした。そして今度は慎重に言葉を探した。

「なんか最近いろんなことがあって。いそがしくて。自分に余裕が無くなっているのかもしれない……ほんとに、ごめん」

「なんでりっちゃんが謝るの？ こっちこそごめんね、そんなこと知らなくて時間取らせちゃって。りっちゃんも責任感強すぎ。ムリなら断ってくれていいんだから。あ……私そろそろ行くね。今日はジムなの」

「あ、ああ……モモちゃんによろしく」

歯切れの悪い物言いに気がついたが、律にはいまさらどうしようもなかった。

「そつちこそ毎日会ってるでしょ」

ゆかりは白い歯を見せた。

律は立ち上がり際に、テーブルの伝票を取る。

どうしてりっちゃんは謝ったんだろう。

横浜へ向かう電車の中、流れる景色を見ながらゆかりはなんだか腑に落ちなかった。人には機嫌のいいときもあれば悪いときもある。律がその語調を荒げた理由も、彼はきちんと説明した。ゆかりも納得した。律が”謝る”必要はなかったし、ゆかりにとって律が”謝る”行為自体、なんだかとても不自然に見えた。

欧米人にとって謝るという行為は一種の屈辱である、敗北である、と大学の講師は言っていた。

日本人のように波風たてず、あくまで”和”を尊重する人種とは違い、謝ることは彼らに取ってネガティブな行為だ。今までの人生をほとんどヨーロッパで過ごした律にもそういうキャラクターが植え込まれているのではないのか。

それとも律はそんなところだけが”日本人化”しているのだろうか。その場さえやり過ぎせばいい、悪い雰囲気を一変するための逃げ手段として謝ったのだろうか。

それがさっきの「ごめん」だったのだろうか。

でも、もし本気で律が悪いと思って謝っていたとしたら。

一体私が何をしたというの。何に対して彼は本気で「ごめん」と言ったの。

何が彼の口からそんな言葉を出させるようなことをしたのか。人の悩みを、相談にのってあげようというのはそんなに悪いことなのか？ それともお節介は止めるということなのか。

どんな理由にせよ、律の「ごめん」はあの場ではなんだか”不適切”と思わずにはいられなかった。ゆかりは胸の内に、怒りに似た感情が沸き上がるのを感じた。何度か律とは諍い^{いさか}を起こしたことがあるものの、”怒り”を感じるのは始めてだった。こんな些細なことににこだわる自分はおかしい。たかが「ごめん」の一言だ。それに彼は余裕がないと自分を恥じたではないか。

そう思っても一度荒れた海はそうそう穏やかにはならなかった。

「お節介がオレのいいところ、と、真梨子は言う」

百瀬は一人ごちながらPCのスイッチを入れ、オープン前に自分の予定表をスタッフルームで確認する。

今日は高野さんが11時、関さんが12時半、ゆかりちゃんがくるのは大体14時頃。その前に昼飯に行けるか。

今日、ゆかりちゃんが来たら彼女と約束をしよう。ゆっくり話せる日を、時間を。ウマイ物でも食べながら、と思っただが、話の内容が食欲を刺激する物ではなく、その逆になるだろうと百瀬は食事のアイデアを改めた。そうだ。彼女にとって少し重い話かもしれない。そうだな、オレにだってアレはヘビーだったんだから。もしかしてゆかりちゃんが律を好きなんじゃないか、というオレの勘が確かならなさら……

ゆかりは律のこととなると感情がすぐにその顔や仕草に現れるのが、百瀬の目にも余るほどだった。それは微笑ましく、またゆかりが”とても守られた家庭環境”で育てられたことを意味していた。

人を疑うことを知らず、小さな悪戯は子供特有の”可愛さ”に付随されると容認され、手をはたかれることもなく、そのかたちのいい頭を大きな手で二度三度撫でられていたに違いない。

それは我がままに育てられるのとはまた別で、”安心”の中で当然のように育まれる”無邪気さ”だった。そう、ゆかりは”無邪気”だった。

そして百瀬が律のことだからかと、彼女は口では「何ですか？」ととぼけていても、体からたちまち淡いピンクのオーラが漂うのが容易に見れた。

「おはようございまーす」

「おっ、早いな。おはよう」

百瀬は同僚に応え、今日の予定をもう一度確認して頭に叩き込んだ。

その予定、つまり”ゆかりを誘う”ことも。そして彼はきちんとその予定を実行した。

百瀬の突然の誘いにゆかりはやや目を丸くしたが、すぐに微笑んで首を縦に振った。

『明後日のお昼ですね？ いいですよ』

百瀬と約束した当日、ゆかりは約束の時間よりも少し早く、自分が指定した和カフェに来、文庫本をテーブルの上に広げていた。

代官坂を少し入ったところにあるこの店は、ゆかりが元町に来ると必ず入るカフェだった。光が通りを面した窓から入り込み、明るくかつ開放的なのが気に入っていた。店内の一角には白い玉砂利が敷いてあり、カウンターに置かれた火鉢の上のずんぐりとした鉄瓶はふうふうと湯気をわき上げている。

文庫本から目を上げ、通りの方を見ることもなく見る。平日の昼間だからか人通りは少ない。そして今日の気温が歩く人たちのほとんどに半袖を着せていた。

『なんだろう、話って』

百瀬から急に誘われて承諾したものの、当日までゆかりはそのことばかりに考えていた。

それでも、ぼんやりと律のことではないかと当たりをつけていた。それも、律が自分に直に話さないこと。あまりいい話ではないだろう。ただ、どのくらい”いい話じゃない”のかは見当がつかなかった。それでも、やっぱり聞きたいと思った。

『まあ、百瀬さんが来たらはつきりすること。いろいろ考えたところで始まらないし』

ゆかりは再び文字を追った。

「待ったかな」

ゆかりが本から顔を上げ、挨拶を返そうと目の前に立つ男を見てその開きかけた口は、言葉を忘れたかのように動きが止まった。

百瀬は黒のタンクトップの上に、白地にヤシの葉がグリーンと水色で大胆にプリントされたアロハを羽織り、大分色のあせたジーンズをはいていた。椅子を引き、座る。

「暑いなー。今日は28度だって。まだ五月なのにな……あれ？なんか変かな、オレ……」

ゆかりはやつと我に帰った。そして照れたように笑う。

「いえ……アロハ、こんなに似合う人始めて見ました。やっぱり沖縄の人なんですなー」

ゆかりがため息まじりに言う。こんなことお世辞ではなくさざりと言えるのも、ゆかりの素直な部分だと百瀬は知っていた。

「いや、沖縄とか関係なくて、オレが格好いいから何でも似合うんだよ」

百瀬が口を大きく開けて笑うと、ゆかりもつられる。

「おいおい、そこ笑うところじゃなくて。さて、オレ腹減ってるけど、何がおすすめのの？」

ゆかりは今日のランチ、豆腐ハンバーグのセットを二つ頼んだ。

「ごはんは、大盛りでお願いします」

百瀬はそう付け足すのを忘れなかった。

「りっちゃん、今日は？」

律と関係のある二人が顔を合わせて、彼のことには触れないのは逆に不自然な気がしてゆかりは尋ねた。

「あいつは撮影で名古屋だつて。昨日は夜遅くまで勉強してたみたいだし、実際なんだかんだで忙しくしているみたいだな。オレなんか学生時代サッカーしかしてなかったからなあ。よく勉強するんだな、イマドキの学生は」

「えー、私はあんまり……かな。りっちゃんは、かなりやっている方だと思いますよ」

「ああ、そうだよな。あいつは”コレ！”と決めたら結構周りが見えなくなるタイプだから」

「そうですか？ 落ち着いて見えますけどね」

バイトの女の子がランチの乗った盆を運んで来た。ゆかりは本をカバンの中に仕舞う。

「ゆかりちゃんの前では格好つけてんじゃないの？ あいつ」

「そんなことないですよ」

「おお、旨そうだね。いただきます」

ふわりと湯気のたつご飯の茶碗をとり、百瀬はハンバーグに箸を付けた。

とろりとあんのかかった豆腐ハンバーグの上に紫蘇の葉、大根おろし。その横に付け合わせのサラダが盛られ、小鉢にひじきの五目煮、お新香、お椀にお澄まし。

二人は食事の間は食べることで外口を動かさなかった。たまに、料理の感想など言い合った。

食後に百瀬はコーヒーを、ゆかりはお茶のおかわりを頼んだ。

和カフェなのにコーヒーがあるんだ、と妙に感心して呟く百瀬に、

バイトの子は好意を寄せるように小さく笑った。

「話って言うのは、」

百瀬は一口コーヒーに口を付けてから言った。

「たぶん、予想の範囲だろうけど……律のことなんだ」

ゆかりは黙っていた。百瀬はゆかりの言葉を待つでもなく、先を続けた。

「オレがこのことをゆかりちゃんに話すことは、律は承知している」
完全に、ではないが、百瀬の中ではそういうことになっていた。

「実はゆかりちゃんに直接関係のある話かというところでもないんだ。これはオレのお節介、自己満足で勝手にしていることだから、もしかしたら君にとって気持ちのいい話ではないかもしれない。でも、これはオレのやり方なんだ。こんな風にしかできないんだ」

百瀬はコーヒーをぐっと飲んだ。

「で、本題は……」

ゆかりは水を差さぬよう気を使いながら控えめに言った。前置きはいい。敢えてそうは言わなかったが、きっとそれは百瀬にも通じたに違いない。

「あ、ああ、ごめん。オレちょっと興奮してたかも」

ゆかりの口角に笑みが浮いた。

「どこから話そう……そうだ。えと、ゆかりちゃんは、律に今彼女がいると思う？」

百瀬の独擅場だとばかり思っすつかり聞く体制にいたゆかりは、いきなり自分に振られてとまどった。

「え……と、聞いたことはないけれども、私は何となくいるんじゃないかって。なんとなく、ですけど」

うん、やっぱり良く見てるな。百瀬は思った通りだと心の中で指を弾いた。

「律は”まだ別れたわけじゃない”っていうけどね。オレはもう二

年以上も会っていない、メールのやり取りもしていない関係はもう”終わっている”と思うんだ”

百瀬はテーブルの上の手のひらを軽く重ねた。

「律と、ラケル……」って、当時の彼女は言うんだけど、17のときからの付き合いだった。ラケルはスイス人。律と同じモデル事務所に所属していて、事務所のパーティーで知り合ったって言ってた。なんかもう、お互い一目惚れみたいな感じだったらしい。ラケルは飛び抜けて美人と言うわけではなかったけど、不思議な顔をしていた。ふんわりとぼやけているような、それでもスツと光輝くような……。実際律とラケルはぴたりとハマったパズルのピースのような関係だった。まあ、オレが彼らと知り合ったのは彼の付き合いが一年過ぎたあたりだった、そんなにラケルとは深い付き合いではなかったんだけど、それでも誰から見ても二人は若くて、澁刺としていて、輝いていて、何が可笑しいのかいつも二人で笑っていた。そんな二人を見ると、周りもなんだか幸せな気持ちになったもんだよ。それがね……少しずつ狂い始めた。ラケルがだんだん売れ出した頃に……彼女、仕事のプレッシャーから拒食症になってしまったんだ。よく聞く話だけどね。彼女も、そうだったんだ。彼女はもとと責任感の強い子だったから。全て完璧にこなそうと必死だったんだ。”今のままで十分だ”と周りがどれだけ言ってもだめ。もちろん律が言っても本人は全く納得せず、まあ、珍しいことではないが、そのうち鬱病も併発したんだ。あのときは多分、律にとっても彼女にとっても地獄だったと思う。さすがにそういうときはオレも会うのをなんとなく遠慮していたし、まあ、彼女だって人には会いたいと思わなかったんだから、チャンスはなかったけど。一時は律もげっそりするくらい悩んでいたけれど、彼女がセラピーに通いながら、時間をかけてもなんとか状況は良くなっていくと、周りは胸を撫で下ろした。ああ、彼女は乗り越えたんだと。久しぶりに会つと、ずいぶん痩せてはいたけど笑えるくらいにまで回復していた。そう、オレも、律も周りもこのままで大丈夫だと思っていた。

でも……」

百瀬は温くなったコーヒーをごくごく飲んだ。

「鬱病の怖いところはそこなんだな。ふっと気持ちが上向きになつて来たときに、エネルギーが回復してきたときに、そのエネルギーを誤った方に向けてしまう。……彼女は自殺したんだ」

じつと百瀬の話に耳を傾けていたゆかりは、彼の最後の言葉を聞いていたのにも関わらず、理解するのに時間を要した。

「……え？」

「薬を飲んで自殺した。あるんだよ、鎮痛剤でね、10粒もいつペんに飲んだら肝臓が壊れちゃうようなやつが。まあ、そういう類いのを飲んだんだ。あ、結論から言うと、それは未遂に終わった。薬は飲んだけど、病院へ運ばれて助かったんだ。見つけたのは律ではなくて、彼女のモデル友達だったけど。やっぱり彼女も鬱の病歴がある……で、それを知った彼女の両親は、スイスから来て、ラケルが退院した後に彼女を実家に連れて帰ってしまった。自殺未遂の直後、律は、病院へ走ったけど面会謝絶。泣きながらオレのところに来たよ。何日か律はオレのところでは生活して。一人になりたくなかったらしい。まあ、そうだよな。で、ラケルの友達の一人から、ラケルが退院したって聞いて律は彼女に会いに行つた。オレも付いて行つたからよく覚えている。10月で、雲はもう冬のそれだった。どんよりと低く垂れていた。昼間なのに薄暗かった。空気もぴんと冷たくて。彼女の家の近くまで来ると、アパートの玄関からラケルの父親が先に立って、母親が彼女を支えるようにして出て来たんだ。律はラケルの名を呼びながら走り寄った。オレはなんだか見では行けない物を見ているような気がして、そのまま足を止めて遠目に見ていたんだ。ラケルは律を見ようとしなかった。母親の胸に顔を埋めて。母親が済まなさそうに何か言っていたけど、律は無視してラケルにずっと話しかけていた。それでも無駄だとわかったと、黙ってしまった。母親はラケルの肩を抱いて、父親が待っていた車に乗るとそのまま行ってしまったんだ」

ゆかりは、ふと視線を手元に落とした。そして手の中に湯のみがあったことに今始めて気がついたかのようにそれを見た。

「だから、二人は別れたくて別れたわけじゃないし、結果的に”離れて”しまっただけだと、律は思っている」

百瀬が話し終わった後、ゆかりはしばらく黙って正面に座る彼をみていた。しかし、ゆかりの目には誰も映っていなかった。

「どうして百瀬さんがそんな話を私にしたのかよくわからないんですけど……私には何も出来ませんよね」

ゆかりの顔からはなんの感情も読み取れなかった。

「何も出来ない人に、こんな話はしない」

百瀬は挑むような、それでいてどこかすぎるような目でしっかりとゆかりの視線をとらえていた。

正直、ゆかりはこんな話を聞かされたことに不愉快を覚えずにいられなかった。乗って、走り出した電車がまったく違う方向に走り出した。間違えた電車に乗ったと気がついた瞬間。まさにそんな気持ちだった。飛び降りたかった。何も聞かなかったことにして「それじゃあまた」と店を出て行きたかった。

それでもそんなことは出来ない。ここまで切に語り、明らかにゆかりに助けを求めている百瀬にそんな仕打ちが出来るほど、彼女は非常ではなかった。

ただ、自分なりに穏便に、律に関するその問題を解決するのは自分の役割でないことをわかってもらうようにうまく説得するにはどうしたら良いか。

彼女の思考は動き出した。

第十三章 信じる人たち

ゆかりは顔を上げた。もちろん百瀬はまだ目の前に座っていた。百瀬の真っ直ぐな眼差しが、ゆかりには痛かった。

「でも、やっぱりそれはりっちゃん自身の問題、おもいきり個人の問題ですよ。りっちゃんがどうかしないことには物事は何も変わりません」

百瀬は大きく頷いた。

「それはゆかりちゃんの言う通りだ。でも。そうじゃないんだ。律はその過去から、深みから……井戸から出たいともがいているんだ。でもどうやって。彼にはそれがわからない。引っ張り上げてくれる誰かが必要なんだ。せき止められて動けない、その背を押してくれる誰かを。それが、ゆかりちゃんなんだ」

ゆかりは残念そうにゆつくりと頭を振った。

「そんなに付き合いの長い百瀬さんが彼にとって何も出来ないのに、半年そこそこの友人の私が特別なことを出来るはずがありません。百瀬さんは私を買いかぶり過ぎです」

「律は。律は諦めきれないんだ。諦めるって、ラケルだけのことじゃない。彼女を含めた過去全てを。彼がどうにも出来なかった過去を。あのときあすれば、こうすればと後悔しているが、それは未来につながらない。後悔しても前に進めないんだ。そして諦めないから次のチャンスが来ない。ゆかりちゃん、物事は諦めないで達成出来ることと、まるきり反対のこともある。諦めたからこそ別のアプローチが目の前にふと現れることが多いんだ。それに気がつかないヤツは大抵歯を食いしばって、最後の力を振り絞って、ダメになる。律が、そうなるうとしていて。ゆかりちゃん、君に何かをしてくれと言っているんじゃない。それはわかってくれ。ただ、律を信

じてやってくれないか」

「信じるって、何を？」

「君が、信じたいと思うことを、だ」

ゆかりは、百瀬が真剣に語れば語るほど、気持ちが白けて来るのがわかった。彼が、律にとつてゆかりと言う人がどれだけ大事かをとうとうと説くだけ、自分は律に何も出来ないことを確信出来るようになった。ゆかりは百瀬の顔をじっと見た。そして、申し訳ないという気持ちを出来るだけ込めて言った。

「百瀬さんは確かに私たちよりも大人かも。今の若者にはってそういうの、ちよつと煩わしいっていうか。やっぱり重いんです。自分のことでも精一杯なのに、喜んでそんな、他人のこたごたに、しかも男女関係のもつれに首を突っ込もうなんて普通、思いませんよ。そついうのつてお節介つていうんですよ」

言うだけ言うと、再び空になった湯のみに視線を落とした。

百瀬はため息を一つついた。

「知ってるよ」

二人の間の空気にははつきりと温度差が出ていた。ゆかりがなにか次の言葉を繋ごうとすればするほど、『沈黙』の薄い霧がだんだん濃く漂う気配。

そのときタイミングを計ったかのように、お店のおばさんが茶を注ぎに来た。霧は一瞬かき混ぜられた。そのチャンスを逃すまいとゆかりは再び顔をあげ、何かを切り捨てるようにはつきりと言った。

「百瀬さん、私、ダイエット成功したんです。もう就活も忙しくなるし、バイトも期末や夏期講習の準備で大変な時期なんです。だから、ジムもあまり行けなくなると思います」

「……そうか」

百瀬の顔に落胆の色が浮かんだ。話すことはもうないというゆかりのサインをきちんと受け止めた。

「今日は話を聞いてくれてありがとう。君には不快だったかもしれない。でもやっぱりゆかりちゃんにはもう少し律に関わってもらいたいと思った。ゆかりちゃんはすごく素直な人だから。おれの勝手な妄想だけど、あの病んでいる律を助けられるのはゆかりちゃんしかいないって思ったんだ」

もう、そんなこといわないで。私はりっちゃんにとってなんでもない。彼は私に心なんて開いていない。

ゆかりはそう言いたいのをぐっと堪えた。

「そんな。大げさです……」

「いや、実際律は君にあつてから変わつて来ている。それは確かだ。ゆかりちゃん、おれはゆかりちゃんを信じるよ」

百瀬はそういうと一気に茶を飲みほした。

「あ……」

ゆかりは今思いついたように百瀬を見た。

「だからりっちゃんは……私にいつも『痩せ過ぎるな』って……」

百瀬は独り言のようなゆかりの言葉に軽く頷いた。

「そうだよ。あいつは女の子がダイエットをすることに嫌悪さえ抱いている。少し過敏になりすぎてやしないか、ってほどにね。だから、ゆかりちゃんには余計に、間違つたダイエットをして欲しくなかったんじゃないかな」

律がそれだけ『ダイエット』を嫌悪しているのに、自分と律が近づきっかけになつたのがそのダイエットだった。なんて皮肉なんだろう。

ゆかりは窓の外に目を向ける。

ますます強くなった午後の陽光に目が白く焼かれた。

百瀬と別れた後、ゆかりは日に照らされる自分の影を引きずるように、気持ちを引きずって元町を彷徨つた。

歩いているとじわりと汗が肌に滲んで来たが、暑いとは思わなか

った。何か可愛いもの、綺麗な物を見たら気が晴れるかもしれない、何件かお気に入りの中のショップを覗いたが、心惹かれる物は見つからなかった。いや、心ここにあらず、だった。

家の近くの歩道を歩いていると、頼りないヒグラシの声を聞いた。

ゆかりはその晩、ベッドにごろんと仰向けに寝転がると白い天井を見ながら、今日百瀬が話したことを反芻した。

「重い……」

やっぱり、重すぎる。

次にゆかりは、律の立場でシミュレーションを試みる。

恋人と辛い別れをしたとする。

ゆかりは腕を垂直に伸ばし、自分の両手の人差し指を鼻の上で浮かせた状態でくっつけた後、すーっと左右に離れた。

すごく好きだった彼女。いつも一緒にいた彼女。それを引き裂いたのは病気。誰が悪いわけじゃない。彼女も悪くない。りっちゃんも悪くない。

嫌いになつたわけじゃない。

それじゃあ、諦めきれないのは当然だわ。私だったら、やっぱりもう一度彼女に会いたいと思う。それか、やっぱり待ってるよね。……いや、それは彼女にとって、ただ嫌な過去を思い出させるだけ？ りっちゃんに会ったとたん、ひどかった自分を思い出して嫌悪する？

”ラケルがメールをして来たんだ”

百瀬の言葉が浮かぶ。

それだったらいいじゃないの。何年も離れていた恋人が再会。長

い時間は二人を隔てていた障害ではなく、愛を育む糧だった。二人は手を取り合い見つめ合う。そして昔から知っている微笑みを交わすと、陽の沈む波打ち際を背景に、影になる横顔がやがて重なる。

……恋愛小説の王道だわ。

そして、そつとその後ろから二人を見守る女。

それ、私。

そこへ自分の後ろに立つ男。それはもちろん坂下だ。彼女は彼の胸に飛び込む。お互い視線を絡ませ……そこまで映像として頭に流れたが、ゆかりは、何度か経験したのにも関わらず、どうしてもうまく坂下とのキスシーンが思い描けなかった。

ピロピロピロ……

ナイトテールブルの上のケータイが鳴る。ゆかりは顔だけをそれに向けて手を伸ばし、そのガジェットを取る。

「メールだ……」

坂下からだった。

”次の日曜日会えないかな。場所と時間はゆかりが決めて”

ゆかりはケータイを顎に軽く当てて、天井に目をやる。トントんと爪でケータイを弾く。

そして再び頭の中で流れるビジョン。夕日落ちる海。

だんだんと小さくなる律と女の後ろ姿を見つめる。そんな自分の肩に温かい手が置かれる。隣にはかつて好きだった男がいる。自分を見る彼の瞳に懐かしい色が浮かんでいる。一度別れたものの、彼にはやはり自分しかない。男に応えるように軽く頷く。

……って、こういうラストもありかも。全員モトさや。ハッピーエンド。

ゆかりは携帯を持ち直し、親指を素早く動かして返事を打った。送信した後、パクツと閉じられたそれは、胸の上で組んだ手の中

に収まっていた。

ハッピーエンド、か。

ゆかりはもう一度、律が遠ざかっていくところを思ったが、その背中を見つめている自分の気持ちをリアルに感じる事が出来なかった。

悲しい？ 寂しい？ 悔しい？ …… それとも、もともと遠い人？

そういえば、最後に律に会ったのはかなり前の気がする。

「夏休みが始まったら会うことも無いだろうな……」

論文の書き方を教えてくれるとかなんとか約束したけど、もう、どうでもいい。

自分でもなんでこんなにやけっぱちな気持ちになっているかわからなかったが、全てを放棄したかった。

階下で自分を呼ぶ母の声がする。

「はーい。今入るー」

今日のことは、とにかく私には手に負えない。百瀬さんにもそれはつきり言った。お風呂でゆっくり体を伸ばして、全てを流してしまおう。

忘れることは出来ないと思うけど。

ゆかりはベッドから起き、棚の小さなカゴに入っているお気に入りのバスソルトを選んだ。

第十四章 袋小路

教室を出たとたん、むうつとした空気が体を包む。ゆかりは今まで着ていたカーデイガンを脱いで腕に掛け、足早にゆうほの待つカントリーンへ向かった。

バイトまでの空き時間は、彼女と近くの甘味処で課題を片付ける約束だった。

「こっちこっち」

ガラスのドアを押して中に入ると、冷房の風がひんやりと肌に気持ちいい。手を振るゆうほにゆかりも手を挙げて応える。

「お待たせ。しっかし暑い暑い」

ゆうほは広げていた本を閉じると、ぱたぱたと手で顔を扇いでいるゆかりに渡した。

「あー、ありがとう。必要なところコピーしたら返すね」

「いつでもいいわよ。早く場所を変えましょう。聞きたいことがあるんだけど、ここじゃあなんだから」

聞きたいこと？　なんだろう。首を傾げるゆかりの背をゆうほは軽く押して出口へ促した。

大学の敷地を出ると、二人は日陰を選びながら商店街の方へ向かう。焼けたアスファルトから上る熱が、上からは強い日差しが容赦なく肌を焼く。ゆかりもゆうほもハンカチで汗を抑えながら歩いた。甘味処までの道のりは、お互いに口を開く気にもならずほとんど言葉は交わされなかった。

藍ののれんをくぐり、店内に入る。冷房はあまり効いてなかったが、それでも灼熱地獄の外に比べてずっとましだった。それに、店内が冷え過ぎだと目当ての氷も楽しめない。

店内ではやはり同じ大学の女学生が目立った。

「ねー、彼氏元気？」

ごんまりした店内の、やや小さめの4人かけの席に着いて、お茶も来ないうちからゆうほは楽しそうに目を細めた。

「へ？ 彼氏？」

今の自分に馴染みの無い単語を、ゆかりは繰り返す。聞きたいことって、そういうこと？

「いやーねー、とぼけちゃって。りっちゃんに決まってるでしょう」「は？」

「だって、噂になってるわよ。あなた、誕生日にデートしたのよね？ なんかそのデート現場目撃されてたみたいよ。行ったでしょ？ 中華街。最近、構内で二人の姿を見ないのは、そうやって外で会っているからだろう、って」

ゆうほはにやりと歯を見せる。いかにもお嬢様、といった様子の彼女がそんな下卑た種類の雰囲気を見せるのは珍しい。かなりこのネタが気に入って、なんとか真相を掴みたいというのが手に取るように分かる。

「噂、って誰が？！ それにそんな二ヶ月以上前のこと……」

ゆかりはさすがに慌てた。

「誰って、ガッコのみんなよ。噂ってじーっくり浸透していくのよね。で、どう？ 晴れて彼女になった感想は」

「ちょっと待ってよ。そんな根も葉もない噂信じないでよ。大体私がりっちゃんと会わないのは、もうダイエット成功したから。契約も切れたし。もともとそういう約束だったじゃない。その場にいたのは他でもない、ゆうほでしょ？」

「本当に、それだけ？ りっちゃんとは？」

「本当に何も無い。それにね、今度の日曜日坂下君と会う約束したし……」

「あら。彼、確実に惚れ直すわね。ほんと、悔しいくらい綺麗になっちゃって。で、どこで会うの？ 坂下氏とは。私、りっちゃん

にその情報リークしておこうかな。邪魔しに来たりして」

「来るわけないじゃない。やめてよ、余計なことするの。それよりも早く頼もうよ。私、氷白玉宇治金時にする」

「えー、ちょっと待ってよ。じゃあ私はねえ……」

品書きの文字を目で追うゆうほを見ながらゆかりは心の中で大きなため息をついた。

なんだか面倒くさいことになってるなあ。

噂などいずれは消えるものだが、その間に尾ひれがついてとんでもない話が出来上がってしまうこともある。そしてそれが”とんでもない話”であればあるほど、人に知れ渡るのが早い。ましてやそんな噂が律の耳に入ったらどうだろう。

ゆかりはゆつくりと瞼を閉じ、一瞬律のことを思った……そんな心配をするなんてあの律に限って杞憂に過ぎないだろう。たとえそれを耳にしても、彼なら一蹴するはずだ。

だって、私たちはなんでもないんだもの。

「決めた。いちごミルククリームにする。あとでさ、磯辺焼きも食べようよー」

ゆうほは満面の笑みを浮かべる。

我に返ったゆかりも、つられて笑みを返した。

「じゃあ、食べたら早速課題ね。もう少しテーマを掘り下げた方がいいと思うんだー」

「そうよね、そしたら必要な資料もポイント絞って集められるしね」

頼んだかき氷が来ると二人はその甘い涼を楽しみながら、期末試験のヤマや、夏休みの計画、就職活動の戦略についてなど、次から次へと出て来る話題に話を弾ませた。

百瀬は、昼飯もとらず机にかじり付いてレポートに取り組んでいる律を、近くの蕎麦屋に誘った。
そこは汚い店だが、天ぷらは絶品だった。ただし、給料日前だから今日のところは天ぷらはお預けと決めていた。昼も遅いので店内はかなり空いていた。百瀬と律はカウンターに座った。

「ゆかりちゃんに話したから」

百瀬はそう言うと、ずずとそばちょこから蕎麦をすすった。隣に座っていた律の、ざるから蕎麦を取る箸が一瞬宙で止まった。

「で？ ゆかりは何か言ってた？」

律は大根おろしとつゆの量がほぼ同量のそばちょこに蕎麦をつけると、百瀬と同じようにずず、と音を立ててすすった。

百瀬の言葉で全て納得がいった。

律は、ゆかりがその後“ダイエット後調整編”の約束を変更して来た二回目のメールに今朝、眉をひそめたばかりだった。1回目はセミナーを理由に。二回目はレポートの提出期限が迫っているからと。

「おお、おまえ外人のクセにうまく蕎麦するんだな」

「なにそれ、モモちゃん、それ差別発言でしょ、話題変えるなよ、でゆかりはなんて言ったの」

「重い、って」

「当たり前だろ。そんな話いきなり聞かされたら……だからか……」

「何？ 何かあった？」

なぜか嬉しそうに食いついて来る百瀬を横目で見ながら、律は力ウンターの向こうに立つ主人に声をかけた。

「おじさん、エビ天二本ときす、ししとう揚げてもらえます？」

「はい、承知！」

ここの主人は何を頼んでも「はい、承知！」なのだ。

「おい、律おまえ、何頼んでるんだよ！」

「モモちゃんの払いだからね、ここ。当然だけど」

「なにになになに？ おまえ、それ、静かにキレてるってやつ？！
オレが何したつての」

「人のこと勝手にぺらぺらと……」

「おまえが勝手にしろ、って言ったんじゃない」

「おかげで見事に避けられてます」

「ああ……、うん。ジムにも当分来ないって言ってた」

「ほらね。……まあ、遅かれ早かれこういうことになったんだろうし」

律は再びざるから蕎麦をすくい、すすった。

「いいのか？」

律は百瀬を見もせずに口の中の物を飲み込んで言った。

「べつに……いいんじゃない？ ゆかりの決めることだし。別にもとも何も無いし」

「よくねーよ」

「ハイ、お待たせしました！ 熱いうちに食べてね！」

主人が二人の会話を平然と割って、カウンターの上天ぷらの皿を置いた。懐紙に乗ったそれらは淡黄の薄い衣をまとい、見るからにカラリとうまそうに揚がっている。

「あ、どうぞ、モモちゃん、エビひとつはモモちゃんの分だからね」

「あ、どうも………って！ ごまかすなよ！」

律はししとうに箸を伸ばしながら、至極迷惑そうな色を隠さずに百瀬に視線を投げる。

「何逆ギレしてんの。もとはと言えばモモちゃんが撒いた種だろ。シンプルな話を勝手に複雑にしてるのはそっちじゃないか」

「律」

百瀬は背筋を伸ばした。

「なに？　話長くなるなら先にエビ天食べておいた方がいいんじゃない。せつかくおやじさんが揚げてくれたんだからさ」

「お、おう……」

ペースは完全に律に握られていた。

自分は少しでも律に後ろめたいところがあるのだろうか……いや、ここの支払いは俺だし！

それでも素直に勧められるままにまだ熱いエビ天を口に運ぶ。サクッとした歯ごたえ、歯に伝わる肉の弾力と、ほのかに口の中に広がる甘さ。

「うまいな」

「うまいよね」

百瀬は天つゆにエビを浸しながら食べ終わると、箸を置いて律の方へ体を向けた。

「なあ、律……おまえがゆかりちゃんとの関係を”友達”としてくだわる理由はオレにはよくわかる。でもおまえ、これからずっとそうやって人と関わっていくのか？　それでおまえは満足するのか？　楽しいのか？　そうだ。”楽しい”か？　”楽”^{ラク}かも知れないが、おまえが人と深い関係を築かないってことは、相手もおまえにそれを望まないってことだ。寂しくないのか？　人から”望まれない野郎”なんてさ」

律はきすを箸に取ったところだったが、一旦それを置いた。そしてカウンターに置いてある樽を象った唐辛子の入れ物を指先で弄びながら言った。

「モモちゃんなら、わかってくれると思う。今でも分かってくれてると思っている。……オレはラケルのことであの頃、すごく傷つい

た。ボロボロになった。モモちゃん、オレたちはすぐ分かり合っていた。いちいち言葉なんかいらなくらい、お互いのことが理解出来た。モモちゃんも知っているだろう。オレたちはとても親密な仲だった。それなのに。オレは弱っている彼女に”何も出来なかった”し、ラケルもその一番苦しい時にオレを”必要と”しなかった”ばか。それがあの病気の恐ろしいところなんじゃないか”

「……退院した後、彼女はオレを見ようとしなかった」
律の横顔が苦しげに歪んだ。

そこにはいたたまれないものがあつた。律を良く知った百瀬だからそれが見えたわけではなく、多分そこに第三者がいてもきっと同情を寄せるようなものが露骨に現れていた。

「おまえ、それ本気で思ってるのか？ ラケルがおまえを必要としなくなつたから、そんな態度をとつたと……それは、彼女は自分を恥じていたからだろう。自分をみつともないと。自殺未遂までした、自分に負けたその姿を自分の大切な男に見せられるか？」

「でも、オレはそんなこと気にしなかった。彼女が負けたのだとしても。彼女はオレが彼女を軽蔑するとも思つたのか？ そんな男だと？ または同情の眼差しを向けるとでも？」

「そうじゃない、律。自分をそこまでさらけ出せるほどまだ彼女は強くなかつたんだよ。いや、誰でもあの時はそうだと思うぜ？ いやあ聞くけど、おまえ、ラケルとの時間は全て消し去りたいほど悲惨な過去だと思つているのか？」

律の、唐辛子入れを遊ぶ手が止まった。

頭にタオルを撒き、ニツカボツカ姿の鳶職人3人が店を出て行く、二人の他客は無く、カウンターの奥で主人がスポーツ新聞を広げた。

「もう、傷つくのは嫌なんだ。傷つけるのも嫌なんだ。オレはラケルのことで傷ついたし、きつと、ラケルもオレがいたから苦しんだ

部分もあると思う。そういう思いはもうしたくない。ただ、それだけなんだ。単純に」

「ゆかりちゃんは、ラケルじゃないぞ」

「そんなこと、言われなくても分かってる」

律は唐辛子入れをもとの場所に置いた。そして箸を取った。が、再びそれをカウンターのの上に置く。

「モモちゃんさあ、オレをそうやって苛めないでくれよ。ラケルから連絡が来たんだから、それをなんで喜んでくれないんだよ？ ラケルはオレの恋人だったんだ……」

そして律は箸に目を落としたまま、つぶやいた。

「……なんで喜べないんだよ……」

「律……」

百瀬はその言葉にどこか”責め”の響きを聞いた。それは自分に對してではなく、むしろ律、彼自身に向けられたものではないか。

「あ」

「え？」

項垂れていた律が急に顔を上げ、百瀬に背を向けるようにして店の奥の天井近くに据えられたテレビを見上げた。

「すごいじゃん、沖縄。甲子園一番乗りだってさ。やっぱりモモちゃん応援するんだろ？ 地元だもんな」

テレビを見上げたままの律の後ろ姿を見ながら、百瀬はその背中が、昔から見慣れた律のそれではないことに気がつき、初めて戸惑いを感じた。

第十五章 ベクトル

坂下渉との待ち合わせの場所に来るまでの緊張は、彼の姿を見るとどこかへ飛んでしまった。遠目から見ても、彼の緊張が空気に乗って伝わってくるようだった。

お互いに授業のない金曜の午後。彼はメールで日曜日を推していたけど、週末はとにかく人が多くて、久々に二人で会うのになんとかなく相応しくない気がした。

待ち合わせの馬車道駅の改札で先に待っていた渉は、近づくまどかを見てその顔に明らかに驚きの色を浮かべた。そしてそれを素直に口にした。

「ゆかり……オレ、ビックリした……」

きちんと言葉にならないだけに、彼の動揺ぶりは十分ゆかりに伝わった。ゆかりは思わず吹き出した。そして渉は困ったように笑った。

相変わらず不器用な人。

久し振りに会う彼のそんな変わらない様子が懐かしくも、なぜか切なくもあった。二人はなんとなく、申し合わせたように赤レンガ倉庫の方へ歩き出した。

「ビックリしたって……私が、痩せたこと？」

外は相変わらず陽が強かったが、生温い海風がゆかりの薄いフレアスカートの裾を揺らした。

「それもあるけど……すごく、綺麗になったから」

はつきりと物を言う男だったが、こうきつぱりと断言されるとゆかりもさすがに照れた。

「そんなこと……ないよ」

「あるよ。……もしかして、付き合ってるヤツとかいるの？ 秦はいないって言ってたけど。あいつすごいんだぜ。おまえに会っただろ。そのあと先輩のオレに突っかって来てさ。『なんで別れたの黙っていた』だの『あんなに可愛くて今どき性格がいい子を振るなら、オレがもう』だの、なんか支離滅裂なこと言ってたけど。あの迫力をリングで出せよ、ってカンジだったな」

あ、秦君…… ゆかりは大分前にジムで会った後輩を思い出し、そしてばたばたと顔の前で手を振った。

「い、いないいいない。付き合ってる人なんて」

「そうなの？ 一人や二人いそうだけだな……」

渉はまだ探るような、それでいて不安を浮かべた目でゆかりを見た。

「何それ。私はそんなに器用じゃないって渉が一番よく知っているじゃない」

「でも、そんなに変わるとさ……」

「やだ、もうくだいよ……」

少し睨むようにして渉を見上げると、彼はやっと安心したように顔をほころばせた。そして視線をその先の1Fの入り口付近のカフェへ向けると軽い仕草だけでゆかりを店の方へ促した。週末なら列が来ているレジ前も、さすがに平日は空いていた。

渉はフローズンカフェモカを2つ買くと、ひとつをゆかりに渡した。プラスチックの容器にすぐに細かい水滴が浮き上がる。ストロークから吸い上げた、冷たくほろ苦いコーヒーが喉にしてみた。

「でも、大変だったろ。けっこう落としたんじゃないのか。オレも減量の辛さ知ってるからさ……」

「体重はそんなに落ちてないのよ。せいぜい5kgちょっと。辛か

ったのは最初だけね。でも、ジム通いも楽しかったし」

りっちゃんも毎回毎回ちゃんとチェックしてアドバイスもしてくれたし……律の顔がふっと浮かぶ。それを打ち消すようにゆかりは思わず声高に渉に話を振った。

「渉は、変わってないよね。あ、いい意味で。相変わらず鬼のように鍛えているんでしょ」

ややタイトなポロシャツを通してわかる引き締まった体、半袖から覗く小麦色の腕は、筋肉の美しい曲線を描き出している。曖昧なところの無い、くつきりとした彫りの深い顔と、野性的な眼差しは健全だった。

「でも、ゆかりと別れてからまだ一勝もしていない」

「……そうなんだ」

それはどういう意味だろう。私がその事実を知ったところでどうなるんだろう。

その心のうちを読んだかのように、渉はゆかりに向き直ると慌てて言った。

「あ、そんなことゆかりには関係ないんだけど。うん。ちよつと体調管理がなってなかったんだ。そうだ、今度またよかったら練習見に来てくれよ。ゆかりが来たら梶野も喜ぶと思うし、他の部員も……おまえ、何気に人気あったから」

「うそうそ、そんなことないよ。あ、春菜元気？　しばらく会ってないなあ」

渉を紹介した、幼なじみで、またS大ボクシング部のマネージャーの様子をゆかりは尋ねた。

「元気だよ。……ていうか、そんなこと、あるから」

流しても構わないところをわざわざリバーズされて、ゆかりは何も言えなくなってしまった。

「あ、今日さ、オレ見たい映画があってチェックして来たんだ。たぶんゆかりも好きだと思う。その後、飯喰いに行こうぜ。創作料理

のうまいところがあるんだ。まー、コレは梶野のお勧めなんだけど。おまえと久々に会って言ったらさ……あ、今腹減ってる？　なんか軽く食べるか？」

「う……ううん」

ゆかりはただ、驚きで言葉が出ないだけだった。

渉がデートをオーガナイズしているなんて。

昔はゆかりがどこに行くか決め、買い物か、映画か、ドライブか、どこで何を見て、何を食べるかほとんど決めていた。もちろん、その都度事前に渉にはデートの内容を確認してはいたが、99%の確率で返事は「Yes」だった。もし、彼が何かを申し立てるとすれば、見る映画のジャンルや、食事の嗜好、あとは彼の部屋へ泊まるかどうかくらいだったのに。

「それとも、他に見たい映画とかある？　行きたいところとか……」
こうやって伺いを立てるのも初めての気がする。

「う、ううん。丁度その映画、見たかったの」

「そうか。よかった。じゃあ行こうか」

渉はゆかりの手を取る。一瞬彼女は躊躇したが、その男らしく、温かい手にすぐに慣れる。繋いだ時の感覚は昔のままだった。でも、昔感じたような感情の襞の震えのようなものはどんなものだったか思い出せなかった。

律のとはまた違う手。渉と繋いだその数に比べればずっと少ない律の手の感触が蘇って来たようだった。

ちがう。

我に返ると、思わず繋いでいた手に力が入った。少し前に行くようにしていた渉が歩調を緩め「何？」と不思議そうに目だけで尋ね

た。ゆかりは軽くかぶりを振ることでそれに答えると、渉と並んで歩き出した。

渉は、変わった？

それも変に無理をしている風ではなく、ごく自然に。

昔の彼が本当の渉だったのか、今自分に歩み寄ろうとしているのが本当の渉なのか……いや、どちらも本当の彼だろう。

彼を変えたのは私……？

後輩の秦に何かを言われて変わるような男ではない。私と別れたことで彼は彼なりに私のことを考えたのだろうか。それを突っ込んで聞いてみようかと思ったが、そういう言葉は口からうまく出て来なかった。それに、聞いたところでどうなるというのか。

ただ、昔の私が今の渉で、今の私が昔の渉に、その影が重なった。

あの時は。

たとえ毎回デートを自分が全て仕切っていても、楽しかった。

渉が隣にいて、自分と同じ景色を見、同じものを食べ、冗談を交わす。肌の触れ合いと、自分と同じ時間の中に彼の存在がある事は嬉しかった。

でも今思えば、渉はそのとき、今の自分と同じ気持ち——たぶん、相手の事が好きであるはずなのに、まだその相手の輪郭がぼんやりしていて、逆に、相手に何を求めているのかわからない——だったのではないか？

それでも別れた事がきっかけでお互いの気持ちのベクトルがくつきりと現れたのならそれはそれでいいのかもしれない。

彼のベクトルはゆかりに向き、ゆかりも、微妙に違う方向に向き

かけたベクトルをもとの位置に戻すだけでいい。
そう難しい事じゃない。

映画も期待通りだったし、渉のエスコートはさっぱりしたもので、嫌みが無かった。”梶野のお勧め”の、ダイニングキッチンでの食事でも申し分無かった。

それはゆかりにとって新鮮であり、また戸惑わせるものでもあったが、悪い気分ではなかった。

ゆかりだけ、デザートにパンナコッタを頼んだ。

ブルンと揺れる白い山をスプーンですくって口に運んでいると、渉は何の前置きも無く切り出した。

「あのときゆかりに言った、『人に合わせるイコール、自分が無い』って言うのは単なるオレのこじつけだった。オレだって、楽だったからおまえに合わせていたってところは正直あった。自分が無かったのはオレの方だったんだ。おまえがオレに合わせるところがあったのは”ラクしたい”わけじゃなくて、オレの事を考えてこそ、だったんだろ？　そういうことに後になってから……おまえが隣にいないくなって、気がついたんだ。今更だけど、ごめんな。酷いこと言っただけ」

渉から突然言われた思いがけない言葉が、耳から伝わり、やっと頭の中で消化されるのにやや時間を要した。

あ……ゆかりは口を開きかけ、スプーンをくわえたままだったのに気がつく。

「う、ううん……べつにもういいよ。あの時は渉はボクシングに集中したかったんだって、今になってみれば理解出来るし……あ、今もそうか。でも、それに、確かに私も気が緩んでいたっていうか、太ったのも事実だし。なんかいいダイエットのきっかけになったっ

ていうか……だから渉るが謝ることは無いよ」

「ゆかりは、やさしいんだな。オレ、本当に何も分かってなかった。でも、今は違うから」

彼は真っ直ぐにゆかりを見て言った。

もし彼が変わったのなら。

私も変わらないことはないじゃない。

ダイエットも成功した。もとはと言えば渉との別れがきっかけではなかったか。そして思惑通り彼は再びゆかりに関心を寄せた。

これで、いいんだ。

『どうしても』という渉の言葉を、ゆかりは退けられずに最寄り駅まで送ってもらった。そこからはバスが家の近くまで通っている。日はすっかり落ち、しつとりと夜露を含んだ空気が辺りに漂っていた。

「今日は久々にゆかりと過ごせて楽しかったよ」

「わ、私こそ。いろいろごちそうしてもらっちゃって。ありがとう」

「また、連絡してもいいかな」

彼には珍しい、少し自信のなさそうな問いかけだった。

「あ、うん………あ、あれ私のバス」

上手な別れの言葉を探していたゆかりは、タイミング良くロータリーを回って来たバスに、自分の乗るべき系統の番号が光っているのを見つけてほっとする。

「じゃあ、またな」

「うん。気をつけてね………って、渉は強いもんね」

「今日のおまえには負かされたけど」

渉は苦笑する。

「また、そんなこと言って」

ゆかりは他の乗客に続いてバスに乗り、後ろの席に着くと、窓を見上げる渉に手を振った。彼もそれに片手を上げて応える。

ぶるん

バスがエンジンを吹すと、ぶるぶると車体が揺れ始める。プシューと空気が抜けるような音と同時にドアが閉まり、バスはゆっくり走り出した。

プシュー……

ゆかりの耳に残ったその情けない音は、なんだか自分の胸から聞こえた気がした。

第十六章 自覚と決意

「ゆかり」

掴まった。

ゆかりは、自分の名前を呼び、小走りでこちらへ向かって来る律の姿を認めて一瞬眉をひそめた。

彼は自分の時間割を把握している。休講になるか、授業を休むかしない限り彼が自分を見つけるのは簡単だ。

軽く息を乱して自分の前に立つ、律を見上げる。

「どうしたの？ 久し振りだね」

なんとか顔を引きつらせること無く挨拶ができた。律の方はぎこちなく口元を緩めた。

「うん。久し振りだな。あ、今時間ある？」

「う、うん。後でバイトがあるけど、それまでなら」

ヴィンテージ調の色あせた赤のＴシャツ、デニムはグレーの501。なんてことのない組み合わせなのに、どうして視線は彼に釘付けなんだろう。

「じゃあ、ちよつと話がしたいから。行こう」

律はそれがあたかも自然であるかのようにゆかりの肩を抱いた。

「り、りっちゃん……」

彼はにっこりとゆかりに微笑みかけると、いつものひょうひょうとした横顔を見せて歩き出した。ゆかりはそれ以上何も言えずに、大学を出るまで律に肩を抱かれたまま構内を横切った。

ゆかりに降り注ぐ学生たちの、特に女学生ばかりの視線は真夏の日差しよりも熱かった。少なくともゆかりはそう感じた。

どきどきする。どきどきする。

りっちゃんの手が置かれた肩は自分の肩じゃないみたい。そこだけ孤立しているような。勝手にそこだけ汗ばんでくる気がする。嫌だな。

りっちゃんの手も少し、汗ばんでいる……？

自分に向かって来る律を見たとき、心臓がどくん、と跳ねた。

一瞬、涙腺が緩んで視界がぼやけた。涙腺だけじゃない。神経はぴりぴりと緊張しているのに、体中のありとあらゆる部分が律を受け入れようと、一気に開いた。しっかりと自分を覆っていたはずの殻が、ぱりぱりと音を立てて剥がれ落ちた。空っぽの自分の中に、律を取り込むために。

思いがけない律の出現で、無防備な体は容易く反応してしまった。目を背けていた事実、理性でコントロールしていた感情。

やっぱり、自分は。

「あ、加藤律だ……と、なんだ噂は本当じゃんー」

女学生二人とすれ違った時、そんな言葉が耳をかすめた。その刹那、ゆかりは思わず身を固くした。それは律の手から伝わったらしい。

「なんか、変な噂が広がっているみたいだな」

やっぱり、りっちゃんの耳にも届いていたんだ……。

「町野さんたちから尋問されて。ゆかりとはどういう関係か、って……あ、アイス奢る」

道路を隔てた向こうのコンビニにそのまま誘導される。もちろん、肩に手を置かれたまま。

「いらつしゃいませ」

冷房の効き過ぎた店内。薄いガラスの自動ドアの内と外では別世界だ。

「あ、ちよつと雑誌見ていい？」

律の腕の囲いから抜け出し、ゆかりは窓際の雑誌コーナーに逃げた。ファクション雑誌の一冊を手にとると、目次にさっと目を通す。ぱらぱらとページを繰り、目当てのところではつとそれを開いた。

律もゆかりの後ろからそのページに目を落とす。ふと、フローラル系の香りが鼻先をくすぐった。

フレグランスか、シャンプーかいずれにせよそれはゆかりの体から昇って来たものだった。

律は香りに導かれるように、雑誌からゆかりのうなじに視線を移した。丁度自分の胸の辺りで俯いているため、カラーリングした明るい髪がさりと前にこぼれて白いうなじが露になっている。

しばしそこに視線をとどめ、首のラインにそってそのまま下へ流す。

椎骨の薄い突起。

ボートネックの広い開きから覗く細い鎖骨。

カットソーの線が一度首の延長のラインを遮断し、再び肩の丸みへ繋がって行く。

律は今抱いていた肩の感触を思った。

ゆかりは小柄な方ではなかったが、抱けばやはり彼女が一人の女とわかる繊細な骨格。吸い付くような、温かい肌。

彼はもう一度あの感じを確かめようと、ゆかりのノースリーブの肩に手を伸ばしかけた。

下心なんて無い。ただ、あの感覚をもう一度確かめるだけ。
ゆかりを驚かせるかもしれない。でも言い訳は後で考えればいい。

指先がいよいよその肩に触れそうになった時――

ぱたん

ゆかりが雑誌を閉じた。

律は我に返り、腕をゆらりと落とす。

「うん。今回も面白かった」

彼女が読んでいたのは、人気俳優の連載コラムだった。

ゆかりがラックに戻した雑誌の表紙には、今月の特集なのか彼の顔がアップで写っていた。目元が涼しく、ワイルド系である。

「好きなの？ その俳優」

名前は思い浮かばなかったが、雑誌でもテレビでもよく見る顔だった。

「うん。あ、でも顔だけじゃないよ。この人の書くもの、面白いんだ」

「そんなの、誰が書いてるかわからないじゃん。ゴーストがいるんだよ。でも、へえ、ゆかりはこういう顔が好きなんだ」

「タイプは、って聞かれればそうかなあ。でも、タイプと、好きになる人って必ずしも同じじゃないでしょ。むしろ違うことの方がありがちじゃない？」

ゆかりは言ってから、自分の言葉にどきり、とした。

「あ、アイス奢ってくれるんでしょ？」

律の顔はまともに見れずに、ゆかりはアイスのコーナーに足を向けた。

「だからさ、町野さんたちにはちゃんとやっておいたから。ゆかりとオレはなんでもないって。友達だって」

律はそう言うと、水色の四角いアイスにかじり付いた。コンビニを出たらやっぱりむっとした熱気に襲われた。

ありがとう、と言うべきなのだろうか。いや、アイスのお礼はもう済んだ。この場合は彼が自分たちに関する誤解を解いてくれたことに對してである。それでも、きつと噂は噂のまましばらく構内を漂うことになるだろう。

そんなことをされるよりも却って誤解させておいてもよかったのではないか。そんなことでイジメや嫌がらせに遭うような年頃でもないのだから。

その方が、よかった？

ゆかりはどこか別のところから自分の声を聞いた気がした。

「でも、あいつらも相当暇だよな。人のこといろいろ詮索してさ」
「がりがり、と豪快に律はアイスを齧り続ける。二人は駅に向かって歩いた。」

「それは、りっちゃんが目立つからだよ。みんなりっちゃんと仲良くなりたいたいけど、なかなかチャンスが無いから……」

「ウワサすればオレと仲良くなれるの？ 違うでしょ」

ゆかりが綺麗になったから、オレとなんかあったと訝しんでいるだけだ。彼女が痩せて綺麗になったのは彼女自身が努力したからであって、オレと何かあったと勘ぐるなんてお門違いだ。ただ、オレに見る目があったただけの話。

実際、何も無い。何も。

ゆかりも最初はそうだった。オレが町野や桜井と肉体関係を持たと疑っていた。なんなの？ 女ってみんなそうなの？ 男が女の隣に、女が男の隣にいれば必ずしもヤツたつてというのがテンプレなのかよ？

単に一緒にいて楽しいから隣にいるっていうことは考えに及ばないのか？ 一緒にいたいから、いるって。それ以上でも以下でもない。友達ってそういう楽な部分で付き合えるからいいんじゃないの？ 冗談言い合って、笑って、少し深刻な話をしてお互いを知り得た気になって、難しい話はナシで。軽く腕を叩いたり、頭を小突いたり、肩に手を回したり。

触れたい、と思うのは友達の域を脱することなのか？

さつきはゆかりに逃げられないように、咄嗟に肩を抱いたけど。

コンビニで、もう一度触れたいと思ったのはやっぱりオレの下心なのか？ オレは、彼女に対して感情的になった？ どこかで、焦っている？

「りっちゃん？」

突然何も言わなくなった律をゆかりは不安げに見上げていた。

「あっ！」

律はいきなり、ワッフルを握るゆかりの手を自分のそれで包み、アイスをお口元へ持って行くとぺろりと舐め上げた。

「スキあり」

「ひっどーい」

「ぼーっとしてるのが悪いんだよ。大体、こっち側もう溶けかけてたし」

ど、どっちがぼーっとしてるのよ？ ゆかりは律を睨みながら、慌ててアイスをお口へ運ぶ。律はそんなゆかりを笑いながらも自分のとった行動に密かに驚いていた。

彼女に触れたい。

そう思っただけで、体が勝手に動いていた。

「で、あとさ、モモちゃんが話したこと」

やっぱり、そのこと。

「気にしないでいいから。ていうか、気にしないでホントに。最初からゆかりには関係のない話だし」

「何、その言い方。その関係ない私が無理矢理そんな話を聞かされたのよ？ 無関心でいられるほど無神経だと思う？ それとも私ってそんな薄情な友達なのかな。りっちゃんにとって」

「い、いや、そんな風に思っただけだよ。無理矢理……って言っても、モモちゃんのお節介がちよっと過ぎただけで……」

反論されると思っていなかった律は、正直慌てた。黙って『わかった』と頷いてくれると思っていたのはさすがに虫が良すぎたか。

「じゃあ、どうしていきなりそんなこと言うの？ 言い方もいろいろあると思うんだけど。始めからそんな突き放したようなカンジじゃないくて」

「ただ、オレはゆかりに余計な心配をしてもらいたくなかっただけで。聞いちゃっただけに迷惑だろ。そういうのって。ゆかりにはどうしようもないことじゃないか」

どうしようもない、ゆかりは律の言葉を小さく声にして反芻した。「そうよね、うん。確かに。私も百瀬さんにそう言っただわ」

ゆかりは前を睨んだまま、ぱりぱりとワッフルを齧った。食べている間は言葉を発せない。その隙に律は言葉を重ねた。

「特にゆかりって考え出したらのめり込むタイプだろ。つまらないことにゆかりが悩むなんて時間の無駄なわけだし」

ゆかりはまだ半分残っているワッフルを駅ビルの入り口のゴミ箱

に捨てた。そして、歩みを止めて律を見上げた。

「確かに、私にはそれに関しては友達としてりっちゃんを助けられるようなことは何一つ無い。でも”無理矢理巻き込まれて迷惑被っている人”の特権を使って、2つだけお願いさせてもらっわ」

いつになく強気な態度を見せるゆかりに、律はやや圧倒されていた。

「うん……何？　それが聞けるお願いかどうかはわからないけど」

「もう、ラケルさんと連絡取った？」

ああ、そこか……

「いや、まだだけど」

「じゃあ、ラケルさんに連絡して。ずっと、ずっと待ってると思うの。昔好き合っていたならなおさら……連絡が来たら嬉しいものよ」
「うん。わかった、連絡する……で、もうひとつは？」

今日明日、ってわけにはいかないけど。

律は言葉にはせず、胸の内で呟いた。

「卒論の、書き方を教えて欲しいの。前に言ってたでしょう？　教えてくれるって」

律は肩から力が抜けるのを感じた。彼女の『お願い』を聞くのになぜここまで緊張していたのか自分でもわからなかった。

「そんなこと。……いいよ」

「ありがとう。じゃあ、いつがいい？　りっちゃんの都合のいい日」

再び笑顔を見せたゆかりにつられ、律も微笑む。

「明日」

「え？」

「無理？」

「4限まであるけど、その後なら……」

「じゃあ、4限終わったら図書館でね」

「あ、うん……」

さすがに『明日』というのが想定外だったのか、ゆかりは動揺を隠しきれず、それでも小さく二度、首を縦に振った。そしてまた、俯いてしまふ。話は終わったのだ。

律は、熱気を含んだ空気が一層濃くなったように感じた。駅ビルの入り口はこの時間の客の出入りが激しくないにせよ、長く立ち話をする場所ではなかった。

「バイト前に、なんか食べる？」

「ううん、バイトの子と約束してるから」

ウソの下手なゆかり。

さつき、バイトの時間まで大丈夫、と言ったはず。でも、律にとつてその嘘はありがたかった。少し会わないうちに、ゆかりがなんだが変わったように思い、その彼女という今の状態は自分の手に余るものだった。

「じゃあ、明日」

「うん。明日ね」

改札で軽く手を振って別れ、律は東口へ向かった。

ゆかりは横浜方面の電車に乗る。車内のひんやりした空気が体の熱を奪う。シートに座り、ほっと息をつく。

疲れた……

ゆかりは、膝に置いたりネンのトートバックの刺繍をなぞる指先にただ視線を注いだ。

卒論の指導を頼んだのは、そうした方が”友達関係”が保てると思ったから。律はいずれベルリンに帰るだろう。それがいつなのかわからなかったが、それまで顔を合わせないのは逆に”不自然”のような気がした。理由も無く律を避ければ避ける程、律はそんな自分を許さないだろう。――理由があつたとしても、それが『ラケルとの過去』にまつわることであれば――きっと律は何が何でも自分とコンタクトを取ろうとする。

実際彼はそれを察して、今日、取っている講義の無い日にも関わらず大学までゆかりに会いにきたのだ。

”友達”でいるために、逆に会わないといけない。そうゆかりは思った。自分の気持ちを隠し通し、いつか律が自分の前から姿を消す日まで。ラケルのもとへ帰る日まで。

りっちゃんはラケルのもとへ帰る人。帰らなきゃいけない人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5217o/>

Ziel

2011年11月6日06時29分発行